

鹿兒島県史料集 (33)

江夏十郎関係文書

刊行のことば

鹿児島県史料第三十三集として、ここに『江夏十郎関係文書』を刊行いたします。

今日まで刊行されてきました史料集は、いずれも県史料刊行委員の方々の並々ならぬご努力の賜物にほかなりません。本集は同委員の山田尚二氏（西郷南洲顕彰館長）によって編集・校訂・校閲が進められ、ここに刊行の運びになったものですが、長い期間にわたる先生のお骨折りに対し心からの敬意と感謝を捧げたいと思います。

県史料集の編集刊行の事業は、県立図書館の重要事業の一つとして進められているものでありますが、それはとりも直さず地方研究者の利用に供するためのものであり、また、地方史研究を盛んにするために一助になればという願いも込められております。皆様方のお仕事に少しでもお役に立てば幸甚に存じます。

平成六年三月一日

鹿児島県立図書館長

野口 信太郎

凡 例

一、本文書の原本は、鹿児島県立図書館蔵本である。

二、原本とした図書館本は、写本であって、江夏十郎直筆文書ではない。従って、写本の文字体を忠実に再現することはやめ、旧字・略字・異字は、ほぼ常用漢字に訂正した。カナ等はそのまま採用した。
江夏は「こうか」と読む。

三、本文書の表紙に「大正十年（一九二一）夏騰写温故知新齋主人蔵」とある。温故知新とは大正年代を中心に熱心に本県資料類の収集調査をされた坂田長愛氏である。（芳即正「江夏十郎文書一―鹿児島純心女子短期大学研究紀要第二二号一九九二年」文初の江夏十郎直誼についての解説は坂田長愛氏の文である。

四、本文書の執筆・編集は、山田尚二委員が担当した。

大正十年夏騰写

江夏十郎關係文書 上

温故知新齋

主人蔵

(印)

鹿兒島県史
編纂事務所

江夏十郎直誼は、松崎家号魁解の二男にて、仲之丞幼名といふ重豪公の侍医

江夏喜安、男子なきを以て之が養子と為る、程朱の学を修め、齐彬公に仕へて頗る眷顧を被ること、本書に拠りて知らる、養父喜安之女即ち義姉は、園川といひて、齐彬公御婦人英姫君に奉侍し、御年寄となり老女に昇進し、女丈夫にして才識ありたるを以て、公は内外の事に使役せられたり、公の逝去後は、職を辞し、鹿兒島高麗橋の近傍二隠栖し、老女職に在りし者は、一家を創立せしめ給ふの御家の成規により、園川の家を立て終身十人口を賜ひたりといふ。

大正十五年九月十五日執筆史料齊彬公史料雜記中、篤姫君天降院、入興前に訓戒の語の後附にて書す、長愛・尚江夏家祖先の事は、「金石文誌」中の江夏實業（十郎の二男壯七郎）墓誌に記さる。（今藤惟宏撰）

時代推定表

- | | |
|-------------------|---------------------|
| (1) 嘉永五年（秋）冬カ長崎源吾 | (21) 安政元年九月廿九日 |
| (2) 安政元年三四月比 | (22) |
| (3) 安政元年閏七月か | (23) 安政二年十一月九日 |
| (4) 安政元年六月比か | (24) 嘉永六年十月上旬 |
| (5) 安政元年七月十四日 | (25) 嘉永五年三月十四日 |
| (6) 安政二年四月廿九日か | (26) 嘉永五年四月廿二日 |
| (7) 安政五年七月十一日 | (27) |
| (8) 安政二年六月下旬廿九日か | (28) |
| (9) 安政三年十二月廿九日 | (29) |
| (10) 安政三年八月下旬廿九日か | (30) |
| (11) 安政二年三月廿八日 | (31) |
| (12) 安政二年十月比か | (32) |
| (13) 安政二年卯三月廿八日 | (33) 安政五年六月五日直命の書留か |
| (14) 安政二年十月末頃か | (34) |
| (15) 安政二年 | (35) |
| (16) | (36) |
| (17) | (37) |
| (18) | (38) |
| (19) 安政四年閏五月廿三日 | (39) 慶応四年戊辰八月廿三日 |
| (20) | |

(1)

磯御茶屋内返射炉、水氣除ノ為、西村矢一郎工被仰付候鍋、能出来仕候テ、火底工フセ、其上ヲ八寸程塗上ケ、火ヲ入候得共、鉄流出不仕ト申事ニテ、其後ハ煙突ヲ半バ窒ギ杯仕候処、益熔解不仕段、藤五郎申事ニテ、当月八日ニハ私ニモ参リ候テ、工夫致シ候様前以テ承リ申候付、即其火底ヲ八寸程塗上ケタルモ、西洋ノ法則ヲ失ヒ候ニ付、度法通り塗リ下ケ煙突ヲ窒ギ候義ハ、別テ拙キ事ニ相考申候間、其段藤五郎へモ申間、矢一郎・濱田平右衛門杯ノ術者へモ、其意ヲ含マセ、勿論是迄ハ御作事方ノ下目付共迄、全ク其道ニ昏ク候テ、区々ニ吟味ヲ如へ申候間、此節ハ市來正右衛門其外ノ術者共計リ一致仕セ十分精力ヲ尽申候処、湯沸キ余程宜敷、其日ニハ六尤玉三ツ・十二尤玉二ツ・十五拇柘榴彈一ツ鑄込出来仕候十二日ニハ、又々鉄五百斤ヲ入レ申候処、此節ハ湯沸キ前日ニ益リヨロシク、八十封度腔彈・五十封度腔彈出来仕候、乍恐鍋ヲ火底湯室工御フセ被遊候御工夫ハ、至テ宜敷、一同奉感候、左リナカラ四方ノ水氣兎角乾キ兼候段、矢一郎・平右衛門杯モ申事ニ御座候、是ハ乍恐、私ツラ々々相考申候得ハ水氣山上ヨリ流動致シ候ヲ、火氣ニテ吸引ノ理モ可有御座候間、山ノ方へ三四間隔リ、深サ五尺程モ掘リ切り、堀リノ左右ハ、石垣ヲ堅固築候ハ、山上ヨリ流失ノ水泳(脈カ)ヲ切斷致シ、自然ト早ク乾キ可申歟ト奉存候、此理の当ノ義ニ被 思召候ハ、乍恐 上之御工夫ニテ被仰付度奉願候、勿論此節別段被仰付候返射炉モ無智文盲ノ御作事下目付杯ハ、已レノ当職ヲ精勤イタス迄ニ仕度、製造ハ市來正右衛門・濱

田平右衛門工被仰付、西洋ノ法則ニ毫髮モ不違様為仕度奉存候、此等ノ儀ニ付テモ、大頭ヲ総裁仕者不器量ニテハ、万事私必勝チニ相成、術者共一和不仕、夫故御用条チモ万端埒チ明兼、甚夕大息ノ至ニ御坐候、既ニ先日ハ蒸氣船方坂元與市金物師主取山下左衛門ニハ、御船奉行橋口左衛門無礼ノ疑ヲ掛候事杯ニ、別テ不平ノ意ニテ、最早御斷申上候含候趣、内々市來正右衛門迄申出候由承候付、能々正右衛門工モ申含メ、尚又私直ニモ召呼候テ、橋口等工ノ奉公ニテハ無之、実ニ上様工ノ御奉公ノ事故、左様ノ心得再ヒ不發様益精勤可仕、當時 上ニモ万端御配慮ノ御事ニ被為入候間、御国恩ヲモ可奉報旨真実ニ申間候処、只今ニテハ右兩人モ別テ精勤仕候、イツレ當時ノ良工ハ、此兩人ト濱田平右衛門ニ御座候間、始終御仁徳ニ感服為仕置度義ト奉存候、橋口ハ別テ庸愚不正ノ者ニ御座候間、常ニ頭ヲオサエ置度義ニ奉存候、坂元與市ニハ此以前御金三拾兩拜領被仰付、御厚恩ニ依リ難有、寺社方拜借金迄モ返納仕候由、近頃承リ及申候、山下左衛門義モ兼テ正道ニ相勤困窮ニ有之、濱田平右衛門ニモ同斷精勤仕候間、乍恐何卒 思召ヲ以、式拾金程ツ、モ拜領被仰付候ハ、益々難有忠勤可仕ト奉存候、坂元與市ニハ、以前被下候付、重テノ義ニハ御座候得共、今以打着ノマ、ノ困窮者ニ御座候間、是ニモ拾五金ニテモ被下候ハ、別テ難有カリ可申奉存候、余リ打重リ恐多次第第二奉存候得共、市來正右衛門儀全体極貧ノ者ニテ、家屋數等モ無御座、実兒屋敷ノ角ミエ木屋ノ如ク栖居、殊ニ当年ハ元ノ御製藥方ニテ、藏方願ノ順番ニ当リ居候得共、此節ハ難有、御手元御製藥方工離レ切り被仰、

又新役ト相成、其義モ相叶不申候間、何卒御内々御救助金三十歟五十程モ拝領被仰付被下候ハ、別テ難有可奉存候、尤正右衛門二ハ、御製葉ハ勿論、蒸汽船方・返射炉方諸方ニ相掛精勤仕候間、此段奉拝願候、

嘉永五年
八月廿二
日の仰出

一御発駕前日ノ仰出ハ、惣テ御家老迄拜見の賦ニ御座候処、伊織ノ存寄ニテ御趣法方御用人エハ、拜見致サセタル由ニ御座候得ハ、其外御役人共ハ一人モ承知仕タル者無御座、只海防大砲等ノ御書取ト学問・武道ノ二ヶ条而已、一同難有拜見感服仕候、

一米価ノ事、追々申達、下落ニハ相成候得共ト被遊候一通ノ仰出ハ、郡奉行迄ハ拜見仕セ候由ニ御座候、是以至愚ノ取計長大息ノ至ニ奉存候、手広キ諸郷郡奉行而已ニテハ無御座、地方柙方締方、横目・庄屋其外郷士年寄以下在浦ノ下役ニ至リ、支配頭人数多ノ事ニ御座候処、固陋奸邪ノ奉行共、秘事ノ如クニ心得居候テハ、御仁徳ヲ数万ノ人々エ知セ候儀モ不相叶、何トモ遺恨ノ義ニ奉存候、

一乍恐奉申上候、昨年ヨリ寒暖不揃ニハ有之、殊ニ異国船渡来ニ付テハ、諸国一同奔走、彼是百姓共ニハ農稼ノサマタケ米価ハ追々貴ク相成可申、夫レ而已ナラス、此節町方ノ火災不容易義ニ御座候間、何卒此節ハ、別段諸国ヨリ米御買入被仰渡度義ト奉存候、

一乍恐先程奉申上置候磯永孫四郎義、御徒目付ニテ勤方は迄ノ通ト被仰付候ハ、砲術館御用向毛益精勤可仕奉存候、此段又々奉申上候、

(長崎源吾)

(2)

一去ル八夜五ツ半過、下今町大工ノ栖居候借宅ヨリ出火、初西ノ微風ニ御座候処、九ツ時分ヨリ南風に変シ、風モヤ、強ク相成、半時モ過候処、東風ニ変シ風勢強ク相成申候、初ヨリ火足別テ早ク御座候、是ハ、当春ハ晴天勝チニテ夏ノ比ニモ御座候ハ、早リノ憂モ可有之程故歟ト相考申候、別紙焼跡ノ図ハ、オノツカラ御家老ヨリ疾ニ差上タル筈ニテ通路ノ広メ場所モ、委曲言上仕候義ト奉存候得共、為念奉差上候、石燈籠通り手広ニ御座候故、南方ハ全ク難ヲ遁シ申候、

一市中エ公館被召建候義ハ、元来不宜義ニ御座候間、此節ハ産物方御蔵築地御屋敷、産物方同所へ被召建度義ト奉存候、一当分之木綿織屋の辺ハ、獵師小舟持ノ者共、至テノ好所ニ御座候間、是ハ当織屋ノ脇工無用地面御座候付、同所エ引続キ候様被召建度義ト奉存候、

一乍恐万端寛大之御仁恕、公正之御明断遊シ被下候様、千万拜伏奉仰願候、
安政元年三・四月比

安政元年五月廿九日江戸斎彬公ヨリノ御書翰ノ返答ニテ最後ノ流罪ノ者共云々ノ項ヨリ考フレバ、安政元年閏七月カ

(貼紙)
更に反射
炉一基造
調命

一学校被召建候御趣法、深思仕、既ニ央ハ工夫相付申候得共、イツレ実用ヲ全備仕、後世ニ被達、且ハ天下ニ推シ広メ候テモ不易ノ良法可被建置義ニ御座候間、十分ヲ極メ候テ、申上度奉存候付、此節迄ハ上呈不仕候、乍恐御待被遊被下度奉拝願候、

安政元年 一此節新規ニ被召建候反射炉、御場所ノ伺、其内御届等委曲
四月廿七 相認候書付、五月廿九日上村良節ノ手ヨリ庄太郎玄碩へ向ケ
市來正右 衛門、濱 奉差上候付、此節ハ定テ仰ヲ蒙リ候等ノ事ト奉待上候得共、
田平右衛 門、右ハ イマタ何方ヨリモ不奉伺、イカ、ノ御事ニ候ヤト按シ煩ヒ罷
今一ツ反 射ヲ造調 在申候、只今ノ反射竈ト推並へ、浜手ノ方へ被召建候様有御
可被遊二 付三人掛 座度、左候得ハ御取添御門外通路丈御取込ニ相成事ニ御座候、
候間云云 一高竈水車当分ノ寸法ニテハ、水受微弱ニ御座候間、差渡式
尺広メ出来替被仰付候段、一同吟味仕候間、其通仕度義ト奉
存候、

一新規ニ被召建候反射竈絵図并高竈ニテ焚試ノ次第委敷書記、
鉄モ相添、庄太郎へ向ケ奉差上候間、乍恐御覽被遊被下候様
奉仰願候、反射湿抜ノ所、横幅三尺ニ候ハ、人ノ往来掃除
等出来候様、後來ヲ計畫申候、
一蒸氣船当月出来上リ文ノ絵図ハ、伊集院藤九郎方エ相渡シ
奉差上候、

(3) 一小兒臨察知要 一冊

右ハ、清水養正著述ノ書ニテ、此節被覽仕候処、余程力量御
座候間、奉入 御覽候、
一御小姓被仰付候者、是迄ハ惣テ富家ノ氣マ、一盃ニ育子候
ヲ、黄金ノ力ニテ願達致シ候歟、又ハ何程乱家ニテモ役威有
之者ノ子ハ、イツモ被召仕候様相成、別テ不宜風儀ニ御座候
間、以來ハ家風正敷教導行届候テ、誠実成ル者ヲ御選ヒ被遊
被召使候様、御決定相成度義ト千万奉仰願候、
一稻荷川水道ヲ磯へ貫通ニテ流シ候得ハ、戸柱筋ノ川流ハ全
ク無用ト罷成可申、左候得ハ、多クノ土屋敷ヲ生シ、彼是ノ

良策ニ御座候半ト奉存候、

一蒸氣船ノ車軸ト軸ヲ引廻シ候心木ハ、樫木ニテ製作仕候得
共、其余ハ惣テ銅製ニテ、概壹万七八千斤ニモ及候半ト術者
共申事ニ御座候、左候得ハ、何程樫木ニテモ蒸氣ノ猛烈ニテ
進退任、或風波ノ變動モ有之候得ハ、破折ノ憂ヲ免シ候半歟
ト細工人共ニモ、別テ恐怖仕候、是ハ何卒銅製ニ被召替度義
ト奉存候、最早木ニテ形チハ出来居申候間、鑄造ハ格別手間
入ニモ相成申間敷奉存候、此御船万一車軸相損候テハ、蒸氣
裝破裂ノ程モ難計、左候得ハ、勞シテ功ナキノミナラス、人
迄モ損シ候テハ、実ニ君臣共ニ不知不仁之誹リヲ受可申、此
義ハ、深ク可慎義ト奉存候、

(公用控)

元 七月
十六日 一此節、市來正右衛門出崎被仰付候付テハ、於長崎御内用ノ
一、三原 趣承知可任等ト奉存候得共、万事心得振リノ義ハ、無抜目示
出崎、市 論仕置申候、勿論成田正右衛門・田原直助・中原猶介・濱田
來正右衛 門、御船 平・其外心得有之者エハ、各長スル所ニ順ヒ、數ヶ條ノ策間
手御大工 ヲ取仕立サセ、探索研究仕候様申付候間、罷掃候ハハ、是以
頭福崎仲 左衛門、 合集仕奉差上度奉存候、
坂元与市 一前田龍五郎ニモ此節ハ、御側ノ方エ被召出、別テ難有奉存
瀧間今太 候、
召附云々 同人江被

(3)

一、鑄製方掛見聞役長崎源吾ニハ、別テ好悪ノ者ニテ、愈不
正ヲ働キ諸色売上人共ト心ヲ合セ、下品ノ者ヲモ上品ノ筋ニ
テ御買入ニ相成候様取計申由ニ御座候、当分ニ至候テハ、此
者ヲ惡マヌ人ハ無御座候、何卒此一人ハ早ク御除被下候様、
千万奉拜願候、尤富家ノ事ニモ御座候間、全ク勤方被差免候
テモヨロシク御座候得共、先此涯平横目一篇ノ勤工被召除候

ハ、別テ御寛宥ノ御処置ニ御座候半ト奉存候、
一炭素鉄、長崎工宜敷序御座候間、極内密吟味為仕、其趣別
紙又木書付ノ通ニ御座候、乍恐 御覽被遊被下度奉拜願候、
一、流罪ノ者共、御赦免被仰付候テハ、諸仕一同別テ難有
カリ、是ニテ壅塞ノ者共晴天ヲ見申候テ、情意解可申実ニ難
有奉存候、

(貼紙)

内訂事件
關係

新納立夫の日記、安政元年七月晦日の部に大久保次右衛門釈
難、只今可罷出旨申来罷出候処仰渡、「喜界島へ居住被仰付
置候処、此節 宰相様ヨリ被仰遣趣有之、無御扱御事ニ而、
別段厚思召を以、御赦免被仰付奉公方被障置候」とあれば、
其の後即ち閏七月頃の書翰なるべし、

安政元年六月比か

(端書細字ニテ)

(4) 竈式拾七ニテ、巻ヶ月千八百斤ノ平均

硝子板ハ、惣テ成就相成候哉、当月ハ御届可申上事

蒸気

一初メノ比ハ、炭ノ斤量モ壹俵三斗五升程ツ、モ為有之由、
御座候得共、当分ハ漸ク壹斗五升ヨリ八升位ツ、入候輕俵ヲ
表通ノ規ニ押付候テ、一日壹床ノ吹方ニ五俵ツ、相渡シ賦付
ニ致候義ハ、実ニ無理ナル苛政ニ御座候、夫故與一杯、別テ
不平ノ心ト相成、最早行キ成ニ不致候テハ、致シ方無之中申
居候由、正右衛門・猶介杯モ難息仕り候、左リトテケ様ノ義
ヲ藤五郎工申出候得ハ、却テ申タル者ノ不都合ト相成ル勢ノ

関勇助ハ
安政二年
六月十六
日逝去

由ニ御座候間、イツレ此蒸気船等エモ御意ヲ蒙リ、人々欣然
ノ風ニ変シ可申程ノ人品、御見立被遊度義ト奉存候、

一書籍方人数、追々相重候付、相良助太夫・関勇助杯ノ評議
ニテ、成田正右衛門方ト栖居替ノ筋ニ藤五郎工申出、其段正
右衛門工申渡ニ相成候処、正右衛門義別テ迷惑ニ心得、移替
ノ義ハ奉畏候得共、何卒家内共栖居クツロギ候程ニハ広メ被
遣度段願出候得共、相良関杯藤五郎工計ラヒキビシク叱り付
置候由ニ御座候、然処正右衛門ニハ、甚夕心憂キ事ニ存シキ
リニウラミ申義ト相聞得申候、此義ハ、能々聞合申候得ハ、
実以無理ナル取計ニ御座候、是迄 宰相様御代ヨリ手広キ所
工被召置、家内共ニハ、兼テ出入ノ私門迄モ被下置候処、此
節ヨリ至極ノ手挟キ処工引移リ、女共ニハ、諸士諸役人往来
ノ公門ヨリ出入り仕リ、殊ニ追々他国ノ者モ参り可申、且常
ニハ門弟ノ出入モ多ク、旁難義ニ存候ハ、人情ノ常ニ御座候
半、實ニ苛政ハ虎ヨリ猛ト申如ク、人情忍ヒ難キ義ト奉存候、
賤大夫共ノ胸中ニハ、人ニ不忍ノ仁政ヲ以テ、天下国家ヲ感
化仕セ候事杯ハ、少モ不存付モノト相見得申候、此炎暑ノ時
分ヲ以考候テモ、冷敷ハ人情好ム所、嚴暑ハ人ノ堪難キ所ニ
テ、己ノ不欲所ハ、実ニ人ニ施シ難キ義ト奉存候、和漢古今
実以難得義ニハ御座候得ハ、ヒタスラ願奉り候ハ、一人公明
ニシテ、正大ナル器量ノ者 明君ノ御羽翼ト罷成、御威徳ヲ
四方ニ耀シ度、乍恐只今ニテハ、此良臣ニ御欠キ被遊候ト奉
存候、千万御撰ヒ被遊候ハ、無キ事ハ有御座候間敷、古人ノ
申タル如ク、天下好人無トハ、有道者ノ言ニアラスト御座候
モ、又古人我レヲ不欺義ト奉存候、

一先日ハ、駿河方ヨリ一寸参リ呉候様使ヲ受、則差越申候処、追々御書取ニテ被仰出候ヲ、御家老座書役エヒソカニ写サセ置私前へ差出、是ヲ見ラレヨケ様ニ難有御書取ヲ書写サセ候義モ、同役ニハ知ラセ難ク、誠ニ歎數アリサマナラズヤ、尤此仰出ノ内一ツモ御趣意被行候事無之、イカガ致シ候ハ宜敷事歟ト、誠ニ恐入罷在候、実以同役共ハ、席中ニテ馬ノ咄歟、勝負炮ノ勝負刀掛物ノ目利等ニカキリ、何ノ御用ニモ立者無之、殊ニ御政事向ハ、何事モ御趣法方次第ニ御座候得ハ、皆藤五郎杯ニ極リ候委敷承申候、惣テ右様ノ意味ニテ、駿河ハ藤五郎エハバカリ、藤五郎ハ、御前向ノ御都合ヲ取合セ候迄ニテ、万事不頓着ニ仕、誰レ一人御政事を己レノ任ト存込、真実ニ心配仕候者無御座、実以痛心疾首ニ堪不申候、

一御沙汰遊シ被下候チャン山・吉野童子ケ迫工取仕立申候竈ハ、十五居付候賦ニテ、今日迄二五ツハ相濟セ申候、御城山ノ方取合セ式拾七ニテ、巷ケ月出来高千八百斤程ニハ及候半ト奉存候、最早少モ無間断相働セ候間、乍恐御安慮被遊被下候様奉仰願候、磯ノ返射炉方モ上村良節工御内沙汰被為在候テヨリ、何事モ私方エ申出候様一同相心得、御作事下目付杯ハ、少シハ差図等不仕、正右衛門・猶介ヲ初、濱田其外ノ細工人共迄皆一致仕候付、乍恐此節ハ、万事御配慮不被遊様、取計申度奉存候、

一先ノ返射炉ハ、漸々西南之方工頼キ申候付、是迄道柱等モ解得不申候ト相見得申候、右ニ付段々工夫仕候処、煙突上ヨリ掃除仕候節ハ、常ニ梯子ヲ掛候ニ付、西ノ方ヨリ図ノ如ク張木之兼体ニ仕置キ、東南之角エハ張力ノ為袖ヲ付、図ノ如

ク堅固ニ土台ヨリツキ堅メ候テ、西北ノ角ノ袖ハ、引力之為ニ付置申候、勿論源本ノ図ニ兩方ハ袖ヲ付候所、タシカニ見出申候間、幸ノ事ト考、ケ様ニ仕置申候、イツレ此源図無御座候テモ、張木ハ無クテ不叶勢ニ御座候、成就ノ上見苦敷張木等仕候モ、近頃残り多キ事ト相考、工夫ノ折、平右衛門源図ヲ掛出候テ、此袖ハ何ノ為ニ付候哉ト、頭ヲ傾ケ申候付、是究竟ノ事ト存、即木之手当、御作業エ申候得共、当分ハ在合無御座段申出候付、私見計ヲ以吉野雀ケ宮チャン山エ、松木三拾本請取置候内ヲ大木四本、右袖柱工差向置申候、チャン製法ニハ少モ不差支様、繰合可仕候間、乍恐左様被為聞召置被下候様奉拜願候、

右之絵図ハ、井上庄太郎方ヨリ奉差上候、煙突鉄蓋ノ絵図モ同紙ニ書記奉差上候、
(絵図ナシ)

一新規返射炉用鑄鉄ノ賦書モ、庄太郎方ヨリ奉差上候、此鉄ハ、西洋ニテハ煉鉄之製造ト相見得申候付、鑄製方エ吟味仕ラセ候処、是ニハ大キニ込リ候様子ニテ、中々出来可申義ニテハ無御座、御断申出、鑄鉄ナレバ賦通り御請仕候、是ニテ相調へ申度奉存候、初メ私此鉄ヲ用候様、正右衛門・濱田等エ申聞候時ハ、甚タ恐怖仕、是ハ余リ大造ニ相成候付、石ニテ仕度ト申事ニ御座候ト大キニ打笑ヒ、何ソ少量ナルゾ、人力ノ及所ナレハコソ、西洋ニテモ製候半、此鉄ハ、竈中ノ一大関所ナレハ、法則中ノ大事ソト申聞候処、御入費タニ御イトヒナクハ、此上ナキ事ト彼等ニモ安心仕候、尤鑄鉄ノ惣賦六拾両内外ニ及申候、至テ輕キ事ト奉存候、
一磯高竈工相掛候水勢、トカク微弱ニ有之、川上諸所田地等

ノ分水毛無摠誤合ニ御座候間、別段工夫仕度奉存候、勿論難
通迄同所ニ被召建候節ニ至候テハ、イツレ強力ノ水勢第一ノ
事ト奉存候、稲荷川筋ハ右ノ水道ト別流ニ御座候間、此水ヲ
磯天神社脇田中四郎平衛屋敷ノ辺へ貫通シ、水道ニ仕候得ハ
至テ間敷モ近ク、左ノミ御入費モ多クハ相掛間敷段、郡奉行
共内評ノ義モ承リ申候、此ハ先年吟味仕タル事ト相聞得申候、
此義可宜ト被思召上候ハ、掛ハ郡奉行ハ山口九十郎、地
方検者ハ日高為三左衛門へ被仰付度、左候テ万端私へ引合候
様被仰付被下候ハ、乍恐心ヲ尽シ申度奉存候、右ノ日高ト
申者ハ、名高ノ水利工者ト承リ申候、

一乍恐典姫様ノ御事ニ付奉申上候、此以前ヨリ御ヒハイツモ
三益仕、只今ニモヤハリ其通ニ御座候、然処、三益ハ誠之庸
医ニテ世人ノ知ル所ニ御座候、是迄御業差上候節モ養正工相
談仕候義モ、跡首尾勝チニ仕候由承リ申候、乍恐全躰
典姫様、御脾強トハ申上カタク奉恐察候、貴賤共子共ノ養育
ハ、余程心ヲ配リ不申候テハ、別テ念遣敷御座候、此以來ハ
何卒養正工御ヒ仕候様、被仰付度ト奉存候、左候ハ、御身
ノ為決テ御能ク被為人候半ト奉存候、大底世医モ相談ハ、用
立兼候義ト医者共常ニ申事ニ御座候、実ニ左モ可有御座義ト
相考申候、イツレヒ仕者、主宰ニ罷成申候間、御深慮奉仰願
候、私素人ニテケ様ノ義迄申上候ハ、余リ差過タル事ニ御座
候得共、現在私ニモ子共七人迄手元ヲ不離、養育仕候間、自
然ト心ニ覺ヲ取候処モ御座候、御灸治モ御相応可被遊ハ、必
然ノ義ト奉存候得共、二十日・三十日モ御続キ被遊候テハ、
イカガ可被為在哉、是等モ医師ノ任ニ御座候間、語法ニ相違

ハ無之筈ニ御座候得共、貴賤トナク小兒ハ、精氣至テ微弱ニ
御座候間、御平常ハ、巷ケ月二何日ト申様程能ク差上候ハ、
御養生ノ御為ニハ、却テ御能ク被為人候半歟ト、乍恐奉存候
御灸差上モ、暫時ノ御間ニハ可有御座候得共、連日ノ御事ニ
候得ハ、自然御養生ノ御陽氣ヲクジキ候理モ可有御座、此等
ノ義ニオヒテモ兼テ御窮理ノ御事トハ奉存候得共、始終心ニ
掛リ不得止事奉申上候、
一砲術稽古方ニ付、磯永、市來へ無摠吟味為仕候義、別紙繪
図相濟奉差上候、右ニ付、砲術館ヲ演武館弓場工、御引直ノ
筋ニ相聞得候テハ、高輪ノ御都合イカガト奉存候間、能々御
工風被遊被下度奉仰願候、イツレ追々人数モ相定申候間、別
紙磯永等、吟味無摠義ト奉存候、勿論弓場工モ彼等ヲ差遣見
セ申候処、手広ニモ有之旁都合可宜ト奉存候、

安政元年七月十四日

上書

乍恐上呈仕候、昨三日之便ヨリ左条西村道矢ノ事、奉申上考
ニ而、正右衛門、加治木ヨリノ書状ト道矢ヨリ聞取ノ一冊ハ、
奉差上候処、彼是混雜仕大キニ取急キ申候而、漸ク飛脚ノ間
ニ合候義ニテ書後レ申候間、乍恐間立急飛脚ヲ相待上呈仕候、
其為今日相認、封書ニ仕置候間、何卒御寛宥被思召上被下度
千万奉仰願候、

一先比西村道矢ノ申タル噂ヲ段々承リ申候処、高竈返射炉等
鉄鑄造之事、道矢甚タ不合点ノ義有之候得共、何分濱田平右

(5)

衛門ト不和ニテ伝ヘ置度事モワザト不申聞杯、面会ノ人毎二
悪口難言不止ト申事ニ御座候間、市來工申付、先日ハ加治木
工遣候而、道矢エハ至極叮嚀ニ諭シ、鉄製ハ勿論濱田工不和
ノ趣意モ精微ニ承リ、尚製説ノ当否其マ、一冊ニ記シ置候様
申付候処、子細ニ相知レ申候、則其書付モ昨年ノ便ニ奉差上
候、格別明説モ無御座候得共、中ニハ又心得ニ相成候義モ御
座候間、奉入御覽置候、濱田工不和ノ義ハ、何モ外ノ事ニテ
モ無御座、イツレモ聖賢君子ノ道ヲ聞タル者共ニテハ無御座
己ノ一小芸ヲ天下ニ此上ナキ事ト存込、功ヲ争ヒ候ハ、陋敷
者ノクセニ御座候間、少モ取場ケ候程ノ事ハ無御座、殊ニ道
矢ノ心モ解ケ申候間、乍恐、御安慮奉仰願候、千葉助十郎ニ
モ成田正右衛門承知ノ御国錢製造伝授ノ為、道矢工市來同道
ニテ差越申候、

一吉田出産岩鉄、高竈ニテ石炭・木炭双方共試焚仕候様、福
崎助八ヨリ御意之趣奉伺、委細奉畏候、則石炭ハ出水ノ方エ
百五拾俵、友野市助ヨリ申遣候、近々相届次第試焚仕候、手
數無怠衛者工申付、岩鉄モ帖佐鉄山ヨリ最早取寄申候而、能
ク突キ砕キ、砂鉄ニ仕洗ヒ乾シ、鉄ノ分量試丈ケ出来仕候付
木炭ニテ焚試仕候処、鉄ノ性質柔ニテ余程宜相見得申候、大
塊ノ所ハ宜御座候得共、何分柔カニテ碎ケ難ク不得止事、皮
鉄ノ内成丈宜キ所ヲ撰リ奉差上候、
一助八ヨリ、御意ノ趣奉伺候ニハ、大砲ヲ磨ク所ヲ見分致シ
候様ニトノ御沙汰被為、在候付、駿河工申談、場所定置可申
候得共、トント本来ノ訳ハ難解ト申事ニ御座候間、乍恐是ハ
錐通水車御造立場所、大底見分致シ置、水道ノ利害反射炉鑄

造ノ大砲錐通、彼是工夫仕候様ニトノ御趣意ニテハ無之哉ト
恐察ノマ、申聞候処、則其事也ト承リ申候間、其義ニ候ハ、
水車ノ仕掛ニ依リ、場所ノ高低広狭川源ヨリ水ヲ引候、遠近
曲直田地用水ノ利害得失、中々立談ノ間ニハ、究難キ義ニ付
先ハ水車仕掛ノ絵図等見申候様申聞、去月十日駿河市助回助
八・登良節杯、一同磯工差越、当分取掛居申候、源圖十分一
之絵図拝見為仕候処、一言之好説モ無御座、太装ノ物哉トア
キレタル容子ニテ、此義ハ追々十郎ヨリ申上候段、江戸工御
届ケ可申上置ト承リ申候間、定テ其意ヲ言上仕候半ト奉存候、
勿論雛形モ少々ハ出来仕候付、当月未七八分ハ出来上リ可申、
一同精々相働申候、乍恐御安慮被遊可被下候、御場所ハイッ
レ返射近辺ニテ外氣鉄製竈工不瀉様仕度、尤遠方ニテ持大
砲持運ヒニ甚タ不弁利ニ御座候間、当分ノ高竈左脇一段低キ
所可然奉存候、水利ノ次第ハ、先月奉御願候通稻荷川ヨリ磯
工貫通ノ吟味仕候様、被仰付度義ニ奉存候、左候テ初発ヨリ
私工相談仕候様、乍恐御明断被遊被下候様奉仰願候、
一、山下左衛門・濱田平右衛門工、此節御心付金三拾兩ツ
、被成下、別テ難有頂戴仕候、中ニモ山下ニハ、此春妻ヲ失
ヒ盆祭り前ニテ、一入感動ノ容子ニ御座候、市來正右衛門・
坂元與市ニハ、出崎被仰付候付、此涯仕舞料等被仰付間、罷
歸候上、別段被成下候賦ニ御座候、
一先度ヨリ奉申上候久保田織右衛門ト申者工炭山支配人被仰
付候間、早々山仕込等仕候様申付、尚又玄碩ヨリ藤五郎工申
越ニ相成候、帖佐鉄山ハ罷居候助藏ト申者、ビン丁製心得居
候段、私ヘ申遣付、則赤塚利七ヘ相談仕、久保田方取馴候迄

炭山エ召仕可申、尤硝子師龜次郎へモ細々承り申候処、ビン
丁トハ、紀州ニテ売出シ屋名ニテ、櫻木而已相撰、木柄モ小
キ所計リ用候付、御当地ニテモ是迄谷山鈴山ノ製法ニ、木ヲ
右通り撰候得共、随分ビン丁同様ノ品出来可申候付、鈴山ニ
テ炭焚取馴候者ヲモ一人、右ノ方エ召仕候様、龜次郎ヨリ願
ニ御座候間、助藏ト兩人相談為仕、十分ニ出来候様取計可申
候付、乍恐御安慮奉仰願候、

一右久保田初發炭山願ノ節、私へ羅紗様ノ物ト外ニ何敷白キ
反物ト相見得、式三反取揃持参仕候付、一通り道理申聞ケ其
マ、差返シ申候、然処支配被仰付候後、又々右ノ品ト相見得
持参仕候ニ付、此節ハ嚴敷以来ノ事共申諭差返シ申候、当人
ニモ別テ汗顔ニテ辱人罷歸リ申候、是ハ誠ニ奉申上候程ノ儀
ニハ無御座候得共、僅ニ事ヲ取り候得ハ、忽チ如此御座候間、
當時御趣方法杯ノ勢ニテハ、思知ラレ候儀ト奉存候、初メテ
親敷進物ノ手数ヲ見申候付、実事迄奉申上候、

一市來口坂元出崎ニ付、万端心ヲ配リ申候義ハ、当月末便ヨ
リ可奉申上候、

一去月十一日ニハ、いろは丸エ福崎・上村同道ニテ差越申候
処、帆之上ケ下シ不自由ニテ、湊ノ出入ニ込リ申候段、此
節大高エ渡海ノ船長ヨリ承リ申候間、正右衛門エ申付、長
崎ニテ能々承得申遣候様取計置申候、此段助八エモ申聞置候
付、乍恐此等ノ義モ奉入、御聽置候、

一藪田郷右衛門エ御下ケニ相成候黄紅蝶并私へ仰付候板榔子
モ惣テ芽出不申、近頃残多事ニ奉存候得共、形行御届奉申上
候、

右、乍恐奉申上候、誠惶誠恐昧死百拜

七月十四日 昼九ツ時

江夏十郎

安政二年四月廿九日定式便よりの書翰か

乍恐上呈仕候、益、御機嫌能被為遊御座、恐悅御儀誠惶百拜
奉敬賀候、去月六日ニハ、於、奥御書院

御快氣之御祝被為、在候段、奉伺誠ニ以難有奉拜賀候、

此条原
書ノマ、
一礮反射炉ニテ、此節鑄造仕候鉄砲、イマタ十分ニ無御座、
鉄之性モ剛ク、氣眼等相見得申候、是ハ全ク

是ヨリ下ノ内面不動岩并焼石等多分ニ落チ

鉄中ニ渾合仕候付、其滓ヲ去リ、夫ヨリ鑄込

仕候故、少シ手後レニ相成、湯ノ返リタル訳

ト相考申候、又々近日鑄込ノ節ハ、後レサル

様被是工夫仕含御座候、

是ヨリ上之内面ハ、上之製法精微ニ仕タル訳

ニ御座候哉、少モ損所相見得不申候、

一此節新御造立之返射炉ハ、地固メ等至テ堅実ニ出来仕候、

焼石之義モ、精々相働候様申含、少モ怠不申候間、乍恐

御安慮奉仰願候、天草石焼方之形行ハ、皇山^{皇カ}仲次方ヨリ委細

奉申上候義ト奉存候、

一被仰付置候センマイ、出来仕候間、井上庄太郎エ向ケ奉差

上候、

一ボールハンク御居場、奉伺候通被仰付、難有奉畏候、即ヨ

(6)

以地引等之手配仕度申段、相働可申、材木モ追々集申候間、能ク乾方等仕金物杯ノ手数ヨリ次第ヲ謀リ、無手抜様取計置申候、乍恐左様被 思召上被下候様奉拜願候、

一私義、去ル十四日ヨリ小根占辺田村雲母出候山エ差越、堀方仕被仰付候、綠色之所、能々探索仕候処、雲母之線ハ、巷尺幅モ有之、其左右之岩、別テ美事ナル綠色石四五寸ヨリ七八寸モ相付申候、尤山上エモ山下エモ向、體ニ通り申候、此石之綠色打割候時ハ、真ノ綠青ニ御座候得共、一日モ召置候得ハ、大氣ニ酸化仕、木色ヨリ余程薄ク相成申候、右雲母之中エ至テ固キ貫リ石通り申候、是以取得奉差上候、此山ハ、佐多内ノ浦惣会ノ父母山歟ト相見得、高山至峻大巖石之勢ヒ別テウルワシク御座候、此節又々同所ノ五六町上エ大岩ヲ貫キ、八寸計リノ白土ニ固キ貫リ石通候、緑ト相見得申候間、是モ奉差上候、銀色ノ石ハ、山上ノツルニ御座候、此三ヶ所イツレモ金銀之鏝ニテハ無御座候哉、雲母洗ヒ滓ヲスリ砕キユリ上申候処、何歟金屬ト相見得、鎮底仕候付、為御試奉差上候、何卒又々差越、篤ト見定仕度奉候候、

一磯之蒸氣船、銅壺ノ乗セ付相濟申候、御船オロシハ、来月朔日ニ仕筈ニ御座候、尤此節ハ、銅壺乗セ付御船浮へ等ニ付御船奉行ヨリ全ク正右衛門・猶介杯へ相談不仕、御作事ノ手ニテ乗方モ仕、何モ折田八郎衛一存ト相見得申候、私ニハ、去ル廿四日ニ罷歸リ申候付、乗付之日ハ、居合セ不申候得共、正右衛門杯ニハ、跡以細工人共ヨリ承リ、甚不審ノ事ニ存居申候、折田ノ心底ハ、兼テ御見抜き被遊候哉、乍恐是ニハ、甚心配仕候、

安政二年
四月廿二日
任

一雛形蒸氣船モ先日惣成就ニ相成申候、蒸氣具モ一方ノ銅壺ハ来月初ニ水タメシ仕筈ニ御座候、是以不遠内成就之御届奉申上候様相働申候、

一荒田方現学校取建之願ハ、表向差出候段承申候、別テ奇得之事ニ御座候間、願書写取奉入 御覽候、先度奉申上候御趣法ハ、思召ニ被為 叶候哉、追々宜敷機會ニ罷成申候、

一島津下総工御家老職被 仰付、追々宜敷御都合ニ罷成、誠ニ以難有義ニ奉存候、

一前田龍五郎其外ニモ、此節仕舞次第出府被 仰付、龍五郎別テ難有カリ、即日ヨリ仕舞方ニ取掛、一日ニテモ早ク罷登候合ニ御座候、御当地ノ実情細々御直ニ、御聞取被遊被下候様奉拜願候、

一去月末ニハ、山田壯右衛門ヲ以、齒川迄 御直書被成下候段、御内意奉候得共、此節ハ、為何義モ壯右衛門ヨリ不申遣、別テ心配仕候、私義去ル二月末ニハ、志布志方迴勤ニ付、遠方之事故、往來エ日數掛候旁之訳ヲ以、前月其段ハ乍恐、御免ヲ奉願置候通、上書不仕候、其外ハ、毎月上書不奉、差上事ハ無御座、此義ニ付、何モ間違ハ無御座筈ニ御座候得共、大事ニ相掛義ニ御座候得ハ、別テ心配仕候、是迄ハ乍恐御不例中之御事故、何モ恐怖之外余念無御座候得共、只今ニ相成候テハ、シキリニ心痛仕候、

一、先月末、小根占町綱代之願書写、奉差上候筋奉申上候処取残申候間、此節奉差上候不敬之段ハ、何卒 御寬宥被為遊被下度奉拜願候、
一先月ハ、伊集院藤九郎御通エ参リ正右衛門へ申達候ニハ、

蒸氣船モ只今通り埒不明ズ候テハ、其不手漕ニ相見得候間、少シニテモ早ク御成就ニ相成候様、取急ゲト催促仕、其段モ正右衛門ヨリ細工人共へ相達申候、催促仕義尤ニハ御座候得共、私ニモ追々差越ツラツラ看察仕候処、釘目一ツ雖通候モ容易ニハ参リ不申、何程催促仕候共、翼無キ者ニ翔レト申様ノ義ハ、害有リテ益無キ理ニ御座候間、何卒一同御仁徳ニ感動仕、自ラ励ミ合、篤ト工夫加ヘ候様御座候ハ、急グニハハルカニ勝リ候半ト奉存候、左無ク候テ、ヒタスラニ催促仕候ハ、只々恐怖仕迄ニテ、何ノ工夫吟味モ出申間敷奉存候、

一蒸氣船方金物細工所工、御船奉行橋口方ヨリ月々相渡候炭、追々過分ニ相成候付、此節ヨリ壹ヶ月ニ壹床五俵之賦ヲ以可相渡段、主取坂元與市工申達候由ニ承申候、

安政五年長崎より呈上の書翰か
乍恐上呈仕候、当夏ハ、別テ温熱甚敷、四海一統不順ニ御座候哉、外国舶来之者共、半方ハ病氣ニ御座候、当地之者共ニモ疫症之如ク、煩候者共多分之事ニ御座候、益御機謙能被為遊御座、恐悦之御儀ニ奉拝賀候、乍恐久敷龍顔ヲ不奉

(7) 拜恐伏奉按候、乍恐小臣ニモ少々苦痛仕候得共、日々ノ御用

便ハ、怠慢不仕心配仕候、昨日夕刻松木弘安、当着仕直ニ私旅宿エ立寄、御沙汰之趣奉伺難有奉拝承候、御調文蒸氣船之代料ハ、勝ヲ以「ハントローエン」エ相談仕、五六ヶ年ニ

モ相掛、国産ヲ以追々年賦ニ入付候様内約仕候処、夫ニテ聞濟セ筋ニ「トローエン」迄ハ承知仕候、江戸ヨリ領事官モ昨日「ポーハ」米國軍艦当着仕候間、何分都合能ク示談可仕、乍恐左様被思召上可被下候、尤国産ニ付何ソ望之物モ存付候ハ、無遠慮申間候様申聞置、何モ無如才ヨロシキ都合御座候、細事ハ、私当月末罷掃可奉申上候、阿久の浦蒸氣船修補モ精々取急キ申候、「ロンドンワル」ハ、初メヨリ吹破リ有之候付、作替ニ仕候、明日ハ、飽之浦掛蘭人其外通詞役ニ迄、ターフル料理ノ馳走仕賦ニテ、手当申付置、蘭人杯エモ其段通シ申候処、一同大喜ヒニ御座候、此馳走ニモ金子式拾両余リ、入目掛候段承申候、金子之事モ不足之義有之候ハ、早々可申上トノ御事、弘安ヨリ伺難有奉存、則奉申上候、最早御取入物モ追々重リ、其外公役人肥田濱五郎杯ノ一列、あくの浦ノ伝習方又ハ、掛ノ者通詞等、毎々彦右衛門等之旅宿エ参リ、酒肴ハ勿論、夫ヨリ茶屋エ参リ、夜ニ入候得ハ、遊女エ参リ、其入目料ハ惣テ私承リ申候間、少々ノ金子杯ハ実ニ目ノマフ様ニ御座候、是以外面ヨリハ、イタツラノ様ニ見得申候得共、中々左様ノ事ニテハ無御座、実ハ御用向第一ノ御都合ニ相掛ル事ニ御座候、此計略ヲ初メ候テヨリ、万端都合別テヨロシク相成申候、左リナカラ私一人ハ、決テ参不申候、彦右衛門・仲左衛門・平右衛門・仲右衛門、其外公辺向取ナレタル伝習方ノ者共ノ内

壹商人工申付、私名代ニテ参り候様仕置候、是ハ却テ私一人
エハ、威伏ノ心モ御座候テ、其外エハ内外親敷罷成候故、御
用便ハ至テヨロシク御座候、乍恐私一人ハ、罷リ帰迄、遊所
等エハ決テ参リ不申、此意味ニテ万端宜敷御都合罷成候様可
仕候、少々ハ強ヨ過候方歟ト御念遣モ可被為在候得共、少モ
左様ノ事ニテハ無御座候間、何卒御安慮奉仰願候、
一今日ハ、新渡ノ「セキスタント」勝工相談仕、蘭人ヨリ求
候手筈ニ仕置候、金子ハ、五六十ノ間ニ相済可申候、
一ドイツ版ノ万国図・千八百五十六年之新書図数八拾三枚、
是ハ、此節壹部持渡、尤商人ノ手ニ持居、此盆前金子ニ差支
至テ下料ニ取入呉候様承申候間、ワツカ金三拾兩ニ取入置申
候、近々便ヨリ可奉差上候商人共ニ、決テダマサレハ不仕候
間、乍恐、御一笑奉拝願候、其外是ハヨロシキ品ト心得候物
ハ、段々取入置申候、金子ハ、御渡シ百兩モ最早トクニ仕切
私ノ五十兩モ無御座候間、乍恐早目ニ拝領被仰付被下候様、
奉拝願候、

一硝子板五十枚、薄目ニテ、大概壹部余モ厚サ御座候半ト奉
存候、是モ近便ヨリ可奉差上候、其外閣又ハターフル器等モ
取入置申候、此節持渡ノ砲モ勝工相談仕置候間、都合次第取
入申候ハ、可奉差上候、
一「アメリカ」ノ「ホーハダン」モ、近日又々参候筈ニ御座
候、同国船壹艘ハ、今ニ当浦滞留ニ御座候、此船ハ、唐国へ
亞米利加大頭領不明官罷在候付、一旦唐国工迎ヒニ参リ、直
ニ当地工参り候トノ事ニ御座候、江戸工参り候船ニモ惣テ又
々参リ、魯西亞「フーチセチン」モ英人モ追々参ルニハ、相

安政五年

違無御座段、通詞共ヨリ承申候、
一先度、勝ヨリ奉差上候ハントローエン短筒ノ義ハ、兩日中
勝工都合可仕、何分ノ義近便ヨリ可奉申上候、
一各国人畜圖書壹部、是モ下料取入申候間、近日可奉差上候、
一英・魯・亜船來着次第、イツレ表向、迄一々船将工会取、
惣テ厚意ニ礼対仕候、今日ハ、先右ノ形行奉申上候、誠惶謹
言、
長崎ヨリカ
江夏十郎

午 月十一日

江夏十郎

安政二年鹿兒島よりか

一君子見機而作不俟、終日ト申事ハ、先見明カニ断定不動、
日用生々中、有道之人之神機ニシテ、酬酢万端感ニ随テ後レ
ヲ不取処之明德ニ御座候半、如此道義之命脉ハ、其人ニ非ラ
スシテハ、窺ヒ知ルベキ道理無御座、乍恐當時被召仕候者共
之内、外向之応接、且ハ、日々之御用向取廻シノ御都合等ハ、
利口発明ニ仕候半、唯御国政之大綱、万目時ニ随ヒ宜キヲ制
シ候義ハ、此輩之関リ聞処ニテハ有御座間敷、実ニ大事ハ、
衆ト不権議ノ意味深ク不察候テハ、不叶義ト奉存候、実ニ上
才ハ、古今至テ難得事ト相見得申候得共、一世ニハ、必ス一
世ニ冠タル者有之筈ト奉存候、国ヲ治、天下ヲ御スルノ君ハ、
賢才ヲ得ルヲ第一ノ先務ト被致候テ、尤懇篤信切之事と承リ

(8)

申候、此大眼目ニ慢リ候テハ、明達之君ト雖モ志ヲ其国ニ達スル事モ不能義ニ御座候半、能ク時所位ヲ知り分ニ安スル事ハ、勿論之義ニ御座候得共、其分ヲ尽、事能ハサルハ、有志ノ者之耻ル所ト奉存候、乍恐土風之成化ヲ駿河工被任、平田為衛ヲモ御趣法方工被召入、其外ノ善士ヲモ追々漸次ニ被召出候義、皆御遠國之御良算ニテ、復ヨリ乾ニ至ルノ御精義ト実ニ奉感服候、唯駿河ハ、当時御家老中第一ノ人ニ可有御座候得共、学問無御座、識量隘狭ニシテ、大体ニ暗ク大ニ有為之材ニテハ、有御座間敷候間、益人材御選奉被遊度御事ト奉存候、先度モ奉申上候大山仲衛ニハ、氣節モ別テ堅固ニテ、忠義ノ士ニ御座候間、江戸 御立以後、御門出入等之取締向ヲモ被仰付候テ可然人柄ト奉存候、

一田中八郎右衛門ト申者、当分江戸詰之横目勤ニ御座候由、此者ハ、兼テ学問モ有之、別テ慥成者ト承及申候間、何卒御用ニ立候所工御奉被下度奉拜願候、

一御勝手方書役之内、吉村才之丞・鈴木勇右衛門ト申者共ニハ、常ニ人柄宜敷聞得有之、此比ニ至候テハ、御明德ニ奉感一涯憤発任、是迄御勝手方之御政事向、惣テ名実ヲ失ヒ居候義ヲ、別テ慨歎仕候段承申候、何卒此兩人ハ、近キニ役義御進メ被下候テ、御勝手方御用向取シラハ等、被仰付度義ト奉存候、

一去ル十六日ニハ、関勇助義、中氣ノ煩ニテ死去仕、誠ニ残多キ事ニ御座候、当年ハ、川村與十郎・横山安之丞迄三人ニ及申候、世ニ名有ル者共、如此斃候事ハ、御国家之御為誠ニ恐懼仕義ニ御座候、

一島津帯刀義、是迄無役ニテ権家工詔ヒ不申、兼テ篤実謹行之者ニ御座候段承得申候、豊後ト類家ニテニ男ヲ養子ニ遣シ候、帯刀工ハ、シキリニ隠居ノ願ヲ進メ申候聞得御座候、帯刀義、年モ五十余ニテ、当分ニモ別テ壮勇ニ御座候由、尤豊後トハ、兼テ志不合之者ト承申候、此者ハ早ク番頭様ノ場工被召出度義ト奉存候、

(附記) 此の書ハ、安政二年の書簡なることは、関勇助の逝去は、新納立夫の歌日記に拠れハ、同年の六月十六日なれば也 長愛記

安政三年 辰十二月廿九日上

外寇の禦候義ハ、日本國中ヲ手ノ舞足ノ踐事ヲ不知様、自在ニ鼓舞不致候テハ、相叶申間敷、当時之形勢ニテハ、実ニ破屋之内ニ寇ヲ禦クニ似タル事ト黙止仕候、東西南北笑談ノ間ニ良策ヲ投シ候義、当世実ニ難期奉存候、各国之大小名ハ、皇国御重任之御事御座候処、不得止之至誠ヨリ良臣ヲ奉、与ニ権リ人オヲ撰ヒ、綱領ヲ立万目ヲ張り候大度量之人主、イツレ公或時之御咄ニ、水老公ハ、高才悉ク表発イタクシ、天下皆恐所ニ御座候得共、余リ御氣象過キツマツク処モ有之、深知遠知凶ニ於テハ、イカガ被為人候哉、肥前公ハ、雄才天下ヲ欺ノ御器量ニ御座候半、信義四海ニ溢ノ大徳ハ、大キニ御不足歎ト奉存候、阿部様ニハ、御才器深密ニ被為在候半、果

敢之御力量ニオイテハ、イカガ被成御座候哉、当時幽默無言之中ニ天子ヲ奉保護、大家ヲ被成御左右、強國ヲ致シ、天下ノ雄才ヲシテ西ヨリ東ヨリ思テ、不服事無之、外寇ト皇朝ト主客ノ勢ヲ變シ候義ハ、乍恐御遠國之御義、外ニハ被為在間敷奉存候、此比承候ニハ、小野寺庸齊、奥州工參リ候哉ニ相聞得申候、此者エハ、御手ヲ不被為付候哉、何分ニモ万事御取次仕者之器量、無覺東義ト奉存候、実ニ説命下ニ股肱惟人良臣・惟聖・惟后・非賢不、又惟賢非后不食ト有之如ク、良臣ハ君之服心、実ニ人才ニ御乏敷候テハ、御実意御發達之勢、甚タ力無キ事ト奉存候、

(10) 木脇藤瀨、此烏帽子ヲ取仕立候ニハ、数日精神ヲ込メ一室ニ入、食事モ小娘ノ一手ニテ、調候由ニ御座候間、乍恐、御自身様御試被遊候テモ宜敷奉存候、
此藤瀨事、故実ニハ、数年心ヲ尽少シニテモ法ニ不合歟、来由疑シク御座候得ハ、是非奥ヲ極候性質之者ニ御座候、此折様之烏帽子ハ、弥無相違奉存候間、乍恐、上様思召付之処ニテ、真正ナル物ヲ御手ニ入候御意味合ニテ、早速ニ被召替候方、可然奉存候、人ノ色々ト評議不仕内ト奉存候、御取揚被下候ハ、乍恐藤瀨エハ、何トカ私迄御一句留御褒美、被成

下度奉仰願候、

(11) 一乍恐先日上ノ瀨エ參、地面旁々拜見仕候、
一最初御台場築方之儀、一日ニ船三百艘程檣島工相屯、ゴロ夕石ヲ上ノ瀨工積来、昼夜サカイナシニ相運セ候事、昼夜ニ六百艘、十日ニ六千艘ト相成、一ヶ月ニ一万八千艘ト相成候、二三ヶ月之間、石ヲ相運候ハ、石相応ニ集リ可申候、尤上へ一丈五尺計ハ、切石ヲ以仕方方任ル、左候ハ、異國人右切石ノ所ハヨヂノボル事ハ、出来申間敷ト相考申候、
一夫方七百人相集メ、ソレヲ七ヶ所ニ相分、百人ニ一人ノ奉行ヲ相付、昼夜無怠廻リツキニテ、御台場ツミアケカタ、可然相考申候、
但奉行ノ羽織七色ニ相分ケ、夫方モ七色ニ相分ケタルハ、
ツトクニ着用イタサセ、尤夜ハ、高提灯ヲ運漕船ノ目アテニ相用、
一此台場ハ、三方ニ門ニアリ、中ノ堀リハ、ハカリコトノタメニ候、モシ異國人セメ来候節、四五日ホドハ争戦ニヨヨビ、ソノセツ夜ノ間ニサクラ島并オコシマエ引取御台場中エ、地雷火ヲシカケヨキ、火付ノモノニ人サシノコシ置、堀ノカタワキ三間方穴蔵ヲツクリ、ソノ中エ二人置、上下ニ石ノフタ

ヲカブセヨキ、火ヲツケテ、是又即刻サクラ島工廻サセ候、此二人ノ者ハ、水練ノ妙ヲ得タルモノナレバ、二町計ノ間、人形不相見、其トキニ島ヨリ船ヲ仕立、漕米速ニ助乗セ、島ノヤウ相ワタリ候、且又両島ヨリ三百人程急漕ツケ、御台場エアガリ三ツノ門ヲ占キリ、二ツノ門口ハヒロク、中ノ通りハ、ヨウヤク一人ツ、相通候様イタシ置候、尤二ツノ門ハ、ハカリゴトノ門ナリ、多勢ツメ入ルコトモナラス、走出ルコトモ不相成事、

一此方人数鉄砲ヨリウチ候節、煙ニマカレ、若シ氣絶等ノ節ハ、彼ノ手ノ甲ノ上ニ氣ツケヲ結ツケオキ候ユヘ、ソノ氣ツケヲ口ニクワヘ、マタ皮ノフクロヲ首ニ下ケ、ソノ中ニ握リタル飯ヲ入レオキ、ソレヲ口ニクワヘ候事、

一御台場成就ノ上ハ、浜砂アツサ四尺位シキチラシ可申事、一御台場中ノ鉄砲四十丁ナリ二十丁ツ、連発、万一鉄砲相タギリタルセツハ、用心水ニカハルガハルサシ入、ヒヤシ方可仕候、

一異国人櫓之上、四方ヨリ鉄砲打込候節ハ、内堀ニテ留方致ス含ニ御座候、

一鉄砲イリ出所ノ上ハ、双方ニ四間物ノ木ノ丸太ヲ引ワタシ、アツサ二寸ノ松ノシユウ板ヲ引ノセ、ソレハ敵ヨリ射タル丸ヲヨケ候タメ、仕調置候、

一砲門口ニハ、鉄ノハバ三尺・高サ七尺・アツサ三分位ノトメ板ヲタテ、ソレヲ自由ニ射トキハ、推ヒラキ、ソノアトニ針ガ子ノ糸ヲツケ、自由ニ引廻シテタツルナリ、ソレハ向ヨリ御台場内ヲ見透シモナラス、向ヨリ射リタル玉モ、ソノイ

安政三年
比カ

五月九日

橋口 六右衛門

タニテヨクウケトムベシ、
一後日、御台場ノヒナガタ造リ、調呈上差上度、何様ノ義ニ御座候哉、御伺タテマツリ候、
阿多郷士

(12)

安政三年八月下旬ノ手翰

一御庭方之義、万端不行届ト奉申上候而ハ、私義モ当職之事ニテ、其罪難辭義ニハ御座候得共、何分ニモ後従之私ニテ、別段御沙汰ニテモ不奉蒙候テハ、掛ノ者工差圖モ差過キタル事ノ様ニ被成タリトテ、是迄ノ様ニテハ、御花園内御植物等、不行届ノ様ニ相見得、先日ハ務工相談仕、先内々見聞致候様申シ含メ、篤ト示談之上、伊藤四郎助ニモ掛ノ事ニ御座候間、務ヨリ精々申聞、此涯トヒタト振りハマリ、世話致シ候様内達仕候処、則ヨリ涯立宜敷相成申候、尤是迄ハ、四郎助ニモ外同役同前、泊当番繰廻相勤申候得共、夫ニテハ、泊リノ当日ハ昼ヨリ罷出、翌朝ハ四ツヨリ御暇仕、追々夏向ニモ相成、朝夕ノ水掛等、彼是人足共ヲ召仕候得共、不運統ニ相成事御座候間、泊ノ義ハ、助合候様、務ヨリ同役共工相談仕セ、其通相勤申候、四郎助引合ニハ、渋谷伊右衛門可宜奉存候、此義ニ付テモ、諸役場ニ事情ノ本意奉申上候、惣テ事ノ大小ニ依リ掛人数ノ多少ハ、可有之義ニテ、各主ト仕所御座候得共、百夫ノ長トモ相成り、下知ヲ加ヘ候者多ク御座候テハ、俗ノ諺モ有之如ク、六松頭乗リ覆スト申意味、現在見聞仕義ニ御座候間、役義勤場ノ輕重ニ由リ、人品ノ賢否高下被

召撰、正明ノ者ハ、上ニ立チ下知ヲ伝ヘ、凡庸ノ者ハ、差圖ヲ受候様有御座度義ト奉存候、惣テ人臣タル者ハ、賢愚心ヲ合セ一致ニテ御奉公仕度、本意ニ御座候得共、邪慾ノ者歟、愚昧ノ者頭ニ立居候得ハ、御政道ハ難被行、諸御役場共、是迄其通ニ御座候、此義、何卒

御美斷被為遊被下候様奉拜願候、

一反射炉方ノ義ハ、先度之 御沙汰ニテ、物ノ運ヒハ、追々進ミ可申、別テ難有奉存候、左リナカラ一事奉願候得ハ、又一事ヲ奉願義到来仕、甚恐人義ニハ御座候得共、兎角不奉申上候テハ、全備不仕、往々蔽塞ノ病ヲ免シ候義故、歎息ニ止ミ難ク奉拜願候、先便ニモ奉申上候通、助八・藤九郎決テ心得違ト相考申候義ハ、此迄反射炉ポールバンク硝子竈等、御発起之義ヲ無間違様、取仕立候義ハ、不容易事ト心中ニハ、存居候容子ニ相見得申候得共、何人カ私初正右衛門・猶介杯ノ事ヲ惡敷申上候者有之候而、思召ニ不被為叶義而已存込是迄決而不運ノ事モ有之候半杯、藤九郎ヨリ叱リ候如ク、正右衛門杯エモ度々催促仕、尤藤九郎新夕ニ掛被仰付候付テハ、此涯早々御成就ノ道不相見得候テハ、其功立難ク候付、則ヨリ細工人共ヲモ五十人相重メ可申段、承事御座候得共、反射炉モ雖通台モ象数法度、皆規則ヲ踐候事ニテ、片時ニ陣屋ヲ作り、一夜ニ偽城ヲ建候様ノ度外奇計トハ、類シ難キ義ニ御座候間、ヤハリ是迄ノ通、細工之序ニ順ヒ鍛工何人ヲ相重、鑄物師ノ何人ヲ相重メ候杯ノ事ハ、少モ無手透様吟味ヲ遂ケ申出次第、運ヒヲ付候様有御座度、其段ハ私ヨリモ熟談仕置候得共、兎角病家ニ前医ヲ疑ヒ、陣中ニ將ヲ代ヘ候様心得

居申事ニテ、処シ難キ意味ニ御座候、此節ノ反射炉雖通台等ハ、初免ヨリ深ク 御趣意ヲ奉汲受、源図ニ由リ規則ヲ踐、十分工夫仕候事ニテ、半途ヨリ不案内ノ者、粗略之下知共仕候義ハ、決テ御本意トハ不奉存候ニ付、又々奉拜願候、以来御趣意通り、藤九郎義ハ、磯工差越、見聞之形行御届申上、正右衛門・猶介・源兵衛杯吟味ヲ遂、筋々エ申出候義共、不運候節ハ、速ニ御用弁仕候様、藤九郎口務ニモ相談承、製作諸下知等ハ、以前ヨリ案内ノ者共工被任置度義ト奉存候、此処、意味違不相成様奉拜願候、

一去ル八日、不時飛脚到着仕、当年ハ 御滞府ノ段奉承知候、乍恐此御意味合トハ、兼テ奉恐察居候得共、当春ハ 御下園ト申処ニ一同安心仕居候義ニテ、此節弥 御滞府ト奉詞候テハ、諸役場ヲ初、諸士一統ノ人氣ニ相掛、旁蔽塞ノ角多端ニ相成可申義案中ト奉存候、 御滞府ノ御事ハ、無御摠御訳合モ可被為在候得共、御政道ニ付テハ、潮之陽ヲ含メル如ク、少モ跡エ不退様無御座候テハ、何年相立候共風俗ヲ變革、仕事ハ、難叶義ト奉存候、古人之所謂洗去旧見以來、新意ト御座候モ時運革之數ニ至テハ、雄斷振発之意日ヲ終ル事ヲ不待義ト奉存候、願クハ、正徳美才ノ者、四方ノ御用向ニ被掛置候ハ、 御趣意一貫仕、諸御役人ヨリ諸士一同ニモ、御仁政之重キヲ感得仕候半歟ト、不明ノ私千思万慮仕候テモ、可然人キイマタ見出不申、実ニ長太息ニ不堪罷在候、

一中原猶介事昨年奉願候字文御暇ノ義、当春 御下園迄ハ奉待候様、御内意申含置難有奉存事御座候処、此節御滞府被仰出候付テハ、当人ニモ年月ノ後レ候ヲ、甚々歎息仕義ニ御座

候間、何卒此節ハ、御暇被成下度奉拜願候、只今通長ク召置候而ハ、始終慷慨歎息ニテ、壯士之志氣鬱屈甚ク不便ノ至ニ奉存候間、何卒御憐愍被為召出、被下度奉仰願候、

一私二男壯七郎義毛難有、御趣意ニ奉感、学文御暇奉願度内存罷在処、(昨年中御勤氣ヲ蒙リ在候事故此節)願達仕候ハ、当年八月比迄ニ出府為仕度奉存候間、願書差上申候テ、出府為仕度奉存候間、乍恐奉入

御内聽置候、只愚昧ノ子、往々御用立可申哉ト心痛仕候、

一磯御造立物ノ御届、去月廿九日迄ノ運ヒハ、助八・藤九郎方工同案式通并反射炉図面式枚差出申候、其後去四日迄ノ運ヒ、務方工差出候様承申候間、形行書付ヲ以、務工相渡置申候、

一此藤九郎エ反射炉掛被仰付候付テハ、反射炉ノ方ニテモ、錐通水車ノ方ニテモ、一方ハ、是非此涯早ク御成就相成候様トノ事ニテ、諸細工人共六ツヨリ六ツ迄、無休ニテ相働カセ候様ニトノ趣、藤九郎ヨリ濱田工相達申候段、私ニテハ跡以承申候、然処是迄ハ一日六ツヨリ六ツ迄ニ、兩度ノ休ミニ仕置申候、是夕ニ夏向ニモ相成候得ハ、チト無理歎共相考申事御座候間、無休ノ義ハ差留メ置申候、其訳ハ、反射炉ノ義モ西洋ノ規則通仕事ニテ、骨組等モ惣テ鉄製ニテ、大装ノ斤数ニ及、且ハ燒石積立ノ手数モ、至極精微ニ不仕候テハ、御成就ノ後、損所等ノ憂モ可有御座、尤燒石積立塗上ノ義モ、湿氣ヲ拔候仕事ニテ、初堯ヨリ折角湿氣ヲ不含様、表具師ノ掛物一幅成就仕ニモ、一返裏打仕候テハ、乾上ケニ返仕候テハ、又乾上ケ候如ク、漸々ニ湿氣ヲ拔候様、相心得不申候テハ、

埒明キニ筑上ケ候、竈ハ湿氣多ク含ミ、火ヲ以乾シ候節、縮歩等ノ憂ニモ及可申、ポトルバンク之義ハ、尚以一分之差御座候テモ運動出来不申、至重之大砲ヲ時計機ノ如クニ旋轉仕セ候義ニテ、方員平直之規則全ク度ヲ不失様、不仕候テハ、不相叶義ニ御座候、是以無謀之下知仕、唯々急埒而已心掛候而ハ、御用立申間敷、尤人之精力モカギリアル事ニテ、一日ノ内ニモ、息ツキナガシ氣力ヲ養ヒ候場モ、無御座候テハ、魂氣老へ自然細工ノ誤モ出来可申奉存候故、右之義モ弁論仕差留置申候、不肖之私恐多奉存候得共、命ヲ奉蒙候テヨリ事大小ト無ク、誠ヲ尽相敬御奉公仕候義ニテ、兼々正右衛門・猶介・郷左衛門杯工モ、示談教諭等無怠仕、諸職人共モ御府内ニ上手ノ者召撰ヒ、一同御用弁仕候様相働カセ申候、乍恐正右衛門・猶介杯精勤ノ実意ハ、明白ニ相聞得候様ニト奉拜願候、此節ハ、実ニ御不興ニテモ蒙リ候様、助八・藤九郎杯相心得申候間、私ニハ先万端差相へ罷在候、

一硝子方御用ホツトアス製法ノ義モ、段々工夫仕候処、藍玉所、藍莖ノ灰、別テ宜敷段承申候間、硝子方御用ニ相成度段、藤五郎へモ相談仕置候通、此節助八・藤九郎エ示談仕、惣テ取寄候筋ニ取計置申候、

一落葉松ハ、弥宜敷進ニ御座候、高岡御植付ノ方モ当月末ニハ、何分申出候様相達置申候間、形行可奉申上候間、乍恐左様被為、思召上被下候様奉拜願候、

一郡山一助之事、先月便ヨリモ奉願候通、何卒清水源兵衛同様被仰付被下候様奉拜願候、此者弥宜敷人柄ニテ、文字モ有之往々御用立者ニ御座候間、又々奉仰願候、

御軍賦改
革建書
安政三年
三月十九
日(雜集
五十六)

一此節郷中風儀ノ事、名越彦太夫工 御直書ヲ以被 仰付候
趣、駿河ヨリ兩番頭工相達、組々工申渡ニ相成、誠ニ以御配
慮ノ御義、恐入難有奉存候、此上ニモ別テ心痛仕義ハ、駿河
ノ器量 思召通ニハ有御座間敷、彦太夫ニモ庸人ノ事ニテ、
風俗ノ要路工立候人トハ、不奉存候、君子之徳風小人ノ徳艸
ト御座候如ク、要路ニ立候人ハ、至テ大事ノ義ト奉存候、何
分ニモ苦心義ハ、忠良卓越ノ人才ニ御乏敷義ニ御座候、
一孫四郎・正右衛門ヨリ差出候劔銃ノ一条ハ、藤五郎へ敵敷
御責被遊候ハ、恐怖仕御国元エ相達可申、左候テ掛役共ヨ
リ御請書為差出候義モ、宜敷手数ト奉存候、乍去一ヶ月ニ出
来上リ候筒数モ、余リ多ク御座候テハ、精製ノ義無覚束奉存
候、掛役ノ御請申上候義モ、筒ノ精品肝要ノ事ト奉存候、
一御船奉行寄勤ノ堀四郎左衛門ニハ、以前ヨリ奉申上候通、
別而宜敷人柄ニ御座候間、蒸氣船方工被掛置候ハ、動場一
同氣受モ宜敷罷成候半ト奉存候、折田ニハ、段々私慾ノ間得
御座候間、今形リ被掛置候テハ、治リ中間敷奉存候、
一中原猶介義、去ル廿六日学問御暇ノ願書、別紙之通ニテ、
教授工直ニ差出申候処、教授申候ニハ、先日モ願書差出候人
有之候得共、吟味之訳有之、イマ夕何分不相分候ニ付、先此
願書ハ、持帰リ候様、追テ吟味相決次第可申達候付、其節願
書差出候様トノ事ニ御座候、兩番頭共ニハ、支配ト下之者学問
御暇願出候義ハ、別テ喜ヒ申事ト承申候得共、造士館ノ方ハ、
何様ノ吟味ニテ日数ヲ積申候哉、不審ノ事ニ御座候、
一猶介并私二男ニハ、御暇被成下候上ハ出府掛、長崎工モ十
日計リノ間立寄、西洋ノ義共、現場見聞仕置度内存ニ罷在候

(張紙)

中原猶介に拠れば、安政三年八月にて訓導師久保田新次・

公用和 安政三年八月十九日ノ部

御庭方中原猶介・句読師海江田善之丞・江夏社七郎四名

一助八ヨリ度々相達候義ハ、反射炉焼石ノ義、是迄不運之筋
御沙汰モ有之、甚不都合之事候間、早々製作仕上可申段承事
御座候得共、焼石ノ義ハ、初発ヨリ間違之手数ニ及候義ハ、
乍恐御存知被遊候御事ニテ、其上調合之土等モ、御趣法方エ
申出、催促度々ニ及候テモ、彼役場之不運旁ニテ、弥間後レ
ニ相成申タル事ハ、心付不申、全ク無謀ノ差図ニハ、実ニ困
窮仕申候、シカシ最早此節ハ、調合土モ相揃申候間、精々念
入籠末之義共、全ク無之様精製仕義ニ御座候処、ヤハリ不覚
ノ取急キ申達候事ニテ、不得止事細々理解仕候得共、一切悟
リ不申、道理ハ、其通りニテモ江戸ヨリ不運ノ段、御催促ニ
付テハ、是非此涯埒明候様トノ差図ニ御座候、藤九郎ニモ同
断ノ事ニテ、是ニハ頓ト心痛仕候、急キ候程ノ事ハ、イカニ
モ不怠様、催促可仕候得共、精粗緩急之無差別一図ニ追廻シ
候意味ニテハ、成功ノ後イカニ相成可申哉ト心配仕候、
一硝子方ノ義モ御趣意之通、是迄長崎ニテ蘭人エモ相糺サセ、
其外書籍等探索仕、彼是工夫折衷ノ後、只今漸ク惣龜取仕立
申候間、是ヨリ追々御用相達候義ト奉存候、是以 御明令故
ニ皆々精勤仕候、然処此節ヨリ万端藤九郎工被任筋ト相見得
何モ主宰ニ相成申候テ、硝子器買支配人モ御納戸之買上人工
申付、此涯代料ハ、買形付候後上納之賦ト承申候、是等ノ事
ニ付テモ、不覚之人エ何程御鞭策被遊候共、御用并ニハ相成
申間敷、其人却テ失心仕、益混雜ニ及可申奉存候間、反射炉
錐通台・硝子製作ニハ、諸職人召仕候、差図等ハ、ヤハリ是

迄取馴タル者工被任置候方、万全之御良策ト奉存候、

(張紙)

藤九郎は、伊集院藤九郎にて、齊彬公の妾おすまの方の弟にて、お納戸勤なり、父も藤九郎といひ子は肝付藤四郎といふ。

13 安政二年三月廿八日

乍恐上呈仕候、此節者全被為遊御平愈、御登城迄茂被為最候段奉伺、誠以難有誠惶百拜御祝儀奉申上候、御下国之儀茂当夏二而者、極暑二向候時節故、甚心配仕罷在候処、

御滞府被仰出候段奉伺、千万難有氷解仕候、乍恐当秋之儀、御深慮被為仕候御事歎ト奉恐察候、神機妙算者決而難奉窺義ト者奉存候得共、深ク心裏ニ秘置申度奉存候、乍恐追々暑氣

二向候時節、何卒深ク御保護被為遊被下候様、叩頭百拜奉至願候、私義去月十四日、小根占江渡海仕、佐多・田代・高山

内之浦・志布志・大崎・都之城方迄廻難仕、福山ヨリ去ル十八日帰府仕候、諸郷茂近年天災少ク、殊ニ御仁政ニ感動仕、

人氣追々引立候様子ニ相見得申候、其内芳郷茂御座候間、此節益郡奉行共御撰被遊、且者締方横目等人柄、吟味被仰付候

ハ、百姓共弥力ヲ得、難有稼キ働キ候半ト奉存候、志布志町ニテ締方横目勤谷山惣兵衛ト申者、酒乱ニテ甚夕敷非道申

掛、夜中宿替迄仕、町人共別而難義之様子ニ相聞得申候、能々承合申候得者、左様之者間々入来、大キニ困リ候トノ事ニ

御座候、

一反射炉方一同精勤仕候、此節鑄製仕候鉄砲型等茂、先日ヨリ鑄込之手数迄ニ相成居申候得共、雨天打続ニテ、今日者雨

止次第焚込之筈ニ取計置申候、紙形一枚玄碩へ差向奉入御覽

候、

磯蒸氣船

一磯蒸氣船、余リ長ク相成候付、最初割付之絵図面通二而早目ニ御成就相成候様、且車等モ直方不致、何分早く出来候様

御沙汰之趣、庄太郎ヨリ藤五郎並私へ茂申越奉畏候、イツレ十分之手数ニ仕候得者、日数モ重リ申候得共、当分之俣ニテ

ハ、来月者早目ニ蒸氣具乗セ付ニ相成可申段、細工人共ヨリモ申出候付、精々働セ御届申上候様可仕、乍恐左様被思召上

被下候様奉拜願候、只船ト蒸氣具ト甚不合ニ而、船ノ力、別而無覚束事ト正右衛門杯モ、大キニ難息仕候得共、是者イツ

レ早ク御成就之処ニ、深キ 思召被為在候御事歎ト奉恐察候間、何分ニ茂急キ候様示談仕置候、雛形之方茂同様承知仕候

間、イツレモ早目ニ成就仕候様一同奉畏候、

一ホールハンク雛形成就仕、縮割之銅砲操被試為仕申候処、何モ差支候処無御座、細工人共ニ茂 一同十分ニ心得申候間、

此段奉申上候、右銅砲此節飛脚之間ニ合候様、成就為仕奉差上度相働セ申候、出来次第者藤五郎江相渡、玄碩江向候様

可仕候間、乍恐左様被思召上被下度、恐伏奉拜願候、

一小根占辺田村出産雲母奉差上候処、右之内綠色之所江プラチーナ含候ニ付、近便ヨリ差上候様、良節ヨリ申越奉畏候、

此節ハ、式拾俵程取得御庭江格護仕、追々試術茂為仕度相合罷在候、右之内ニ茂綠色之所御座候付、此節便ヨリ奉差上候、

尚又、近日差越綠色之所モ取得、委細奉申上度奉存候、先達而私付添候而取方仕候時、岩付之方余程固キ処、綠色ニ相見得申候間、此所へ金気含居候半歎ト奉存候、何分ニモ近便ヨリ奉差上候様可仕候、此山巖石ソビへ至而峻威ニ而、九合目

之所ヨリ常ニ水流シ、其瀧間ノ大岩ノ中ヨリ雲母出申候、同敷四合目程ヨリ出候処、別而綠色多ク相見得申候、上ノ方者先年原田某ト申者銀之線也ト申、シバラク堀方仕候得共、銀ハ無之下申候而、取止タル所ト申伝承リ申候、

一高山波見之内(虫食)所之山ヨリ雲母出申候、少々取得候付此節奉差上度相含罷在候得共、先日藤五郎へ帰府之届申出候節見セ申候処、御細工所工試ニ遣候トノ事ニ而、請取申候

(節見セ申候)、左リナカラ近日波見ヨリ式俵程モ、相廻候様取計置申候間、届次第奉入 御覽二度奉存候、

一小根占之内江金色之雲母出申候、是以藤五郎請取申候、此節奉差上候内之浦金雲母ト同様ニ御座候、右茂近便ヨリ奉差上候様可仕候、此金雲母者沢山ニ御座候、

一小根占辺田村雲母之谷ヨリ東北へ十四五町モ隔リ、山ノ頂キニ錫之線モ御座候、是者(虫食)町人又木何某ト申者、少々手ヲ付申候得共、元手金差支取止候処ニ而、坑モ二ヶ所御座候、其所之百姓能ク覚居、余程錫之性モ宜敷、弥沢山ニ出可申ト承リ申候、是モ此節少々奉差上候、

一小根占之町者、弥勞レ申候、去寅年別紙之通筋々願出候得共、佐多之者共利ヲ貪リ、小根之前江網ヲ入候得者、夫丈佐多之魚勢少ク相成候趣ニ而、内意ヲ達、根占之願ハ何ト無ク取揚無之段、委曲承及申候、佐多之浦者、追々渡世茂宜敷相成候様子ニ見聞仕候、イツレモ同敷様方出来候様、御深慮奉仰願候、

一佐多之内阿母ト申所江金屬之線有之段、承リ申候間、則差越余程宜敷鉦ト相見得候間、奉差上候、藤五郎へモ見セ申候

処、黄金之線之様ニモ相見得候ニ付、試度トノ事ニ而少々請取申候、

一、諸所移郷士・百姓共居付之安否、見聞仕候処、兎角二追々離散又者、人之僕婢ニ相成候者、多キ様子ニ御座候、全轄之窮民共、木屋等モ雨露ヲシノキ候計リ、至而カスカ成ル住居ニ而、日用ニ差支候節、相談之力茂有御座間敷、イト不便ニ相見得申候、其内富民壹式家部モ雜居之場所者、在付宜敷段モ承リ申候、何卒以來移方被仰付候節者、拾家ニ壹式家部ツ、富民被召加候様仕度義ニ奉存候、大崎之内荒佐野ト申処工、元禄元年ヨリ享保之頃迄二三十人・四十人程ツ、泉州・撰州辺ヨリ入来、荒野打開キ、当分者高頭百五拾石程モ御座候段承リ申候、尤初発ヨリ五年目迄者無納ニ而、六年日ヨリ郡方内見之上見掛上納、被仰付タル筋ニ帳留モ御座候、此所畠地而已ニテ、万事不自由之義故、当分迄モ夫役御免ニ御座候、移候時者、皆共仕付米被成下、栖居杯百姓ニ者過タル程宜敷相見得申候、此所程栖居者無御座候而モ、大概百姓ニ似合タル程ニ者、御取建被下度義ト奉存候、志布志・大崎・高山辺之地面者、誠ニ広大ナル荒野ニ御座候間、是ニ者、千式千之人ヲ植候而モ、地者尚余リ有リト人毎ニ難申候、一垂水之山中高隈境へ出候鉄者、白鉄之屬類ト相考申候、是以奉差上候、

一右同所出産銀鉦碎砂、奉差上候、

一田代之根来法師、堀跡之坑中ニケ所共ニ朱色之石者、全ク無御座、中々堅固ナル鉦石之様ニ相見得候処御座候間、少々切取奉入 御覽候、右鉦石類者、良節江向ケ奉差上候、

一當時御役人共ヨリ諸士一同之人氣ヲツラツラ勤者仕候得者、
弥仁義之道御好ニ而、上様之御明鏡者、昧マシ奉リ難シト
安心仕候者ハ、甚タ少ク一体之人情マタ半信半疑ニ相見得申
候故、風俗少モ立直リ不申、駿河江御任シ被遊候得共、是以
治体治法ヲ明ラメタ人トハ、相見得不申候間、心配仕居候計
ニ而、全ク手ヲ下シ難キ様子ニ御座候、イツレ人之耳目新マ
ル程之御所置、不被為在候而者、士風一新仕義、別而難キ事
ト奉存候、小人ハ常ニ乱ヲ好ミ、君子ハ常ニ治ヲ好ムト申事、
古今明君賢臣ノ黙知仕ル処ニ者、御座候得共、吉人凶夫ヲ早
ク見分ケ候程之良知ト知り得テ、断定之後子(虫食)者勢を離
散イタシ、吉人ハ勢ヲ合セ候良策遅ク候而者、己ヲ利シ慾ヲ
逞敷イタシ候凶人共集リ候而、忠良之臣ヲモ退ケ明世ヲ乱リ、
彼等乱ヲ好ノ情ヲ遂ルニ近キ意味モ御座候半敷、乍恐、上之
御誠明ニ而者、中々小人共奸知便倭之利口(虫食)露程モ御動
キハ、被為在間敷御事ト奉存候得共、矢張陰奸薄情之者共、
勢ヒ盛大ニ相見得申候間、何卒忠良之者へ者、益々御親愛之
御威光被為召加被下度、千万奉拜願候、古人之所謂上之所好
下必甚焉、上之所軽下莫問焉トハ、夷ニ相違無御座、誠ニ忠
邪之勢ハ、好輕之二字ニ相掛義ト奉存候、江戸表奥表共ニ外
出等之不埒、今ニ相止不申候段、追々承申候、何卒御開合之
上御測設等へ御責被遊被下候様、奉拜願候、

一川村與十郎義船中ニ而、病死仕、誠ニ惜敷人ニ御座候、此
人誠実之忠臣ニ而、往々御用立者ト別而來罷在候処、無是非
次第二御座候、
一大山仲兵衛、此節江戸詰被仰付罷登候、此人者、兼而奉申

上候通誠実篤行之者ニ而、御広敷御用人杯へハ、至而宜敷人
柄ト奉存候、

一島津權五郎へ本家相統被仰付、又七郎御取扱之御明断一同
感服仕、一言モ申人無御座候、是則春秋之明法ニ而、凶夫心
ヲ寒シ可申、実難有奉存候、

一乍恐御礼奉申上度、私佐多へ在旅之節、井上庄太郎ヨリ之
封書相届、御内意之趣、誠惶百拜難有奉畏候、只御配処奉掛
候義、別而重罪之私、恐怖至極ニ奉存候、桜島標の打之節、

一度差越、其後祇園洲標の打之節者、藤五郎ヨリ出張候様承
リ拜見之心ニ而罷出、何一言申タル事モ無御座、其外大砲打
場鑄製方砲術館等へ、当 御留守中者勿論、近年出張候義、

全ク無御座候、先年子共杯召列シ砲術館へ出張義者御座候得
共、是以七八年以前之事ニ御座候、何分ニ茂以來深ク相敬、
御仁政之不都合無之様可仕、尤万事三原へ熟談仕候様ト人、
御沙汰茂難有奉畏候、

安政二年 卯三月廿八日

安政二年 一、蒸氣船能廻兼候処、其後廻出候哉、形行奉申上候様トノ
末

安政二年
九月廿九
日ノ御手
紙の返事

素氣船廻
り兼

御義奉畏候、只今二茂市來・中原別而心配二而、精勤仕候得共、兎角廻兼候義者、割合法則通兼候処二而茂可有御座哉、機具ノ当リ障リ等之所二者、細工人共ニ茂精々吟味仕、尤正右衛門大ニ心配仕義二而、折角早ク廻出候処工夫仕候、江戸之御船者、別而能ク廻リ、外方御評判ニ御座候段、誠ニ以奉恐悅候、御下国之上廿七間船御製造之、思召ニ被為入候得共、先御内々之御事之旨難有奉畏候、

(14)

一 鎌田郷左衛門之義奉申上候処、此節御製葉掛被仰付、恐入難有奉存候、尤此節者、先右老人被召入、御下国之上、又外ニ被召入被下候、思召トノ御義、難有奉畏候、
一 雖通水車之義、別紙ニ奉申上候、何分御趣法方ト御作事方之手数、埒明キ不申候間、何卒申出候義急速御進候様
御沙汰被為在候義、相叶申候得者、別而難有奉存候、
一 一反射炉焼石茂、精々埒明キ候様相勤申候、明礬山土之義、御沙汰被為在候処、是者別而宜敷段、焼物師共吟味仕、三原へ相談仕、早々取寄方之手数致シ呉候様、度々催促仕候得共、如何相心得申候哉、于今一度茂相屈不申、只心而已安セリト申候事二而、力ニ及ヒ不申誠ニ奉恐入候、
一 先度反射炉ニ而鑄立候大砲者、氣眼等茂相見得、且者鉄性コワク出来仕、用立不申候、此節モヤハリ先比之廿四封度三部一割之鉄砲鑄造仕、其次二者、七百目六封度之間鑄立申候而、イツレモ打試ミ手数モ、此節井上ヨリ御達ニ相成候様、
三原申談相勤御届奉申上候筋、早速二濱田等迄モ申付、米月初二者鑄造相調申賦御座候間、乍恐左様被思召上可被下候、
一 御下国之伺、

安政元年
數度にて
最後のも
の、こと
なるか

一 先度成上リ濱田之事奉申上候処、上書 御請取不被遊、前二表ヨリ伺書差上候而、御残念二者被思召上候得共、御(虫食)越之御事二而、無是非次第奉恐入候、左リナカラ此後之所者横目其外目附役之義者、町人ヨリ被召出候、家之者三代不過内者、以来不被仰付筋御達被下候トノ御事、誠ニ以難有奉存候、此度又外之事二而、名分ヲ御正シ被下候トノ御事、則一昨日内分二而、右之御書取拝見仕候、誠ニ以感動百拜奉恐悅候、如何成、御聖慮ニ被為渡候得者、如此公明正大之仰出ト相成候哉、実ニ春秋之明法聖賢之真意二而、鬼神二問候而茂感服之外無御座、余リ難有嬉敷サニ意ニ浮度、毎ニ不覺落涙仕候、右ニ付、又々奉申上候、町家ヨリ被召出候者、三代ヲ過候得共、商売之業仕者共二ハ、士分之勤場へ者不被召仕様被仰付度義ニ奉存候、是迄之通士分江被召出候者、矢張酒屋ヲ立、(14) 實屋ヲ立、其外商事ヲ業ト仕候而者、士商之道弥混雜仕、名分御正之御実意難被行奉存候間、此節ハ少茂御緩へ無ク、益御実意充仕候様奉拜願候、
一 此度遠島人罷歸候様子、細々奉申上候様トノ御義奉畏候、最早一同罷歸山之内作次郎・山口不及板鼻、新納・吉井等之事毎ニ承申候処、皆々恐入難有カリ実二十年前杯ニ御免ヲ蒙リ候義ハ、夢ニ茂不見事ト相心得居申候処、御仁恩之程ニ感動之様子ニ御座候、尤是迄右江相掛候御当地之者共茂、安心仕タル様子ニ而、只今ニ而者トント鳴リヲシツメ、別而靜ニ御座候、新納弥太右衛門二者、隱居之願申上、御免被仰付候由ニ承リ申候、此節罷歸候者之内ニ茂、山之内作次郎一人ハ、別而人品宜敷者ト相見得申候、学問之筋モ正道ニ相聞得申候、

(15)

反射炉方、天草石三千俵重、取寄候義ハ、二月朔日御趣法方
 二階下二而、三原藤五郎へ篤卜口合、即日申遣候筋示談相濟
 居申候、然処同五日別紙之通申來、又々磯之方細工人共へ細
 微二賦方為致申候処、新御造立方ハ勿論、先之返射竈煙突塗
 方入用迄モ見合セ、少々者余計ニ御取寄不相成候而者、燒石
 一ツノ不足ニモ、功ヲ成シ難キ段申出、其趣書付ヲ以申出置
 候義ニ御座候、別紙書付振ニ而者、未何共土賦不申出様相見
 得申候得共、実以先使御届奉申上候通三千俵之重、土ハ藤
 五郎へ私直ニ熟談仕置候処、何事モ右様之意味違ニ而、押々
 ノ過失ニ落子候事御座候間、乍恐前世之流弊御深察被為遊被
 下候様奉拜願候、

一中原猶介廻国之願

(15)

一諸人衣服上下貴賤之無差別、一切ニ絹物用候儀不相成トノ
 事ニ而、途中女中・子供迄、下着にイタシ又者帯ニ而モ少々
 絹物交リ居候得者、名前聞糺、且ハ途中ニ而御法度之品也ト
 申、取揚候モ有之、初免御書取ニ而、上中下ニ依リ細ニ御定
 被遊、且寅年迄ト被仰出候義モ、古物持來候品者、下着又者
 平日用候様トノ御趣意二者、大キニ相違仕、着古シ之品モ夜
 トテモ用候義差留、全ク不用之品ト相成尤棉布、

安政二年
八月

(16)

一蒸氣船機等之義ハ、市來江被仰付置候義ニ而、脇々ヨリ差
 図イタシ候筈ニ而者無之、十郎二者是迄学得タル事ニ而モ無
 之、只今ヨリ習候而其道へ御用相勤候二者不及トノ御事、恐
 入難有百拜奉恐伏候、万事露奉背候心ハ無御座候、甚恐多奉
 存候得共、此節之義者、砲術館鑄方等之事并折田杯ト不和ト
 申義、其外蒸氣船之御製造等ニ付、市來・中原へ機具製作之
 見立ヲ申、差図等ヲ加へ、且者只今ヨリ習得候而、市來等同
 様相勤度杯之事、一ツトシテ私胸中へ全ク影モ発シタル事無
 之義ニ而、甚驚愕仕候、実ニ深ク奉感動候義者、当今御至
 明ニ被為渡、私式者迄モ御捨不被下、御仁心深ク被為人候得
 者、社事情モ明日ニ相分リ申候、若十年以前ニ茂仕候ハ、
 私義ハ如何成行申候哉、誠ニ御厚恩之難有事奉申上ニ尺難ク
 奉存候、唯誠意不至候而、御配慮ヲ奉掛候義者、実二十郎之
 重罪千万奉恐怖候、種子ヲ蓄テ生産ヲ得ルノ術モ御座候半歟、
 一當時、天下一同困窮ニ迫リ申候半、左様ニ而者、諸大名方
 賢愚ト無ク、賤用ニ心ヲ配リ軍政ヲ修、可被申御時勢難止事
 ト奉存候、乍恐御家之御儀茂、既ニ御金元御差支ニ相成候
 容子ニ窺レ申候、先日茂三原之申シタル事ヲ伝へ承り候処ニ、
 大坂ニ而御借金ニ相成ル事ハ、如何程ニ而モ出来可申候得共、
 御返弁之道ガ一向ワカラント語り候由ニ御座候、尤左様之処
 ヲモ工夫不仕候而者、不相濟儀ニ御座候得共、無御抛御当務
 之急ニ付而者、イツレ不被為得止御事候間、諸国未タ手ヲ不
 付、先ニ大坂之金子者、銀主御請申上候丈ケ、何程ニ而モ多

ク御約束二相成度義ト奉存候、當時之勢内外共何様急變到来
茂難計事ト奉存候、勿論金子御借入御返弁之道者、左而已迫
ルヘキ事ニ茂有御座間敷、御散財惣而無用之長物ト罷成詠モ
無御座筈、其中二者種子ヲ蓄而、生産ヲ得ルノ術茂御座候半
敷、何分御明断被為在度御義ト奉存候、

公用控
安政元年
十月廿五
日の部に
園田郷右
衛門・江
夏十郎へ
植木もの
などの用
として諸
郷江廻勤
可被仰付
云々

一玄碩ヨリ申遣候、御城中海上ヨリ不見込様、諸木繁茂仕
候様トノ御義奉畏候、私二者、未奉伺居事御座候得共、則ヨ
リ郷右衛門申談、筋々申達等之手数茂仕候、此上ニ茂何卒小
舟ヨリ沖中へ乗廻リ、御城内者勿論、諸所見透シ之場所看
定任、新規御植付等之要所茂御座候ハ、奉伺候様被仰付度
義ト奉存候、砂揚場辺ヨリ磯御茶屋辺迄之海岸、透々二者、
松木 松 如此ニ志間ツ、隔、植村被仰付候ハ、木之
成長モ早ク、今年モ仕候得者、余程手使ニ罷成可申、尤松
木者、正月ヲ植付之最上下仕事ニ御座候、勿論植付方は迄通
之籠略ニ而者、枯捨リ多ク相成可申、至極進ミ宜敷苗木ヲ選
ビ、根者鎌切ニ而、▽此如ク三角形ニ土ヲ付ケ、植付申候得
者、容易ニ枯候義者無御座、此一事者、私少々心得御座候ニ
付、奉申上置候、山方地方之者共、罷ク存知之事ニ御座候得
共、イツレ信切ニ世話致候様ニ不被仰付候而者、行届申間敷
奉存候、何分御深慮奉伺候、

安政二年
八月廿一
日玉里へ
引越(奥
日記)

一乍恐奉伺候、園川ニ茂既当月廿一日頃ヨリ、玉里へ引越申
筈ニ御座候、右ニ付而者、是迄之如ク、上書等奉差上候手数
少者、難処義モ御座候半、何卒無事平易之御明策被遊置被下
度、千万拜伏奉仰願候、

一中原猶介、修行罷出度、内存之義者、此以前ヨリ承申事御

座候得共、此涯罷出候而者、多端之御用向別而差支ニ及申候
ニ付、御下園迄相待候様申間置、其候安心仕居候得共、御滞
府之段ヲ奉伺シキリニ差急申候間、存分之趣意書取遣候様申
付候処、別紙之通ニ御座候間、乍恐其候書付奉入御覽候、此
者才行共別而宜敷元來之性質茂正敷人ニ而、追々者御側向
へ被召仕候ハ、別而御用立候半ト兼而相含罷在候、尤願意
之義茂一理御座候付、イツレ御明断奉仰願候、

一当分御用向多端之義ニ而、市來・中原迄ニ而者、中々精力
及難ク御座候付、何卒今兩人程モ被召入置被下度、奉拜願候、
宍人者、此節御辺方へ被召入候、鎌田郷左衛門へ掛被仰付義
ニ御座候哉、是迄相勤居候御辺方之者ニ、人柄宜敷者宍人モ
無御座候間、何卒今宍人ハ、中原同郷之者ニ家村吉十郎ト申
者、兼而学問モ出精仕、人柄別而正道ニ御座候間、此涯被召
入、市來・中原同様掛被仰付被下候様、御良策奉仰願候、

(16) 一愛数散荒弘之事ト御座候、書付者、重久玄碩受取候而、同
人御用箱之中へ打込有之候ヲ、正右衛門実兄此節風ト見出、
忠義心ニ而、私へ見セ申候間、奉入御覽候、夕トヒ疾クニ御
覽御座候而茂、玄現江者、御秘シ被下候様、千万奉拜願候、

安政二年
八月末か

一返射炉方入用白炭燒方之義者、別段朝鮮伝之小炉燒二不仕候而者、不宜段、濱田平右衛門ニモ藤五郎へ申出、勿論西村矢一郎ニモ、是迄鑄製方ヨリ取寄セノ買炭ニ而者、返射炉ニ者用難キ段申事ニ而、初メノ程者、藤五郎ニモ其心得ニ御座候処、鑄製方見聞役、当時名高キ奸智私慾之長崎源吾ト申者、奸商共ヨリ多クノ進物ヲ取り、矢張鑄製方一手ヨリ返射炉人用丈御買重ミノ筋、密ニ三原へ申込候処、是モ同意仕候故、市來正右衛門・平右衛門・其外之術者共、一同怒リヲ含ミ、ミスミス差知レタル悪炭ニ而者、水打生燒ケ善悪相混候買ニ而者、鉄モ熔解不宜、殊ニ多分之御損失ニモ相成、且者左様ノ下品ニ而、術者ニ湯沸之不宜ヲ責候而者、御用者相動リ不申候付、形行私ヨリ藤五郎へ是非申達具候様承リ申候間、委曲承届置候而、内々鑄製方并炭売リ上、商人共之干条ヲ聞合申候処、愈不正之働キニ相違無御座、右之奸商共ヨリ田原直助へモヒツケ、疏反物等段々ニ進物仕候得共、直助ニ者全ク受納不仕、惣而差返シ申候由、タシカニ探索仕候間、藤五郎へ者進物之一条ハ何共不申、只朝鮮伝小炉燒別段掛之物共ヨリ申出候通、炭山取仕立ニ相成候様申聞候処、如何相心得候哉、思ヒノ外スラスラト引受申候而、尚掛リ之物共へハ、私ヨリ精敷吟味為仕申出候ハ、直クニ運ヒヨ付候段承リ申候間、則正右衛門・平右衛門へ精微ニ吟味致候様申達、一同別而喜ヒ申候、勿論此義ニ付而モ、第一ニ者正道之支配人ヲ撰ヒ候様申付置候処、市田右近之家來之由ニ而、久保田織右衛門ト申者、年五十余ニ而、別而正道ニモ有之炭製法モ心得居候旨、承リ申候付、則別段聞合トモ仕候得者、年來ノ正道者

ニ相違無御座候、尤卑賤之者、正道ニ者御座候而モ引合無ク、老人ニ而者不宜ト相考申候間、今老人ヲ撰申付度御座候処、幸ヒ又木元右衛門、此以前炭山之支配ヲ願出、肥前ヨリ製者迄モ招呼申候処、脇手ヨリ奸商之為ニ支配ヲ被奪タル事御座候而、其義者願違不仕候得共、其道ニモ賢ク、且ハ此者加リ居申候得者、山場所ニ依リ、在浦人馬等之手數ニ心ヲ尽シ、万事妨ケ不相成様仕可申候付、右之兩人ヲ藤五郎へ申聞候合ニ御座候、左リナカラ私義ハ、乍恐、御直之御差圖ヲ不奉蒙候而者、何モ差扣罷在、不得止事ハ可成丈蔭ニ而御奉公仕可申、乍恐此段モ御聽ニ奉リ入レ置候、

一先日ハ、岩鉄ヲ返射炉ニ人解シ候様、藤五郎ヨリ正右衛門・矢一郎・平右衛門・矢一郎杯へ申付候処、此岩鉄返射炉ニ而熔解仕道理決而無御座候付、高炉ニ而分離之後ニ仕度段、皆々三人共口ヲ揃申出、矢一郎ニ者殊ニ頭ヲ振り、決而解ケヌト争申候得共、是非ト申而、廿三日ニ者岩鉄ヲ入、火勢モ別而猛烈ニ仕候処、矢張り凝体ノ俣ニ而、破碎之容子モ見得不申、皆々大笑仕、能キ湿抜キナリト戲共申タル由ニ御座候、此日ニ者、私ニ者上書共認メ候付、磯へ者參リ不申、是等ハ誠之小事ながら其人一盃之量見ニ而、窮理仕タル実跡ニ御座候間、実跡奉申上候、

一磯永ハ茲ニ入

一亞美理駕、願之通石炭貯場伊豆之大島之内へ御免許モ有之、浦駕ニ而異人へ御和親之次第、委曲相聞得申候、左候得者、俄羅斯回英吉利等茂追々同然之形勢ニ相成可申、識量有之者ハ、皆茲ニ可至トハ見スカシ居タル義ニ而、今更無是非次第

(18)

二者御座候得共、イトヲシキ八十年以前ニ、能キ機会モ有御座筈ヲ、飽迄武威ヲ押サレタル後之手数ニハ、誠ニ浅間敷儀ニ御座候、天下耻ヲ知ラサル者ハ有御座間敷、是ヨリ日本国内人心一変仕候半、信義四海ニ溢レ君コソ勢ハ傾キ可申、誠ニ油断難仕時勢ト奉存候、

一高竈焚試兎角十分ニ無御座、最早書伝之工夫モ疑念起リ候程之事ニ罷成申候間、此節者何卒濱田平右衛門、其外ニ壹兩人志シ有之者無見選候而、長崎へ被遣蘭人へ直伝ヲ受候様、被仰付度儀ト勤考仕候、尤事新敷奉申上候二者、不及義ニ御座候得共、每茂此等之義者、誰ニモ相談仕候義ニ而無御座、私存付候程之事道理ニ叶候義者、乍恐、上様之思召中ノ御事ニ被遊被下候様、奉置願候、

一天下者勢而已ト御座候而者、盛止ム時ハ衰ニ行キ、治止時者乱ニ行ク勢ヒニ可有御座ト奉存候、
一乍恐當時御制治之根元者、大ニ学校ヲ被為興候而、教育之道正明ニ開ケ候儀、第一肝要之義ト奉存候、風儀立直候義、此外二者決而有御座間敷、無学文盲之者共、無寸之尺無星之量ヲ持而、御政事ニ預リ候而者、人之賢否邪止モ見分ケ難ク時務之緩急ヲモ、全ク選候事難計、勸善懲惡之役救ニモ暗ク事情之実ヲ得候儀者、絶而無御座候事ニ而、甚感激ニ堪難ク奉存候、郷中之風儀モ益敗レ、行年長之者ハ酒乱、若年之者ハ無法之口論絶へ不申、近頃ハ大底内分ニ而事被為濟候哉ニ相聞得申候、是等之事ハ畢竟役職之御責メヲ恐レ候由之事カト奉存候、乍恐只今通ニ而者、少モ御油断不被為在、日々ニ

強ク御責被遊度御儀ト奉存候、

一當時至而御急務之御軍艦大砲等日夜御製造之御事ニ付而者、第一其用具出産之根元へ、心ヲ配リ不申候而者、必ス近キ憂ヒニ及可申、当分要路之人之真情ヲ察申候ニ、表向形之如ク都合仕候計ニ而、至誠惻怛中ヨリ真実ニ配慮仕候者ハ、全ク無御座容子ニ相見得申候、材木モ切取候計ニ而、年々生育之道ニオロソカニ候而者、飢ニ臨耕ス之後悔ニ及可申ト奉存候、一季後候而得者一年之成功ヲ失ヒ可申、実ニ残多キ事ニ御座候、山者、山奉行之職分ヲ御責可被遊義二者御座候得共、何分ニ茂重役之者之大任ヲ由ニ、御責可被遊御事ト奉存候、当春東目廻勤之節、荒野之茅芒之所者、勿論三五年モ生育致候松山、其外里近キ竹山雜木之茂リ候所迄モ、野火ノ不入所者相少ク殊ニ始良ヨリ高山へ通行仕候節者、百年内外ヲ無難ニ歴タル並松、左右共数里之間惣而燒ケ倒レ居申候、実以此堂々タル御大國ニ御政事ニ心ヲ苦シメ、財用ヲ愛候者、無御座事歎ト存候得者、憤激痛心ニ堪不申候、其節駿河・福崎其外之御役々モ私ヨリ兩日後レ通行仕候、如何手ヲ付申候哉、一言之噂モ承及不申候、

安政二年

安政四年

(19) 御当地蒸氣船御製造並雛形蒸氣船有様ニ付、江戸表ヨリ度々御諭之趣、誠ニ以難有奉存罷在候、早川務罷下候節茂、諺御沙汰之趣恐入難有奉存候、然処右両蒸氣船製造方ニ付而ハ、前後共私差圖等仕タル義ニ而者全無御座、尤庄太郎ヨリ虫食越之義モ御座候得共、其段者取次正右衛門へ申達候迄ニ御座候、夫故此節茂別段御断ヲモ不奉申上、雛形之義者、長崎ニ

而三原藤五郎・七左衛門・正右衛門・梅田市藏杯申合候義御座候而、罷歸右之者共申談、繪図者梅田市藏取調候由、此節承申候、私二者磯へ參掛ケ、誠ノマレマレニ立寄見申候計、金子等モ何程之御入償ニ及候哉存知不申、乍去正右衛門終リ迄尾ヲ取候義故、私義モ同様製造之差図ヲ加へ候様、申上タル者御座候半、是者決而左様之義ニ而者無御座候、尤遁辞共奉申上、私ニ而者無御座、右之義共者正右衛門者勿論、清水源兵衛二者、見聞役之事ニ而始終相詰居候儀、故事情之形行心目ニ忘レ候義ハ、有御座間敷、右之雛形之船者、御役屋敷ニ而製造ニ相成、機器者與市所ニ而製造ニ相成、本船之義ハ、御船手之者共相詰屋候事ニ而、初之程ハ間々拜見ニ茂參り候得共、下之浜へ廻候、後者拜見ニ茂差越不申、尤正右衛門トテモ実ニ庄太郎ヨリ申越候通、初被定置候図面通ニ而、少々ニ而茂相替候義ハ、不相叶トノ趣ヲ守リ申タル義、相違無御座、則別紙井上問合之通申達置申候義、此節新夕ニ奉申上ニ茂及申間敷候得共、以前務ヨリ承候意味、其外段々人々之申候義ヲ察知仕候二者、七右衛門ヨリ庄太郎江申含メ、庄太郎始終讒言ヲ逞敷仕タルニ而御座候半、乍恐此節蒸氣船之事ニ付、金子等之儀何程入タル事茂十郎者知シ類トノ御意、何ト力御半信半疑之様奉恐察甚奉恐怖候、却而私二者御船手之者共ト、正右衛門・猶介杯六ヶ敷事共到来仕候節者、始終蔭ヨリ平和之道ヲ教導仕タル義者御座候、乍恐私儀、彼之小丈夫共之如ク人之能ヲ嫉、人之勢ヒヲ羨ミ己レニ利シテ有罪ヲ掩ヒ、生ヲ貪リ死ヲ怖レ候、不忠不義之心底者天落地覆候共、盟而無御座、万一何事ニ而茂御疑念之御事共、御氷解不

被為遊候而者、何程忠良之臣茂終二者、素志ヲ保チ候義相叶申間敷、如何仕候而宜敷御座候哉、私義庄太郎・七左衛門・正右衛門・源兵衛杯、一所ニ召置説破可仕哉、是以実者道義上品之行ト者、不奉存候得共、偽ヲ切ニ仕者御座候而者、御明鑑之妨ニ罷成可申、甚痛心疾首之至ニ奉存候、実ニ枯木モ采色ヲ加へ候得者、堂上之器ト為リ珠玉モ淤泥ヲ塗リ候得者、楚王茂不悟之矢リ御座候間、堯舜之明茂人ヲ知ルニ在リノ嘆息、尤ノ義ト奉存候、古語ニ白頭マテ如新トハ、初而相識ヨリ白頭ニ至迄、不相知傾益(虫食)如何(虫食)一見シテ、旧識之如キ義ニ御座候半、若又正明忠良之名臣茂面ヲ回、ケ行ヲ汚シ諂諛之人ニ阿順イタシ候様ニト申候而ハ、却而真小人之為ニ笑ワレ可申、終ニハ李林甫之為ニ巖穴海辺ニ伏死之者モ御座候半、幸ニ今上二者至明至仁ニ被為渡候御事故、私如キ愚陋之者茂朝夕ヲ御厚德之下ニ送り申事、千万難有奉存候、唯奉仰願候義者、何卒御憐ヲ被為加御疑念ヲ御氷解遊シ被下候得者、

千万難有奉存候、惶恐昧死謹言、

巳閏五月廿三日

安政四年也

安政三年
20 一燒石上品ニ相成候御届之事

落葉松之御届並種子ニ而茂御下シニ相成度事、
落葉松者江戸向ニ而、家作等ニ相用候赤松ニ御座候哉、左様ノ良材ニ御座候ハ、何程ニ而モ多ク御仕立ニ相成度奉

存候、追々ハ種子ヲモ御下シ被遊度事ト奉存候、

一御庭御植物之御届、

一荒田之者共、愈学問勉強仕候事、

一堀四郎左衛門折田之事、

堀四郎左衛門義ハ、以前ヨリ奉申上候通、至而心術正敷者

二御座候、当分御船奉行寄勤被仰付置候付、蒸氣船方江被

掛置度候(魚食)蒸氣当分掛下日付小野田嘉兵衛、

一硝子方彦太郎・倉次郎身分之事、

其外ハ、家来ニ而被召置可然事、

一小田正太郎身分之事、

当正太郎二者、いまた身分不被定置、然処三原藤五郎出立

前之咄二者、江戸江罷登候ハ、正太郎者御小人ニ被召入

候様可申上与書役共承居候由ニ而、掛申置候由ニ承申候、

一源右衛門儀、江戸詰交代ニ而、当八月比出府仕候付、序ニ

長崎江被遊候ハ、航海測量等精微ニ質問相調、往々御実用

ニ相成可申義与奉存候、

一平右衛門義、與市同様之向ニ而、長崎江返射炉・高竈・精

製竈等、蘭人江質問仕セ候ハ、愈精微ニ罷成候半与奉存候、

何卒此涯暫ク之間、御遣ニ相成候様奉仰願候、

一硝子種子製法之試、精々工夫仕候処、鉛之性モ別而宜敷罷

成、硝子石粉之義茂キリシタル製同様、惣而ボンスニ而洗上

ケ、試度心付申候間、是以此節者左様ニ手筈仕候、然シボン

スハ、時節ヲクレ申候間、何ガナ代表ニ仕度、工夫仕候処、

当分梅子ノ時節ニ御座候間、猶介・正右衛門杯ハ吟味仕候処、

梅酢ハ鉄氣ヲ消散致スニハ、別而可宜、尚又塩氣ヲ知り水沁

之手数等茂至極ニ窮理仕、追々舶来品ニ無相違様仕度法存候、
尤成功之次第ハ追々可奉申上候、

安政三年 一大砲船破損仕、誠ニ残念之至奉存候、古語ニ人事ヲ尽而天

命ヲ待与御座候如ク、行届申候ハ、実無是非次第ニ而安心

仕外無御座候得共、此節之義ハ、先比モ奉申上候通、乗組之

人数モ出帆差掛被仰付、只一度茂内海乗試モ不仕、尤水師之

者共茂兼而島方渡海ニ而モ仕、海上四時潮汐風氣等之心得有

之者共二者、海岸ヨリ逃去リ中乗之士共二者、皆手寄宜敷者

願勝申付、人品能否之吟味無御座候付、兼而心得無之者共、

風波ニ動揺仕候而者、只々身之怖敷ニ失心仕、方位測量等者

意外之事ニ可有御座、実ニ天災而已ニ帰シ難ク奉存候、尤船

之製造茂いまた西洋同前二者参兼候所茂可有御座、旁 御深

慮被為遊度御時節与奉存候、実ニ要路二人無キ事、愧報憤激

ニ難耐奉存候、水師之去就者、被下方之軽重ニ依候義、相違

有御座間敷奉存候、

一向井新兵衛江 御沙汰之趣奉伺恐入難有奉存候、磯之御造

立者、勿論万端無怠精勤為仕、正右衛門・猶介・郷左衛門・

源兵衛・其外主取職之者共江厚ク相含セ、弥十分之御成就相

成候様可仕、乍恐 御安慮奉相願候、当分懈候而、御着前差

掛間ニ合之急均為働候而、上ヲ奉敷事共ハ、天地ニ盟ヒ無之

事御座候間、何卒 御明察被為遊被下度、千万奉拜願候、

一コンストリクチャーフル

右之兵書者、近世和蘭之軍政ニ定リ、兵器等之規則、悉ク相

備當時要書之段、山田正太郎之申事御座候、右者御蔵書之御

事故、何卒早ク和解致シ差上度モノト承候付、此段モ奉申上

安政三年
三月十九
日四国沖
ニテ大風
ニ逢ヒシ
也

置候、

一 琉人立二付、進物取之義、此節横目閣合御座候処、末川近江へヒソカニ為知候者有之、近江大キニ恐怖致たる様子ニ而進物致候者共、多人数江一々返礼ト名付、金子十兩賞候方江者、七百疋位五十兩賞候方江者、式三兩ツ、口上書相添遣候二付、一同大物笑仕候、自カラ不正之証抛ヲ表シタリト、嘲リ申事御座候、国老之身ニ而、如此卑陋之事御座候而者、一日茂難被召置儀ト奉存候、おのつから此義者、表向御聽通ニ相成候半与奉存候、

(張紙) 安政三年か

末川近江の家老を罷めされしは、安政三年六月廿一日なればその少し以前なるべし

安政元年九月廿九日書翰

安政元年正月廿一日御発駕。大砲船御覽ハ嘉永六年十一月十三日東目巡見出
発ノ時ナルベシ、

一 御発駕前核島琉大砲船御覽之節、御乗船中ニ而被仰付置候標的打試之義、藤五郎杯へモ度々催促仕候得共、兎角不頓着ニ而、是迄延引仕候之義者、風ヲ吹込ミ丸ク仕度奉存候処、一 発的中仕候得者、其俣ヒシゲ候憂茂御座候間、彼是勘考仕矢張御工夫ニ基キ、図ノ如ク標的ヲ作り、打仕舞候後者、御作事江格護仕置、又々打試之節者、損所取繕ヒ往々相用候様仕置候、此節者御家老共ヲ初、成田正右衛門・田原直助、其外若者共迄、一同別而難有カリ感服仕候、右標的之図並試法之次第、成田正右衛門・田原直助・橋口源右衛門、各々書取らせ奉差上候、右者庄太郎ヨリ奉入御覽候様差廻申候、当年者吉野原調練茂草深ニ而、相調不申段駿河ヨリ承リ申候間、来月者又々別紙之通り祇園之洲御台場ヨリ標的打試為仕候、

此節ハ町数距離モ十五六町ニ仕度段申出候付、筏茂長サ十二間ニ作續キ、的之義ハ、砲門之如ク三ヶ所ニ表シ候様仕置候、右核島ニ而打試之節者、伊織・近江・駿河三人共差越申候、御趣法方ハ誰モ掛合不申候、

一新規ニ被召建候反射竈御居場所繪図ニ而※44 当分之竈与余リ相離候而者、大砲鑄込之節、都合不宜候付、成丈ヶ近ク寄候様、御意之段玄傾方ヨリ奉伺方奉畏候、右者全ク当分之反射竈、永ク保難ク相心得候処ヨリ遠ク仕候得共、只今袖ヲ付候手数ニ及申候処、随分堅固ニ相成可申奉存候間、双方ヨリ溶解鉄太氣之為ニ凝固不仕程之度ヲ測量仕、此節思召之通近ク仕、又々図面奉差上候、尤此炉、初ハ東南へ傾キ居申候処、当分ニ而者、東北ニ傾キ申候、いつの間ニ如此変申候哉、(八月)

去月中旬比、夜中ニ而モ俄ニ傾たる義ト考申候、以来方一破損仕、御作替ニ相成候而モ、新規之反射竈ハ、只今之処ニ而少モ差支候筋者有御座候間數奉存候、

一 御取添地面者、玄鎮ヨリ掛合之通少モ無手拔取計置申候間、乍恐 御安慮被為遊被下度奉拜願候、

一 チャン製法茂益精勤為仕、当分ニ而者品柄モ別而宜敷兼而千斤位ツ、ハ貯へ御座候間、御船之御用少モ差支無御座候、高竈溶解鉄、此節者余程宜敷出来仕候間、奉差上候、

一 西田川筋修補ニ取付申候間、最早当年中者、高竈焚方者相調不申候付、乍恐左様被為 聞召置被下候様、奉拜願候、

安政元年
九月十八日
一去ル十八日頃出帆之大廻船大栄丸ヨリ、此節反射炉※46ノ方ニ而、初而溶解仕鑄造之十二封度彈・二六封度彈ニ奉差上候、此節細工人共いさゝか試ニ湯汲一ツ・火カキ一ツ鑄込

仕候処、別而美事ニ出来仕、少之疵毛無御座候、来月者、又
早目ニ海手之方へ焚試仕候様、取計置申候、

一炭素鉄、追々製作仕、此節者、乍少々四斤程藤五郎へ委敷
申遣、長崎ニ而申請方往々相進候様、手筈等計被置セ申候、

※47 江も八斤程出来上り、追々取馴候而、品柄も別而宜敷
相成申候、

一硝子師龜次郎ニ茂、当分ハ別而精勤仕、尤家内困窮ニモ相
身得申候間、御内々御心付金被成下候様、駿河並藤五郎へ相
談仕、去ル十八日龜次郎へ御内々金三拾両、被成下候段申達
拝領為仕候処、益々御恩沢ニ感動仕、別而難有カリ早ク此冬
者、妻子へ寒サヲ為凌候義、偏ニ上様之御厚恩也ト家内共重
而難有カリ居候段承リ申候、此義奉伺度本意ニ御座候得共、
既ニ寒氣ニモ向ヒ、細工等モ別而精勤仕、能キ御機会ト心付、
乍恐右之通取計申候、何卒御寛宥奉仰願候、

一五十封度本台

一二十樽 本台

一試葉白砲

右者此前より成田正右衛門・田原直助杯、早ク御出来相成候
様頼リニ歎願仕候得共、誰有而取揚候者茂無御座候処、此節
者、他邦之人ニ茂追々拜見ヲモ願候得者、甚タ耻敷事候、橋
口源右衛門杯迄茂別而歎キ申候間、何卒本台之二ツハ反射炉
ニ而、製造仕度御座候得共、未鉄之溶解十分ニ無御座候間、
先度御下ケ被下候、井上次兵衛鑄製之手数ニ而相調申度、此
義駿河へ相談仕、願通出来相成候様、表向御軍役方ヨリ成田
田原之兩人江中付相成申候、試葉白砲ハ、銅製法則通り製作

可仕奉存候、

一ヲクタント測量法並八線表算法、橋口源右衛門余程能ク心
得罷在候間、才器有之若者共へ、追々学ハセ用立候様、仕度
奉存候付、何卒測量術之書并セキスタント之測器、乍恐私迄
御下ケ被遊被下候得者、別而難有奉存候、

一去ル十八日、橋口源右衛門召連、当分御船手御格護相成居
ルヲクタントヲ持參付、瀧之上川筋より磯高竈迄之地形高低
測量仕候、源右衛門江者線表之算當為仕候処、別紙之通磯之
方者、式拾六間五尺余低ク御座候、直形ハ式町之内ト相考申
候、曲流御座候而モ三町二者、過キ申間數ト吟味仕候、此上
ハ、貫キ通シ之吟味一筋ニ御座候、貫キ筋祢ば土又ハ白砂ト
申候場所ナレバ、何ノ苦モ無御座候段、兼而心得有之者共ヨ
リ承申候、先度ヨリ奉申上候通、下田村ヨリ磯迄別而難場卷
里廿三町之間、御修補賦高金四百兩余ニ及候段承申候、右之
通ニ而、此節者、水勢茂十分掛リ可申候得共、両三年之間ニ
者、又々破損所々ニ起リ候半敷ト、ツラツラ勘考ニ渡申候、
右之御入目金程モ貫キ通シニ差向候ハ、十分ニ出来候半与
奉存候、尤出来上り候得者、後難モ薄ク水之掛加減茂心之俣
ニ出来相成可申ト奉存候、此段ハ駿河へモ申聞候処、至極尤
ト申事ニ而、福崎助八へモ相談仕候得共、何分御政務之事ニ
心ヲ不用者共、矢張夫成ニ召置誠ニ苦心仕候、夫々吟味仕ラ
セ候而、場所土柄等不宜候ハ、取止候事ト奉存候、乍恐
御意ニ被為叶候ハ、御内意奉拜願候、尤瀧之上川筋ハ、水
勢別而多ク御座候間、磯江分水仕候而モ、銃薬・水車方杯ニ
者、少モ不足ハ無御座ト相考申候、若此義思ヒ通出来仕候得

安政元年
九月廿五
日蒸汽船
木屋焼失

者、下田ヨリ高度ヲ渡リ候川水者、田地用水迄ニ而、末流者又瀧之上江返流仕候、

一去ル廿五日朝四ツ時、蒸氣船御造立方大工木屋軒焼失仕、誠ニ以恐入候次第、御船手之者一同、不念之差扣奉伺候、右ニ付、私ニ茂早々走付申候処、蒸氣船掛リ御道具ニ者損失無御座、消方ニ働候人足共之内、三人少々怪我仕候付、全快迄之間、日用賃錢其俸毎日被下候筋ニ取計置申候、大工共ニ茂細工道具等焼失之者モ御座候間、一々書付差出サセ相成之金子、被成下候様、福崎助八江申聞置候、尤火之起リヲ探索仕リ候処、全ク煙草之打カス吹飛候ニ相違無御座、以来ヲ急ト敬候様、此節者木屋之作リモ便利能、土壁等ニ而塗り立、彼是心ヲ用置申候、

20

等
來處

土佐寺石
正路者南
國通平に
も見ゆ様
記帳ニ橋
記あり

一田中原五左衛門御役替ニ付、大目付評議之美意承得候次第、左ニ奉申上候、源五左衛門義兼而鎌田図書所江出入仕候、然処、此節図書ヨリ源五左衛門へ内分申聞候義者、今度御役替被仰付候義、実ハ一言之説破ニ而ケ様ニ者相成候処、何分兼而心安ク致候ニ付、申残シタリ、跡以相考候得者、別而後悔致スト図書、直ニ源五左衛門内分相咄候由承申候、一土州様御家中田所左右次ハ、余程西洋字ニ心得有之者ト相見得申候、池田歡藏者古流之砲術者ト相見得申候、田所者別而誠実ニ切問仕候、其以下之者共ニも皆々心得有之者も相見得申候、砲術練兵等之儀者、至而荒粗ニ御座候、何モ信切ヲ尽シ万事手ぬかり無ク應對仕候、右之者共諸所拜見之願申出、其内ニ私所江者、反射砲伝授旁ニ付、折々出入仕度段申出候処、兼而旅人面会ハ御法度ニ付、不相成段、駿河ヨリ申渡、

曇時宇和
島家中が
田原直助
所に稽古
之為に來
りし例ニ
事

尤面会仕度節者、町会所ニ於而出会致候様承知仕、土州之者共ハ甚夕氣之毒ニ御座候ニ付、駿河ヲ友野・福崎江説破仕、旅人之御取締者、別段之義、此節之事ハ御直約被為落御用向ニ而、御近親様御家中被遣候儀故、凡下同様之御取扱者、決而御国耻ニ相成候段、再三申聞候処、漸ク解悟仕、御内輪之御座候ニ而、宇和島御家中田原直助、応対同様相心得候様承リ、島家中が先安心仕候、磯反射炉方江も度々罷出、反射砲ハ勿論、高竈之為に來、迄取仕、尚ホールバングノ義モ問談仕、是以雛形拜見仕、別而關心仕候、

一乍恐奉申上候、私儀佐多口小根占其外諸所御用透ヲ以、來春迄ニ廻勤仕候様被仰付、難有奉畏候、

20

一御直ニ御礼奉申上候義、誠ニ恐怖置極ニ奉存上候得共、誠恐誠惶千万拜伏御礼奉申上候、私嫡子喜太郎義、去ル朔日奥御小姓御役被仰付、殊ニ医道家筋之義茂思召ヲ以、其身迄者御免被仰付被下候御事、叩頭百拜何共誠ニ以、奉恐入難有次第奉存上候、乍恐家族一同御厚恩之深キヲ合掌感涙ニ堪難ク難有余リニ恐多ク奉存候得共、何モ奉恐入拜伏仕候、甚夕心配候義ハ、此者至而魯鈍之性質ニ御座候間、乍恐御平日被為召仕被下候ニ万端別而氣疎ク御座候半歟ト奉恐入、甚夕心痛仕候、千万何卒御仁教之御恩沢ヲ蒙リ奉リ、子々孫々御厚恩ヲ奉報度、千万拜伏奉至願候、
一谷村春林之事、戸塚静甫吹拳仕候故ニ相聞申候、愈其通ニ御座候哉、此者ハ、医道モ至而昏ク誠之愚人ト衆人甚夕嘲リ惡ミ申候、私見申候処モ人柄至テ下品ト相考申候間、乍恐此段奉申上置候、

上表

(22) 乍恐上呈仕候、此節私式迄江深ク 御配慮遊シ被下候儀、千萬恐多ク実ニ才力乏キ私式ニ御座候得共、終身之間至誠ヲ尽シ、古人臣職ニ公明正大ヲ究タル者之志ヲ慕ヒ、日夜心ヲ責メ敬懼候而、万分之一ヲ茂奉報度、赤心ニ御座候、既ニ御発駕モ無程被為成、最早此節ハ、何事ヲモ被遊候御間モ被為在間敷ト奉存候得共、一二ヶ条左ニ申上置度、乍恐御心慮ヲ奉煩候、

一敬而相考候ニ常ニ天変之来ルハ、民怨之招キニ由リ人才之乏シキハ、士習之蠱シニ由リ候事ニ而、此根元ハ、古今君相ニ溯源仕候半、乍恐御国元積年之間ニ人才弥乏敷相成候ハ、大小臣イマタ御奉公不仕前、全ク不学無識ニ而、時日ヲ過キ候故ト奉存候士大夫トシテ、倫理ニ昏ク候而ハ、今日御奉公仕候者、皆其役場之古帳ヲ覚候迄ニ而、全ク仁義ニ由リ時務ニ達シ、氣節ヲ失ハサル大眼目ヲ知り得サル事、誠ニ長大息之至ニ御座候、尤功ヲ急候ハ、古今敗レヲ取ル本ニ御座候得共、能ク機微ヲ察シ時勢ヲ愛養致シ候事ハ、始終不止儀ト奉存候、何卒若年之者共一同文武之出精、無懈様、御立以後ハ益可相励旨

御沙汰遊シ被置被下度奉仰願候、

一島津登、此人常ニ学才哲人程世中ニ邪魔ナル者ハ、無之ト兼而出入致シ候者共へ申間候由、此人随分物事ニ見立モ出来候程之才器ハ御座候得共、全体甘言利口ニ而、能ク勢ニ諂ヒ、

正者ヲ嫉候心ハ前人ヨリ甚敷者ト、此以前調所笑左衛門、勢ヒ強キ時分ヨリ海老原壯之丞へ心ヲ合居候、其後ハ、島津將曹取入、只今ニ而ハ豊後へ諂ヒ、此節ハ又御側向之者へモ程々之進物ヲ致候、深ク情ヲ結候、事実登内用頼之者ヨリ承及申候、古今世々左リナカラ、誠明之君ニ而御慎深ク被為人候ハ、以来譬ヒ御意ヲ迎合致シ媚ヒ諂ヒ候者有之候共、決而御聰明ヲ暗シ奉ル事ハ、出来申間敷候得共、姦狡之術数ハ、至而顯シ難ク候付、乍恐此等之事深ク、御心裏ニ秘シ被為置、異日御仁政之妨ヲ不為様、御遠謀奉仰願義ニ御座候、人之邪正ハ、容易ニ難申上、是迄差扣罷在候得共、兎角国家御政事之大事ハ、皆此処ニ由ル事ニ而、憂苦之余リ言上仕置候、一川畑清右衛門、此者商人中之姦雄ニ而、右同前之手元ヲ究メ、往々御政事之妨ヲ為者ト相聞得申候、

右私式ニ而、微賤之身ヲ不顧申上候義ハ、御寛有奉仰願候、

誠惶謹言、

安政二年

十一月九日

上書

(23) 乍恐奉申上候、益 御機嫌能被為 遊御座、恐悅御儀奉拝賀候、去ル十日、高輪様 御機嫌能被遊御光着、乍恐御祝儀奉申上候、去月廿九日飛脚ヨリ御結封物二封ニ仕、藤九郎へ相渡、喜太郎へ園川名目ニ而差出シ、壮右衛門へ相渡候筋ニ取計置申候、其節之御書二者、壮右衛門ヨリ務目藤九郎へ、御意之趣申遣筋ニ奉候得共、藤九郎へ直ニ会取、壮右衛門ヨリ何ト力申越タル訳ハ無キヤト尋申候得共、全ク何共不申

齊興公安
政二年九
月廿二日
江戸第九
一月十日
鹿原島着

越、其身二茂是迄者園川ヨリ封物差上、又者壯右衛門ヨリ御内用トテ、園川迄相届候儀茂不立候得共、此以後玉里へ者、如何取計可宜哉ト存居候処、十郎取次ニ而喜太郎へ差向候得者、以後者別而仕合之事故、江戸ヨリ之御封物茂以来者、十郎へ相渡候付、玉里へ者十郎ヨリ相廻シ呉候様ニト申事ニテ、務へモ同断打合セ置申候、

一新納弥太右衛門隠居願之一条、板花清太夫ヨリ磯永孫四郎承候趣、先便ヨリ奉申上候得共、其後又々承申候得者、願者申上置候得共、イマダ何タル事不奉承知由ニ御座候、

一磯永孫四郎儀、砲術方別而精勤仕、当時專御用立申候処ヨリ成田正右衛門頼ニ而、蔵方目付ニ而茂被仰付度段、三原迄申出タル由ニ承申候、三原ヨリ奉伺候哉、何卒御都合被成下何歟御役格ナリ被仰付、是迄之通掛被仰付置被下候ハ、砲術方人氣ニ茂相掛、別而都合宜敷相成候半ト奉存候、

一蒸氣船方・細工人共之内、木佐貫源助其外二人、此節自分仕舞ニ而長崎へ差越、蒸氣船機之稽古致シ度段申出、正右衛門ヨリ三原迄申出候処、承置トノ事ニ御座候、此義伺ニ相成被遣候筋ニ御座候ハ、正右衛門ニ茂今一往者、出崎被仰付度義奉存候、先度與市へ出崎被仰付候時分ヨリ、シキリニ慷慨仕罷在事ニ而、蒸氣船之製作、是非十分ニ窮理仕、御奉公申上度含ト相見得申候、

安政二年 十一月九日

江夏 十郎

24

乍恐上呈仕候、私義此節御製葉物方へ被掛置候義付而者、乍

恐 御深慮被為在候御事ト奉恐察、実ニ難有相勤申候、去月中旬ニ者、御蔵書ヲモ御下ケ被下、是以不整義ニ而難有拜見仕候、益勉強仕、御厚恩ヲ奉報度奉存候、去月廿九日ニ者、早川務ヲ以 御内命を蒙リ、敬而奉畏、乍恐此等之義ニ付而茂、御直ニ不奉伺候而者、中々心一杯之意、味者難申上、御意ヲ蒙リ候義モ愚昧之私、乍恐押返シテ奉伺度義モ可有御座ヲ、夫レタニ難叶候而者、甚タ心苦敷義ニ奉存候、奸商共之不正ヲ御憂被遊候義者、実ニ難有御仁心ニ御座候得共、奸吏無之而者、奸商之働キ者出来申間敷、何卒此真意ヲ深ク 御明察被遊被下度、千万奉願候、被仰付置候義モ探索仕奉差上義ニ者御座候得共、何分ニ茂御取次ニ而者、心配仕而已ニ而肝要之義者、兎角ニ難申上カクカク迄、恐ヲ茂不願奉願候義ヲ、何卒 御覚悟被遊被下度、万々奉仰願候、私式不肖之身ニ而者、譬何之御用ヲ被仰付候而茂、御政事万分之一ヲモ補助仕義者有御座間敷、甚タ恐多奉存候得共、當時天下一同外寇之大難ヲ受、防禦之備全ク整ヒ泰然トシテ、上ハ天子ニ報シ、中者社稷ヲ保チ、下ハ万民ヲ安シ候程之國、日本中何レニ可有御座哉、他ハ兎ニモ角ニ茂、御家ニ付而者、君臣共ニ心ヲ碎キ、土習ヲ変シ窮民ヲ撫育シ、食ヲ足シ兵ヲ練リ、海陸共ニ軍器ヲ堅実ニ可致之時勢ニ至リ、乍恐上様御独ハ、千万御世話被遊候義ト奉存候得共、上之 御深意ヲ奉汲受候而、上意ヲ下へ通シ下意ヲ上へ達シ、粉骨推身仕候而、真ニ 君ヲ奉愛 御国家ヲ憂ル者、一人茂有之事ヲ承リ不申、日々蔽塞之憂甚敷、今日之御急務皆隱微之間ニ廃失仕候義ハ、大息痛心之至ニ御座候、以前之失

策ハ、無是非義ニ御座候得共、以來ヲ謀候義者、何様ニモ心
之用ヒ次第二参リ可申ト、卑賤小家之事ニ付而茂省察仕候、
カク申上候得者、時勢ヲ不計シテ事ヲ急キ候様ニモ可被思召、
甚タ恐多奉存候得共、天下動乱之機ニ乘シタルニテモ可有御
座哉、人心モ至而危ク相成、万事何ト無ク騒キ易ク、毀譽之
説歎息之声以前二十倍致シ、日々月々ニ残り多キ事而已御座
候、是モ亦彼ノ雨露之植物ヲ滋シ、イツト無ク生育仕候如ク、
其実隱微之間ニ被施候ハ、深知遠謀トモ可申事ニ而、毀譽
怨言ニモ不抱答ニ御座候得共、実以當時之勢ヒ、昼ハ炎熱之
為ニ苦シミ、夜ハ潤沢之生氣無ク、命脈既ニ絶々ニ成リタル
ハ、見ルニモ聞クニモ不忍義ニ御座候、乍恐 御遠圖被為在
万事 御慎ミ深ク被為人、無事平坦之間ニ、御治世御成就
之 御氣象ニ被為渡候義者、実ニ難有感服仕候得共、古今天
下国家ヲ治ムルニハ、世之盛衰榮枯ニ依リ、一時之法制ヲ損
益致シ、古法之今ニ善キハ撰ヒ用、今之悪シキハ抜キ捨、又
古今未発之事迄モ時勢国土之風ヲ見テ、新夕ニ興スモ可有御
座ヲ、當時ニ召仕給フ人々、皆流俗之淺知ニシテ、ハイカニ
古今卓越之 御高識被為在候共、其人皆仁義之根元ニ不由、
常變緩急之道ニ昏ク、主トナル処ハ、惣而自家一身ノ利害而
己ニ而ハ、如何成良法善政モ半途ニ變シ候義者、可惜之至ニ
御座候、ツラツラ深思仕候得者、日本国中一同之大患中、御
当家様ト將軍家ト危急之掛ル所、何レ歎重ク何歎軽ク可有御
座哉、琉球諸島者、敵ニ利多ク味方ニ勝算少ク、万一夷狄之
手ニ入候而者、御当家様第一之御不覺御耻辱ト相成可申、
此義ニ付而茂、琉球へ渡海仕候者共之内、志有之者ハ、自他

嘉永六年

25

上書

一 桑並ニカヒコ仕立之儀、郷々ニ而好ミ候所、不好認等之儀
聞合候事、
一 内之浦辺人移シ之儀、折角移リ候モ、又々立退候哉之風聞
有之候、全ク手当渡方不正之義有之ト、申事聞合候事、
右聞合趣並料簡ヲ茂申上候、
一 養蚕之儀、追々御仁政被為行届、人々衣食住之憂苦無之様
相成候ハ、土地ニ依而者宜敷場所モ可有之、又難有モ奉存

24

之情実善惡共ニ不残上達不致ヲ、深ク嘆息志候、譬ハ數代御
國恩ヲ蒙候者共ハ、尚又眼前 御恩沢ヲ御施シ被遊候ハ、
如何成愚夫茂忠節ヲ可尽善ニ者御座候得共、乍恐 上ニ茂御
存知被遊候如ク、古今和漢共二年來奸智ニ逞ク、慾者深キ者
共一時ニ改リ、不学無識ナル者、頓ニ器量者ト罷成候儀ハ、
至而六ヶ敷義ニ御座候間、乍恐兼而才德有之者ヲ、追々御見
出被遊被召志候ハ、オノツカラ正者之勢ヒ強ク相成、邪慾
之者モ自然ト風動感化可仕奉存候、乍恐私義ニ付而、何一ツ
学ヒ得タル芸能モ無御座候得者、日々 御直ニ被召仕候共、
御盛徳御仁政之御一助ト可罷成義者有御座間敷候得共、當時
白面之書生之如ク、書ニ而已眼ヲ暴シ、樂而他ヲ忘居候時勢
ニ而者無御座ト、嘆息感慨ニ耐不申候、実以固陋卑賤之身ヲ
モ不顧義者、千万惶懼仕候得共、何卒万事 御直ニ奉伺候様、
被遊被下度泣血百拜奉願候、誠惶謹言、
丑十月上旬

候得共、当分二而者、外ハ本業之農事并公役二寸暇ヲ得ス、内者飢寒之苦ニ勝ス候得者、養蚕御仕立ヲ好候所ハ有御座間敷候、

一養蚕之儀、先年松村儀兵衛ト申者、織屋御様白糸売上イタシ来候処、御当地へ願出、自分失却ヲ以指南人召列、諸道具買下、諸所へ養蚕所取仕立、右之御取訳ニ而、御小人格へ被召出候者ニ而、郷々へ手広ク押伝へ候存慮ニ候処、其涯計ニ而中絶イタシ居候ヲ、又七八年以前、川畑清右衛門試トシテ、自分失却ヲ以、本在処垂水へ養蚕所取仕立、江州ヨリ指南人雇下、其翌年ヨリ御内用御計ニ被仰付、桑仕立蚕飼方等御物入無構ニ而、御手ヲ被付、追々其伝諸郷へ押伝、往々織屋御用分白糸相備り候上、尚京都へ御仕登相成候程、出来増候様ト之御趣意ニ候得共、畢竟掛之御役々功ヲ立、名ヲ求メ己ヲ利スル企之事ニ而、於郷々者信用不致、尤桑仕立方ニ付而ハ、国々ニ而地氣之厚薄寒暖之差別ニヨリ、品モ相替り候得共、江州辺ニ而者、専土地を相撰、取木苗木等相仕立、至極町嚙ニ手入ヲ尽シ、桑葉一枚掛目何程ト申様ニ精微ニ養立候由、蚕飼立方ニ付而茂、春蚕・夏蚕數十日之間、昼夜無間断赤子ヲ養育イタシ候様ニ、誠実ニ心ヲ用、互ニ甲乙ヲ争ヒ、年々利分之高ヲ以手柄トイタシ候、自然之風俗ニ相成居候由、東国北国ニ而者、国用外之白糸年々京都へ売出、過分之利益ヲ得候義ニ而、其場所場所ニ而ハ、是ヲ第一之産業トイタシ居候由、御国元之義ハ、勸農方之嚴敷催促ニ、中々寸暇ヲ不得就中蚕之時分者、肝要之農事ニ無隙最中ニ而、其事迄ハ手茂廻リ兼、其上養蚕糸製法方等勉強ニ付而モ、彼国々之人の様

精力氣根之不及沢茂可有之、又其内自然之災殃、或ハ油断ヨリ蚕痛、若一度不出来之義有之候節者、退屈イタシ無程取止候氣風ニ而、イツレニモ此義往々行レ、御国益ニ相成候程之儀二者、成立申間敷、当分少々白糸出来候而モ、見分等へ差出候、手本糸ハ手隙ヲ不厭、精々入念取仕立候間、随分見事ニ相見得候得共、全軀之系柄者、格別御用立候丈ケニ無之、タトへ追々出来増候トモ江州伝之一色ニ而、御召料用分全ク相備り候ト申二者、至リ申間敷、御反物之品ニヨリ奥州・加賀・美濃・江州出之差別モ御座候、実ニ難被行義過分之失費相掛、信用不致者共へ強而相勸候義、看々無益之事ニ御座候、又此両年郷々ニ而所失却ヲ以、願立候モ有之候由承候得共、其雜費者、オノツカラ所中へ出銀割付、却而百姓共之難儀ニ及可申、又郷土之内勸農方ニ差支無之者坏、一旦人之勸メニヨリ思立候茂、可有御座候得共、氣根相統不申、兎角面働ケ間敷存、永久最通り候義、逆モ相調申間敷候、

一人少之土地へ人御移シ付而者、先年ヨリ能ク安居仕候場所モ有之候得共、多クハ其涯計ニ而立退申候由、此等之義ハ、全ク掛り役々真実ニ心ヲ尽シ、永続之定策ヲ治ルト不治トニ頼リ可申、勿論移者トシテ多クハ、極貧之者故、其涯之仕付飯料・牛馬・農具、彼是之御手当ハ、余程御町嚙之事ニ御座候得共、元來之貧病不癒ニ無程、本之貧窶ニ迫り候様ニ而者、父母兄弟離散之怨情モ発リ、古郷ヲモ歎慕イタシ、終ニハ非人ト成ルヲモ不願、立退候者モ多ク可有御座候、一先祖ヨリ住馴候土地ヲモ苛政ニ苦シミ候得者、逃散イタシ候間、新夕ニ移候者共之安居之道者、能々心ヲ不尽ハ、永住

出来難キ儀ニ御座候、此等ニ付而モ役々其器ニ不当候而者、
何程御責ヲ受候共、勢ヒ被行申間敷候、
右間合之趣、上呈仕候、

愈言路壅リ、上下意ヲ達スル事不能、倭幸之勢甚強ク、賄贈
之道益行レ、何分ニ茂一旦之御救助而已ニ而、永統之御仁恕
密ナラス候而者、全功ハ成リ難キ儀ト奉存候、尤諸郷ヲ治候
ハ、郡奉行第一之重任ニ御座候間、器量ナクテハ諸役人ヲ鼓
舞致シ候義、出来申間敷候、幾度相考候而茂、利害得失成敗
之根本ハ、御用ヒ被遊候人之賢否邪正ニ、淵源可仕義ト奉存
候、藍玉所藍作上納旁之申渡モ、甚タ人情ニ遠ク、雜紙方ノ
如キモ同前之義ニ御座候、大小共頭立候者、能々公平誠実之
人、御撰ヒ不被遊候而者、終ニ御安慮之期ハ、被為在間敷歟、
甚心痛仕候、管子ニ茂君扱臣而、任官則事不煩乱ト申候如ク、
忠賢之者、御擢用被遊候ハ、豁然トシテ風化被行可申候、
乍恐、御聰明ニ御失策ハ、被為在間敷候得共、古語ニモ蛟龍
水ヲ得テ神可立、虎豹幽ヲ得テ威可載ト有之候得者、人君モ
亦人才ヲ得テ、徳威可輝義ト奉存候、左リナカラ御時勢ヲモ
被察、却而先務ヲ後ニ被遊候モ、無是非次第ニ御座候得共、
イツレ賢明之者、御用無ク候而者、何程方目備リ候トモ、御
政事之命脉活潑仕難ク、矢張り只今通りニ而者、良法善政日
毎ニ出候共、民其沢ヲ蒙ル事不能候半、実ニ良臣ニアラサレ
ハ、御志ヲ將順仕、御仁徳ヲヨシ広メ候義ハ、相成申間敷ト
奉存候、彼是申上度義ハ、カキリ無キ事ニ御座候得共、区々
之卑言志意ヲ尽難ク、実ニ大息之至ニ奉存候、万々死罪、誠
惶謹言、

嘉永五年

25

三月十四日

江夏十郎

26

上表

乍恐私式微賤之身ニ而、御国家之御大事ヲ心ニ掛、何程至切
至痛ニ苦シミ候而茂、差シテ御用立程之事モ有御座間敷候得
共、御治世ハ御治世程心配打重リ、余リニ念遣ニ心得候処ヨ
リ、又々左ニ申上候、追々御仁政ニ御手ヲ被為付、四方ニ御
心ヲ被為配候段ハ、最早人々モ奉窺候穴得者、真忠ノ者ハ、
益誠ヲ尽候半、其中ニ甚タ心配仕候ハ、古ハニ茂明君善ヲ御
求ラレ候節ハ、真名ヲカサリ、上之寵ヲ得テ私党ヲ引、權威
ヲ振ヒ終ニ賢を嫉ミ、国家ヲ以一家之私儀之如ク心得、大ヒ
ニ社稷ヲ謬リ候義、即チ宋之王安石カ如キ、姦雄之者多クタ
メシ有之事ニ而、実ニ戒懼致スヘキ義ト奉存候、右宋之天子
神宗茂庸主ニ無御座、安石モ又心中甚タ見難キ者ニ而、其時
分賢明ト聞得候、司馬君実ノ如キモ、人ヲ靚ルノ知ヲ謬リ、
惟周程之外、蘇老泉能ク安石ヲ論シ而、口ニ孔老之言ヲ称シ、
身ニ夷齊之行ヲ履ミ、心陰險之奸惡有ト申候、必ス近キ内ヨ
リ追々心付候テ、上書差上候者可有御座ト推察仕候間、同敷
詩書ヲ引、孔孟之言ヲ称シ候者之中ニ而、中心ヲ能々御明察
可被遊義ト奉存候、已カ才力ヲ沾リ人ト巧ヲ争ヒ、愛スル所
ハ、諂諛之小人ヲ忠臣ト称シ、憎ム所ハ、公正之者ヲモ毛
ヲ吹キ癖ヲ求メ、一事之疑ヲ拳テ正真ヲ敗リ候、心底之者ハ、
タトヒ小臣タルトモ、君側江親近候而ハ、始終害意ヲ含ミ、
靈台明鑑之雲務ト成リ、不祥コレヨリ大ナルハ有御座間敷、

去リトテ公明正大ナル誠忠之者迄、御心ヲ被為置、イツマテ
モ御信用不被遊候ハ、人才ハ有而無キ同前ニ御座候半、此
節被仰出候御ケ条之内、弓鉄砲稽古之義ニ付、勝負玉取等取
企、其中二者、当日不參之者江過玉為差出候義、風俗之障ニ
候間、向後文武之修業真実ニ心得候様ト仰渡、一同難有可奉
存候、御城下之義者、是迄第一大臣之者ヲ初、甚卑劣之風俗
ニ御座候間、耻入候而、非心ヲ改メ申候、惟諸郷之義ハ、此
以前勝負弓砲御先留之節茂修行仕者、十二八九ヲ減シ、鉄砲
ハ悉ク他国江売出候付、又々御吟味相替リ、以前之如ク御構
無キ筋ニ相成候由、古老之者共ヨリ承リ置申候、御政事之公
正ニ根元仕者、決然タル義ニ御座候得共、乍恐諸郷之義者、
今暫ク夫成リ被召置候而者、修行仕者只ニ相成候半ト風聞仕、
此義輕重イツレニ有御座候哉、只御手元ヨリ正敷相成候ハ、
追々御城下風化之厚キニ順ヒ、一源ニ帰シ可申歟ト奉存候、
シカシ又砲術訓練ニ而、稽古怠リ無キ筋モ可有御座候哉、何
分ニ茂下情御深察可被遊義ニ奉存候、実二分ヲ侵シ恐ヲ茂不
顧義ニ御座候得共、暫時茂心ニ藏置難ク、言上仕候、誠惶謹
言、乍恐私式申上候義、事理之当否ハ如何可有御座哉、唯千
慮之一得ニ而モ御用達候ハ、至而難有奉存候、当今琉球之
御難題ニ付而者、(乍恐)卓越之御良策モ可被為在、当路之
士大夫茂、先見遠謀可有御座、私式遠徵之臣トシテハ、朝廷
之正論可奉同様茂無御座候得共、砲迄水軍火砲ニ精微ヲ究ナル(ナル
外寇)ヲ遠海孤島ニ被引受候而、急速速(軍)艦水軍等、御世
話被為在候義茂不奉伺、乍恐万事機會ヲ失候而者、知力茂施
シ難キ義ニ御座候半歟、即漢土之俗一隅ニ自足シテ故轍ヲ守

26

リ、自ラ尊大ニシテ外国ヲ輕蔑致シ、終ニ(唐山)イキリス
トノ戰爭ニ類リニ打負、陳化成之如キ忠勇義烈之將士茂砲火
之為ニ死亡致シ、不得止事シテ志ヲ屈シ、和ヲ求メ國威ヲ失
ヒタル鑒戒モ御座候間、不申上候而茂、疾クニ衆說(ニ)御
見得(茂)被為在、当職之者江モ御対策之道者、被為聞答ニ
而雜言至論茂備リ可申ト奉存候、先後緩急之次第、不亂様有
御座候度義トハ、奉存候得共、先年松代之藩臣佐久間方上書
其外海防禦議等、諸書ニ論列仕候趣意茂被為用、尚地理天時
ニ被為、依是迄反覆申上候通り、賢良有能之者、御撰奉被為
在、人之和ヲモ被為得候様、被遊度義ト奉存候、(勿論)琉
球之義ハ、御支配之地トハ申ナカラ、日本内地ニ者類シ難ク、
顯然ト滿清之年号(ヲモ)用來候間、只今通りニ而者、(属
國之義御座候間)、夷狄江被對、日本之法制(ハ)(可)断
然トシテ難被違意味モ御座候哉、当今之形勢ニ而、万一茂戰
争之機ヲ引出候ハ、名将知土空敷海底之鬼ト相成可申、実
ニ嘆息ニ不堪義ニ御座候、我勝算十分備候而茂、輕侮致シ難
キ義ニ御座候間、深ク漢弊ヲ弁シ、表情ヲ察シ、君臣共力ヲ
尽シ、知ヲ究メ、一日茂安居仕難キ御時勢ト奉存候、(義辭
有御座候數、実ハ)、天下之為メニ公論仕候ハ、能き機會
茂甚タ後レタルニ而可有御座、夷人共交易之一舉モ本朝仁義
之明法ヲ達シ、有用ヲ取リ無(益)ヲ(去リ)、土地民力生
産(物)ヲ算リ、分數ヲ被定、彼力願ヲ(御)免ニ依而、我
之嚴命ニ隨順致サセ、却而我神州之属國之如ク、威徳(之徳)
ヲ被示候、如何ニ茂遠略茂(上策茂)可被為在ニ、謾侮之
色ヲ顯シタル後ニテハ、既ニ彼(ヨリ)武威ヲ示シタル後ニ

而者、此計策ハ決而被施難キノ義ニ御座候半、譬又御國ノ義者、万一臣子タル者死シ遺類ナキニ至ル共、魂魄尚賊ヲ斃スノ至誠テ、不恩義ニ御座候、此段私式分ヲ侵シ、恐ヲモ不顧義ニ御座候得共、暫時茂心ニ藏置難ク、又々言上仕候、誠惶謹言、

子四月廿二日

※(最早一日茂懈リ無ク、國力ヲ被尽、武備之御關政無キ様可被遊義歎ト奉存候、実ニ滿洲之耻辱聞ニモ不忍義ニ御座候、只今ニ而者、以前ト相替リ砲術訓練ニ付、諸郷之鉄砲ハ惣テ御帳付ニ相成居、他國へ出候御念遣ハ、被為在間敷候得共、何之義理ヲモ弁ヘ無キ田夫野人、利ヲ去リ義ニ遷リ、武夫当然之嗜トシテ修行仕所、無覺東義ト奉存候)

(同文故傍書シ置ク)

人之君トシテハ、堯舜文武至極之地位ヲ見ルヘシ、人之臣トシテ周公伯夷之至誠ヲ見ヨ、人之子タル者ハ、舜之始終ヲ見ヨ、人之父トシテハ、至人白魚ニ教ヘ門生ヲ教養スル之真意ヲ見ヨ、師弟朋友之交亦尚如此シ、是先聖賢之長シタル処ヲ云フニアラス、人之感動シテ其顯然タル言行ヲ思フ而已、聖人ハ至極、賢人ハ是ヲ得而是ニ順ヒ、大賢ハ化スル而已、既ニ化スレハ是至人類、

左案乍恐御代文之意ニ而、相認奉差上候、勿論魯鈍之私、二十年來學問困勉仕候得共、未思央ニ至不申、別而奉恐入候、左リナカラ一時之見立ニ者無御座、聖賢之意ニ於テ安心仕候御座候而、上呈仕候間、乍恐、御深慮御明断奉仰願候、絵圖之色分茂形チニ而者、大小之違御座候得共、人家之多少且者彼是組合都合宜敷処江、学校場所見賦置申候、ヲノツカラ大同小違之義ハ、吟味被仰付候而、被相定可然奉存候、

上表

区々ノ卑言、再三再四申上候テハ、実ニ天意ヲ煩シ奉ル義ニテ、恐懼ノ至ニ奉存候得共、又々左ニ上呈仕候、私義此節甚疎略之義申上、不敬之罪千万奉恐伏候、右ニ付御沙汰之趣ニ、十郎ニハ西洋精説イマタ不見ニ依テ、心知不開トノ御意誠ニ難有恐伏感悟仕候、元ヨリ辟心無ク、天下ノ義理ニ通達仕度、本意ニ御座候間、何卒左様ノ御書ヲモ精神ヲ究、拜見仕度念願ニ奉存候、夫ニ付押シ返シ申上候義ハ、実ニ分ヲ忘候次第甚奉恐入候得共、初ヨリ存慮ノ程申上、残候テ御怒ヲ恐レ、身カマヘ仕候儀ハ、人臣ノ本意ニ無之候間、早速申上度心底ニ御座候処、病臥之不敬ヲ恐レ、今日迄延引

仕候、私義最初ヨリ西洋説ヲキライ候テ、申上タル義ニテハ、決テ無御座、深ク心配仕ノ余リ事ノ端ヲ而已申上候、其儀ハ、一ニハ御当地海辺ハ多ク、諸島ハ異邦ニ近ク、琉球ノ一難事モ被為在候得者、万事明白ニシテ人ノ疑ヲ不受様、不被遊候テハ、眼前水戸候之如キ英明之国主モ、倭人ノ奸計ニ志ヲ屈セラレタル義モ御座候間、ヒタスラ西洋御信用ノ様ニ、人々申フラシ候テハ、何ソニ付残多義モ難計、夫トテモ水戸ニハ比スヘクモ無御座候得共、何分當時安部侯ノ如キ人才任用ノ時ハ、少シモ御氣遣ハ、被為在間敷候得共、人ノ進退寿夭ハ難計、万一奸邪要地ニ在テハ、毛モ吹キ瑕ヲ求ムルノ惡計モ難計、是等無事ノ時ニ定ムヘキ義ト奉存、又二ニハ、風土人情ニ背キ威力ヲ以、押へ付候義ニテハ、政本難立義ト奉存候、御沙汰ニハ、異語異服ト十郎申候得共、異語ニテハ無く、西洋ニテ数度実戦ニ試ミ、彼ノ言葉ナラテハ急変ノ間ニ合ス、又遠ク達シ難ク、服ハ鉄砲袖ナラテハ便利ヨロシカラストノ御意識ニ奉恐伏候、

(27)

(28)

一御軍事重大之事柄ハ、評定席被定置、御三役惣物主組頭御側役、又ハ御軍役奉行其外御人撰ヲ以、兼テ被仰付置、右席エ 御沙汰相下リ、評決相成候様有之度奉存候事、但秘策機事ハ、別段ニ御座候、一平常ノ事、且御格ニ拘候義ハ、可成御家老前ニ御取扱有之度、左候テ御側役ハ、上ヲ奉輔佐 御越意ヲ奉シ、御家老ヲ奉督、責ナシ存慮ヲ尽シ候様有之度、奉存候事、

(28)

一賞罰等之義ハ、筋々取扱其内神速不運候テ、不叶義ハ、御家老又ハ御側役ヨリ其御役場ヲ致督責度事、一人柄無他事義ニハ候得共、其人ノ長所丈夫々御用相成、可成御役場エ御委任、上ヨリハ成功御攻メ有之度、奉存候事、一小奸小欲ノ者、逆モ衆並ヨリ才器長シ候者ハ、樞要ノ御役場ニサヘ御用ヒ、無之ハ其器ノ長所ニ從ヒ、御撰用有之義、当分実事ニ臨ミ御使ヒ用ノ次第、不当ノ事間々可有之歎ト奉存候事、

一要路ノ御役場ハ、事ニ臨ミ果斷ノ義、第一可貴事ニ御座候得共、成否ノ間能々御熟考、実事被相行候様、御発シ相成度、尤諸御役場ノ遲滞ハ、時々御糾シ有之度事、一上二被為立候御役場、可惡ハ殘刻偏固ノ四字可貴ハ、正大慈恕ノ四字ト奉存候、尤事ニ臨ミ愛憎ノ二字、能々御三省有之度奉存事、

上表

(29)

乍恐上呈仕候、別紙之趣探索為仕置候間、奉差上候、如此小領細目ニ至リ、悉ク病ヲ不受所ハ無御座、ヤハリ只今形リ之庸夫共ヲ以、人品ノ御撰ヒ無ク、万事御探索被遊候ハ、奸商奸吏同流之者、大小親疎ト無ク四面ニ溜リ居候付、却テ彼ノ計中ニ落入リ、惡事之不顯而已ナラス、彼レ等益奸知ヲ逞フ致シ、イカ成ル大事ヲ引出候モ難計、此場深ク 御慎被遊被下度、昧死百拜奉仰願候、既二二十年來心ヲ尽シ、人品器量之長短、追々心底ヲ見ヌキ置申候得共、筆力意ヲ尽シ難ク

(29)

候付、此義ハ御直ニ申上度奉存候間、乍恐、御深慮奉仰願候、先日モ有難ク御茶屋ニテ、御目通被、仰付候得共、耳目之煩ヲ恐レ、一言モ難申上益相謹申候、誠惶謹言、

上表

(30) 不肖之私式卑賤之分ヲモ不顧、度々、天意ヲ奉犯候儀、甚恐多奉存候得共、又々愚慮之趣左ニ上呈仕候、今度常平之良法被仰出候ニ付テハ、実ニ救民之至要ニテ、追々ハ社會之備法迄モ、御手ヲ被為付候、御深慮ナラント、乍恐竊奉祝候、

尚此上ハ、治法有テ治人無キノ不明ニ落サル様仕度、イツレ人品ノ粹ヲ被為擢候儀、肝要之御急務ト奉存候、扱又此節造士館工被仰渡候人才教育之御政事、則遷奉之根本相立候儀ト誠ニ感服仕候、左リナカラ一旦被仰渡候迄ニテハ、旧弊一新之道、御本意通被行候儀、甚無覺束奉存候、訳ハ学生共勉強之精疎才器之大小助教之者、私心之愛憎無ク取シラヘ可申候得共、本心ヨリの実ニ世話不致候テハ、後々ハ何トナク心懈リ始終之全キヲ難保候半歟ト奉存候、此儀ニ付誠ニ恐多ク奉存候得共、玉体ヲ疲勞節々、御直ニ文武ノ両館工モ被遊御出座、思召ヲ以折節、上意ヲモ被為加度儀ト奉存候、左様ニ候ハ、君言ノ至重ノミナラス、御自信館中工、御出入被遊候テハ、諸士一同、上之御好ミ実ニ感動憤発仕、弥志ヲ立、拔群之者モ出来可申奉存候、実ニケ様之儀迄申上候テハ、甚奉恐入候得共、(虫愈)分ノ罪ヲ被為宥寸忠、御開納遊シ被下候ハ、誠ニ難有奉存候、誠惶謹言、

嘉永四年
か

十二月八日

(30)

(31)

巨竊ニ伏テ慎思スルニ、民ハ國家之元氣也、得之太平期スヘキ也、失之禍乱起ヘキ也、実ニ安危之勢天下皆然リ、方今人心之正カラサル暴戾詐偽之風朝野ニ蔓リ、世教敗レ法制守無ク、愛憎私心ニ出テ、士民殆飢寒ノ間ニ苦守スルニ至ル、借ハ病人アラン、其權テ医ノ良ナル者ニ委ル、則其病ノ因テ起ル所ヲ察シ、以テ其病根ヲ療ス、元氣從テ可復也、今國家受病瘳スル不能コト、累年浸々焉トシテ日ニ以テ沈痼ス、而シテ庸医執ヒ、其衰ヲ謂コトヲ諱、此ニ於テカ邦脉甚微也、当此時明君良臣ニ委ネ、其因テ来ル所ヲ審ニシ、其病源ヲ去ラハ、國家之元氣亦從可復ナリ、願ニ今諸士ノ病根ハ、教道不立、食祿不平均ニ在也、農夫ノ病根ハ、稅歛重クシテ飢寒ニ堪ス、力役繁ニシテ農隙無キニ在也、商賈之病根ハ、官売建テ其利ヲ掠奪スルニ在也、工匠之病根ハ、其三民之窮スルニ在也、百官ノ病根ハ、賢才芸能ノ士任用セラレサルニ在也、朝廷ノ病根ハ、不仁不明無斷ニ在テ、又百病之淵源也、巨実ニ至願アリ惟願ハ、

君上寛大公平ノ量ヲ持シ、堯舜文武ノ道ヲ以テ自ラ任シ、至誠ヲ積ミ大徳ヲ修メ、賢才ヲ扱ヒ百官ヲ治メ、仁政ヲ行ヒ庶民ヲ愛シ、教道ヲ厚フシテ、旧穢ヲ一洗シ剛紀ヲ明ニシテ無窮ニ伝ヘ、明君ノ明君タル所以ヲ顯示センコト、夙夜ニ以テ思ヒ、輾転反側終ニ忘ル不能也、君上、天性明敏徳量自然ニ備リ、百事貫通衆皆驚伏ス、衆人

皆曰、君上賢明也事トシテ不照ハナシ、今ヨリシテ仁政可行、忠臣可進、讒奸可退ト誠ニ如、是ハ社稷万生ノ幸福也、
臣 実ニ不安、方今滿朝ノ士大夫、明君ノ耳目ト為ルヘキ者、
臣 其人不知、

君上独り聖明ト雖モ、左右耳目之臣 正明公直之者ニアラサレバ、何ヲ以テカ、臣 下之邪正賢否ヲ扱シ、何ヲ以テカ、下民之真情ヲ知シ、何ヲ以テカ、教化之道ヲ行シ、古ヨリ聖王明君世ニ出ル事有レハ、一時ノ賢臣 扱出セラレテ、仁政之輔弼ト為サルハナシ、舜禹ノ大聖ト雖モ、一身之才智ヲ恃ミ、賢ヲ措キ愚ヲ用テ治平ヲ計ル者ナシ、惟大量ハ天地之如シ、虛明真功有レトモ無カ如ク、盈レトモ虚シキカ如シ、人君民ニ父母トシテ、能賢良ヲ撰挙シ、衆善ヲ納容シ、邦内ヲ鼓舞シ、庶民ヲ教育シ、惠沢下ニ固ク、一夫モ其所ヲ獲サル者無ラシムベシ、夫立政之道正以修己、明以テ別賢否、仁以テ民ヲ安シ、信以テ任賢断、以テ退邪、此五ツノ者至誠以テ貫之、至誠ハ神ノ如シ、至誠ニシテ動サル者、未是アラサル也、
君上、若一タビ怒テ苛法ヲ去リ、仁政ヲ施サハ、四境之内豈不悅服感化者アラン乎、嗚呼苛刑密禁百出シテ、邦内一糸髮モ其毒ヲ不受ハナシ、人々憤懣之情、実ニ天地ニ塞ル言貴有ル者、朝ニ立テ一辞ヲ吐コトヲ不聞、臣 茲ニ至テ憤慨トシテ黙止スル不能、臣 狂妄分ヲ忘、万々死罪、聖惶謹言、

32

臣 聞天下者万世之大器也、人材者治乱之大体也、君臣与リ知

臣 拜伏稽首

32

ルト雖モ、得テ私スルコト不能也、所謂司令之官也、選舉之当否者君相之明暗ニ在リ、天下之才三品上才者一世ニ得難シ中モ亦得易カラス、是万国古今論シ得テ不易也、而ルヲ国体ヲ司リ、人才ヲ虚用スルノ位ニ居テ、下才ヲ以テ上ニ置キ、上才ヲ以テ下ニ置カハ、人ヲ得タリト言シ乎、此憂ハ真ニ古今一徹也、古人云エル事有、人ヲ以テ人ヲ治ムト、又曰、治法有テ治人無シト、方今上

天朝ヨリ下各國ニ至リ、有名之士騰用ニ不レ乏、如此ナレバ、武威文徳共ニ備リ綱立チ、目張り四民皆欣然タルベキニ、歎息慷慨未タレ止ハ、臣 实ニ不解、是果テ言路不レ開ケ、上下之事情宜キヨ不ル得ニ有ル乎、将夕千慮之一失有ル乎、臣 愚一ノ至願有リ、当今武局雄才足リ、軍政繕治スト雖トモ、其或ハ治事未レ備會計未レ振バ、国体之費弊日ヲ算テ待ベシ、臣 实ニ至愚極陋時務ニ暗シト雖モ、伏シテ惟ルニ大ニ言路ヲ開キ、無名之上書ト雖モ咎ムル処無ク、下情精細ニ通シ、人才之選舉各其器ニ当リ、食足り治事明ラカニ四民業ヲ信スルニ至ラバ、皇国威徳之風大ヒニ振ヒ、四異尽ク悦服スルニ至ン歟、臣 愚壯年ニシテ業ニ怠リ、才器用ル所無ク、事テ忠ナラス、事テ孝ナラス、真ニ天地之罪人逃ル、所無シ、如此ニシテ国事ヲ論スルハ、愧赧極ルト雖モ、感感之鞠ル所不能止、
卑言ヲ奉呈戰恐俯伏、謹待罪、

32

二月

江夏直誼

安政五年六月五日


(33)

御直命

一万端之用向前以何ト申付ガタク候間、何事ニカギラズ存慮
ニ任セ候トノ御意

一高竈之一条、第一番ニ早ク聞取申上候様、被仰付候事、

一御船萬年丸碇重量千四百ポンド、長崎ニテ都合能ク出来候
ハ、頼方イタシ度、何分可申事、

尤右之クサリ量  此一ツ之程、寸方ヨリ何ヒロノ訳
細々申上候事、

一肥前之方竹下覚之丞之都合、イカ、早ク罷帰候義相調候哉、
何分聞ニ遣候様トノ御事、

一勝麟太郎工劔付鉄砲并売物之書物外、療処持之品早ク御世
話頼トノ事、右ハ柴川喜三左衛門工申付、会所工手ヲ人見候

ニ、早ク遣候敷カモ知レス、此等之義能々良策ヲ用候様トノ
御事、

一硝子板五十枚
付タリ御船明り取り硝子板四十枚、伊勢彦蔵工笠山八郎ヨ
リ申付候事、早ク差上候様、

一セキスタント能キ品

一プロインステーン上品差上候様、

一珍品葉種類
一寄合三人小番式人、其外伝習方トシテ被遣付、勝工万端差
図頼置候様、

付タリ御屋敷卷ヶ所、御取入ニ相成度候間、聞合遣候様福
崎助八ヨリ頼、

一蘭人肉筆之画、精細之物望候様トノ御事、

(34)

一伊勢彦蔵方工被仰付置候細工道具之内、用達向ニ候ハ、
一箱分ハ、召仕候様トノ御事、
付タリ萬年丸御用水溜鉄ニテ造り候方、又便利外ニ有リヤ
蘭人工可問事、

一常平之良法被 仰出タルニ付、郡奉行ヨリ庄屋共工勸農之
御讀書差出候様申渡之事、

一柵木切除之 御明断、御仁智之深キ一同感服仕候得共、古
帳面ニ定置タル上口中ノ島地ニ在ル処之百本ヲ除ケハ、ムカ
シ下地トシルシ置ケル今ノ上地工、又百本ヲ植付候ハ、御仁

政之実を失ヒ候事、

一右切除之柵木、鹿兒島工売出候者エハ、過錢申渡之事、
一右切除ニ付、谷山之郷役人共、私慾之邪刑ニテ、百姓共ノ
永作地工在所之柵木、私ニ売、其錢所役共分チ取候事、其外

ニ一計ヲ設候共、事敗レ百姓共喜ヒ候事、

右、敬書

(34)

一御城下直ニ万両神瀨

一御手伝非常之事故、鳴津都之城主
一魯夷二話

一徳川家謀臣共江志ヲ合セ人品口達、
一大坂御留守居御金方、十分謀得程之人才
一塩米買入町人才子、

一 黒神ヨリ瀬戸之間へ砲台ヲ置、
一 煙硝蔵直シ、
一 出家仕相背者寺敗、

上

(35)

御勸氣ヲ蒙候、小臣兼テハ恐縮仕、万端相敬罷在候得共、既ニ此節兵端ヲ開候義ニ付テハ、御当家之御事而已ナラス、皇朝之御大事、後來之御危難、時日難計、実ニ危急存忘之御時勢ト奉存、不顧死罪、愚慮之赤心左ニ上呈仕候、此節之一端ニシテ内外之御難事、拳テ難敷候得共、至テ御急務之義ハ、御台場之築造、尚要地ヲ撰ヒ、迎射・並射・送射之三要ヲ図リ、特立之台場ニハ、カツト台場ヲ築、或ハ円塔ヲ置、羽翼ヲ為シ、敵船ヲ討之功ヲ大二仕、能ク地勢之誤リ無之御備ヲ全ク被遊度義ト奉存候、先砂揚場台場ニハ、高ク円塔ヲ置キ、下町海岸エハ、元ノ如ク岡ヲ築キ増補ヲ加へ、一二ヶ所之円塔ヲ置、祇園之洲台増ニハ、後山へ二三ヶ所カツト台場ヲ築キ、桜島エハ、袴腰之上并赤水之中服エ円塔ヲ置キ、各敵隊ヲ被遊御位置、陸戦伏兵等之御手当迄茂、御急速ニ御手筈被為在度義ト奉存候、敵船俄ニ不寇入之日數御座候ハ、洲崎ヨリ神瀬之間、海底之淺ヨリ深キニ至リ、人力之及限り石ヲ捨、敵之航路ヲ狭メ、神瀬之暗礁ト相對シ、味方之攻戦ニ便ヲ得度義ト奉存候事、既ニ今日ニ至リ候テハ、機変明断オノツカラ勢ヒニ依ル事ト奉存候、御先代様、磯ニテ被遊御鑄造候輕敵隊銅敵十五寸、和敵敵ハ、当分御用ヒニ相成居候哉、

(35)

此砲ハ、至テ遠町ヲ射台場ニ用ヒ候テモ、野戦軍船共ニ輕便之敵ト奉存候、且此節之御難事ニ付テハ、百姓共ニハ、農ヲ妨ケ、町人共ニハ家業ヲ失ヒ、窮士ノ家内ハ食ヒニ苦可申候間、何卒人心安定之道、御手ヲ被為付度義ト奉存候、是皆自然之時勢ニハ可有御座候得共、人心一定士候得ハ、兵勢ハ愈堅固ニ相成可申、早ク食料ヲ足シ候義ハ、將帥之要務ニ御座候間、最早當務ニ手拔ケハ、無之筈ト奉存候得共、下情之不急達ハ、古昔ヨリためし多キ義ニ御座候間、一日モ早キヲ御良策ト奉存候、成敗利鈍ハ、時運ニ依ル事トハ奉存候得共、万事肝要之御急務ハ、深智遠謀之者共、御集被為遊、深ク御図リ遊シ度義ト奉存候、右ニ申上候諸事之御手当向ハ、最早惣テ御手ヲ被為付タル筈ト奉存候得共、小臣至愚之存慮ニ甚解難キ義ハ、此節之御一戦ニテモ、不容易御費用ニ及、且器械之敗レモ小事ニ無御座候処、敵船若再三改来候ハ、御一國諸用之御蓄、何程之御減耗ニ及候哉、敵國之器械財用ト比較仕候ハ、何用之事ニ御座候哉、彼レ一國之軍艦大敵ハ、勿論陸戦ノ器械用具ト本朝惣合之貯トイカゞ可有御座候、彼レハ、兼テ同盟之國々不少ト承及申候、彼レ若シ合政國ト相謀リ、數十艘之軍艦、月人レバ日出ルノ策ヲ為シ、日ヲ計リ交代數十戦ニ及候ハ、恐ラクハ、器械之敗レ困用之不足、四民之憂苦、何様之難義ニ及候哉、士大夫戦争ニ臨ミ、勇猛死力之働キハ、勿論之義ニ御座候得共、至テ重大之御議ハ、社稷を保チ朝廷ヲ安シ候御事歟ト奉存候、万一数戦之後危急ニ迫リ、耻ヲ万国ニ触レ、笑ヲ天下ニ取候事共、到来士候而ハ遺憾之至、言語ニ難述義ト奉存候、此ニオヒテ御定策イツ

レノ所ニ定候哉、右ヨリ国家之安危ハ、人臣之賢愚邪正ニ根
ス事ト相見得申候間、乍恐明君之御見識、大事ヲ被任候義
ハ、能々御慎ミ、賢否邪正御見違不被為在処、最第一之御事
歟ト奉存候、万一此義ニ御誤リ御座候テハ、大事之敗レ此ニ
起リ可申、「兼テ能ク御案内被為遊候漢土三國之時分、玄徳
孤弱ニシテ大志ヲ取り、一世之雄才ニハ、第一ニ孔明ヲ得、
蜀ニ依リ、呉ニ結ビ、南夷ヲ謀リ、終ニ賊ヲ敗ル策ヲ定申タ
ルト相見得申候」非常之世ニハ、非常之人才ニ不因候テハ、
成功難期義ト奉存候、尤己ヲ知り敵ヲ謀リ、大國ニ結ビ戰ヲ
助ケ候手数等ハ、大才之明断ニ出可申歟、再三奉恐入候得共
人品之御見誤リ不被為在処、大事中之最大事ト奉存候、シカ
モ当世明良之大才、御國ニ限ラス看拔、御任用ニ相成候ハ、
実ニ社稷之幸福生民之安定ト奉存候、至愚之^{小臣}、実ニ昼夜
寢食ヲ不安憂苦之余リ奉建白候、草野之罪^臣至愚之卑言、万
慮之一得モ有御座間敷、恐怖至極ニ奉存候得共、時変不得止
之赤心ト被 思召上、不敬之罪 御寛宥奉拜願候、誠惶誠恐、
拜伏謹言、

七月九日(文久三年か)

小番 江夏 十郎

御勤氣ヲ蒙リ候^{小臣}、兼テハ恐縮仕、万端相敬ミ罷在候得共、
既ニ此節兵端ヲ被開候義ニ付テハ、御当家ノ御事而已チラス
皇朝ノ御大事、後來之御危難時日難計、実ニ危急存亡之御時
勢ト奉存、不顧死罪、愚慮之赤心左ニ上呈仕候、此節之一端
ニシテ、内外之御難事奉テ難敷候得共、至テ御急務之義ハ、

御台場之築造、尚要地ヲ撰ヒ、迎射・並射・送射之三要ヲ図
リ、特立之台場ニハカッタ台場ヲ築キ、或ハ四塔ヲ置キ羽翼
ヲ為シ、敵船ヲ討之功ヲ大ニシ、能ク地勢ノ誤リ無ク、御備
ヲ全ク被遊度義ト奉存候、先砂場台場ニハ、高ク四塔を置キ、
下町海岸へハ、元ノ如ク岡ヲ築キ増補ヲ加ヒ、一二ヶ所四塔
ヲ置キ、祇園之洲台場ニハ、後二三ヶ所高クカッタ台場ヲ築
キ、桜島へハ、袴腰之上并赤水之中服エ四塔ヲ置キ、各敵隊
ヲ被遊御位置、陸戦伏兵等之御手当迄モ、御急速ニ御手筈被
為在度義ト奉存候、敵船義急ニ不寇入ノ日數御座候ハ、洲
崎ヨリ神瀬ノ間、海底ノ浅ヨリ深キニ至リ、人力ノ及ブ限り
石ヲ捨、敵ノ航路ヲ狭メ、神瀬ノ暗礁ト相對シ、我ノ攻戦便
ヲ得度モノト奉存候、御先代様、磯ニ而被遊御鑄造候輕騎隊
銅礮十五寸、和微砲ハ、当分御用ヒニ相成居候哉、此砲ハ、
至テ遠町ヲ射台場ニ用ヒ候テモ、野戦車船共ニ輕便之敵ニ御
座候、且此節之御難事ニ付テハ、百姓共ニハ農事ヲ妨ケ、町
人ハ家業ヲ失ヒ、窮士ハ家内之食ヒニ苦可申候間、何卒人心
安定之道、御手ヲ被為付度義ト奉存候、人心不足ニ候テハ、
兵勢不堅固之意味可有之ト奉存候、早ク食料ヲ足候義ハ、將
師之要務ニ御座候間、最早手拔ケハ無之筈ト奉存候得共、下
情ノ木急達ハ、古昔ヨリタメシ多キ義ニ御座候間、一日モ早
キヲ御良策ト奉存候、成敗利鈍ハ時運ニ依ル事トハ奉存候得
共、万事肝要之御急務ハ、知勇明断之上才へ、御委任之外へ
有御座間敷奉存候、繪図ハ、御先代様^{小臣}工被仰付、距離淺
深ノ測量仕奉差上候手扣ニ御座候間、御見合ニモ可相成ト奉
存候、奉差上候神瀬之細図并山川御台場之図ハ、差上置雛形

ハ、石川確太郎方工相下ヶ置申候、別紙一通ハ、当月仰出候節、奉差上度奉存候得共、取次之道ニ故障有之、不能其義、往事無用之義トハ奉存候得共、後來御所置之端ニモ罷成歟ト奉存上呈仕候、至愚之卑言、当所御座候ハ、何卒不敬之罪御寛宥奉拜願候、誠惶誠恐、死罪謹言、
七月七日（文久三年か） 江夏十郎

此の文前文と大同小異なれども日付異なれり、何故なるか。

口 上 覺

乍恐愚存之趣奉言上候、近来御国家御多事ニ付、近々御新政被為在候御事、一々奉感服候、尤今般居付地頭之儀坏 御復古之御美政、其外万事之御処置、衆人刮目仕、人才之御騰揚ヲ奉待事御座候処、人々自ヲ其所知エコソ望ヲ掛候ニテ、乍恐私式ニテハ、愚眼之不及処限リ有事御座候得ハ、所謂揚爾所知爾所不知人、其遺哉之古訓ニ固キ、先私所知ヲ以奉言上候、古人ニ当時之宿儒先生ト称ル者ニテ、実才有徳ノ君子ト奉存候、各其徳姓之異ル所ハ、可有御座候得共、此学ハ、程朱之道統ヲ伝ヘ、上ヲ重シ下ヲ仁ミ、風節俊整其所交之者弥久シテ愈其至誠、不欺之実行ニ感シ申候、某才一世ニ雄ス氣節、甚高ク、已ニ 御先代様之御明眼ニテ、一時御拔揚被為在、御寵遇不淺、経世之方当時第一ト奉存候、只今閑散ニ罷在申候某ハ、風采至テ温順、文辞工致ニシテ、治世之名君子ト称スヘキ者ト奉存候、只今何々

右ハ、乍恐格別之御役場工被召仕候ハ、御国家之柱石トモ可申人才ト奉存候間、不願恐、愚存之趣奉申上候、乍恐 御国

家之御重宝モ不少候得共、人才程至宝ハ有御座間敷、尤人世限リ有ル事御座候得ハ、御用立候人物モ麒麟モ老ヌレハ、驚馬ニシカスト申如ク、草莽ニ朽果候テハ、誠ニ可惜之至ト奉存候、已ニ某ハ、五十余歳、某ハ何歳ニ罷成、前途不遠空シク草莽ニ捨置カレ候テハ、御国家之御為誠ニ可惜之至ニ奉存候間、御明断ニテ御騰揚被為在度儀ト、乍恐丹誠奉至願候、恐々謹言、

九月

姓 名

嗚呼カナシキ哉、先君至名至仁之御徳ヲ備サセラレ、上ハ皇朝ヲ被為尊、中ハ、將軍諸大名ヲ被為引立、日本國中ヲ一同ニ御心配被為遊、外国之者共ヲシテ、惣テ御手足之如ク御定メ被遊候、御深慮遠謀之御程、我惟独リ伺居奉リ、身不肖ニハ候得共、御志之万分之一ヲモ報シ奉リ度、日夜愚昧之心底ヲ尽シ候処、ハカラスモ御世ヲ早く去リ給ヒ、其後ハ日トナク夜トナク、先君之御事ヲノミ思ヒ奉リ、御大志ヲムナシクナシ奉リシヲ、イカ、セン、只頼ミニ思フ所ハ、我子共孝弟忠臣之極意ヲ思ヒツメ度迄ノ事ニ候、此外サラニ思フ事ナク候、アナカシコ、

上

臣 江夏恕醉 百拜謹待罪
方今危急之御時節ニ御座候得ハ、有志之者共一同、忠告尽力

闕事無之筈ニテ、今更至愚之微臣、隱居老弊之身ヲ以テ、御國家之動靜關係可仕儀ハ、有御座間敷、実ニ無用之贅言、却テ奉煩君意儀ト奉恐縮候得共、臣未夕両眼明を不失、御時勢感激ニ不勤ヘ、死罪ヲ忘レ、固陋之微忠謹テ奉上呈候、若シ千慮之一得トモ被思召候ハ、乍恐深ク

御臈下ニ被為臧置、御採用之程奉拜願候、

一年恐何事モ機会ヲ不被為失儀、実ニ肝要之御事ニテ御明断ヲ以テ、宜ク賢明之良臣エ被仰合置度御儀ト奉存候、勿論御政事御一新後、追々人才御撰萃在セラレ、今ニ至リ候テハ、下情壅塞之理ハ全ク無之筈ニ御座候処、眼前在亡之機ヲ見ナカラ、事状速々運兼候儀モ御座候哉、動モスレバ識量有之者共、忠憤慨嘆之声相聞得申候、此等之事、至テ解シ難キ儀ニ御座候、唯今コソ実ニ危急存亡之御時ニテ、分陰ノ意リ真実誠懼スベキ筈ナルヲ、イカサマ要路ニ申分モ御座候哉、此儀ハ、明君速ニ御英断不被為在候テハ、御時勢大事之病根ト奉存候、方今御当地之人情ヲ勘考仕候ニ、畢竟危急之実意ニ渡ラス、一戦勝利有リト聞テハ、天下忽チ定ル歎ト喜ヒ、一軍敗ル、ト云ハ、大事去ルト長太息ニ止ミ、疑惑猶予之間ニ機会ヲ失ヒ候哉、何分ニモ 御明断奉仰願候、

一兵ハ死生ノ関、万命之係ル所ト御座候得ハ、分陰ノ間モ度外ニ置キ難ク、志士勇士粉骨摧身、天朝國家ニ報スルノ時ニシテ、寒暑ヲ浚キ飲食ニ苦シムノ事実ハ、御明察之御事ニテ申上迄モ無之候得共、早ク兵士ヲ被為勞、上下感動之御仁術モ時ニ取テノ御急務ト奉存候、勿論北国寒威甚キニ至リ候テハ、滯陣大ニ難儀ニ及ヒ可申、返ス返スモ神速一決ノ御英断

被為在度、奉拜願候、

一恐多ク奉存候得共、兵隊之主將ハ、高貴之御人体御当然ノ御事カト奉存候、如何トナレバ、主將不重候テハ、機ニ臨ニ断定ノ力ヲ輕ク動モスレハ、諸説紛紜之間ニ機会ヲ失ヒ候儀、古今一徹ト奉存候、

一法令嚴ニ過レハ、苛政ニ落チ可申敷、願ハ御時勢柄宜ク法ヲ被為約、小過ヲ赦シ士氣ヲ励マサレ度御事ト法存候、

一累年之御共事、御国用之費弊不容易御時勢ニ御座候処、諸士之困窮モ日ニ迫リ、諸士多ハ奉禄家財ヲ尽シ、富家ニ依リ急難ニ備ヘ申事ニテ、父母妻子之飢寒実ニ不忍ル儀ニ至リ可申、此事如何トナレハ、貧キ物ハ食禄ヲ有ツ事不能、日ヲ追ヒ足ヲ出シ、富ル者ハ是ニ反シ候故、窮達之道、南北仕ル儀、必然之勢ヒニ御座候、当今兵事御急務中ニハ御座候得共、貧富平均之御仁政モ亦無御抛御時務歎ト奉存候、

君上既ニ天朝之御為大事ヲ挙ケ、大難ヲ不被為凌、御躬至難ニ被任候儀ハ、天下皆感動仕ル所ニ御座候、然ルニ賊末タ不亡ヒ兵士之死亡モ不可計、御安危之程モ未夕難決候得ハ、速ニ 睿慮ヲ励マサレ、鳳輦ヲ促シ、親ク衆兵ヲ率ヒ玉ハ、天朝之御恢復、唯此御一舉ト奉存候、実ニ御親征之功アル事、承久之乱義時之如キ大逆逆サヘ、泰時引返シ相尋候、答ニ若上皇之御親兵ニ奉逢ハ、脱甲断弦奉命之外、更ニ所置アルヘカラスト申タル事モ御座候得ハ、鳳輦錦旗動時ハ、草ニ風ヲ尚ルノ勢ヒ刃ニ不血シテ、天下ノ御一清疑無カルヘシト奉存候、臣死罪不勝、犬馬怖懼之情、誠惶誠恐、百拜謹言、

慶応四年戊辰八月廿三日 臣江夏恕醉

一勝麟太郎ト申者、此以前ノ交友ニテ、胸臆之程モ見拔置タル奇才ニ御座候処、只今ハ賊中ニ御座候哉、心掛リノ者ニ御座候、河合繼之助ト申者、当分会賊之謀師ニテ難侮者ト相聞ヘ申候、然レハ、如此奇才ヲ測リ候儀モ明君之御胆略ニ可被為在儀ト奉存候、

大正十年夏季騰写

江夏十郎關係文書 下

温故知新齋

主人蔵

江夏十郎關係文書下

寛

金五拾両

右蒸氣船方御用二付、為入用御私可被給候、以上、

七月廿二日

江夏 十郎

長崎御附人衆

請取

金八拾三両

右之通相受取申候、以上、

午七月廿五日

江夏 十郎

染川喜三左衛門様

迫田 甚蔵様

写

今度御軍賦御改正二付、旗印等之儀、別冊図形之通被相改候
条、謹而致拜見、銘々入用之品写取、御定之通堅固二可致用
意旨、向々江不洩様可申渡候、

八月

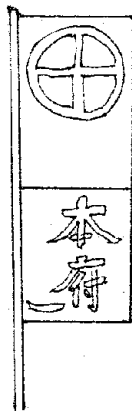
近江

笑左衛門

嘉永元年申八月 被仰渡候御賦写

旗相印等之図

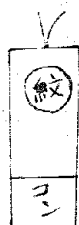
江夏十郎黄直義



御城下六紺之備
但地合晒上布之間

乳數見合 竿長二間二尺計

一甲前立物者御領國中、是迄之通、角オトシ一之字
一御城下笠印袖印図之通



袖印

一横三寸五分
一長サ一尺
一裾紺三分一程
一地白紋紺染出裾紺六組同様

一、一番組ハ



白地二袖紺

一、二番組ハ



黄地二裾紺

一、三番組ハ



浅黄二裾

一、四番組ハ



赤地二裾紺

一、五番組ハ



赤白二裾紺

一、六番組ハ



朽葉浅黄裾紺

但小番・新番二而茂、戦兵二出候面々ハ、其方限之組
色可相用候、

明二日四ツ半時分ヨリ天氣次第二而、上瀬為御見分御乗船之
筈候間、御心得之タメ、此段早々及御問合候、以上、
五月朔日

追而天氣次第之御事候間、尚亦明朝御問合可申越候、

江夏 十郎殿 御小納戸

急御用向

上書之写

近比恐ラ不顧又々奉申上候、先達而亡村井東陽ヲ以、江夏十

郎事ニ付、書付ヲ以奉願上候儀ハ、乍恐イカ様 思召被遊被
下申候哉、誠ニ恐ヲ不顧、又々奉願上儀ニ御座候得共、早々
御役階御上被遊被下度、奉仰願候、私ニモ十郎力心底ヲ猶又
得卜勘考仕見候得ハ、実ニアレ程之人才、当御代ニオイテハ
勿論之事、古卜申候テモ至テタジナキモノト奉存候、誠ニ十
郎至レルコトハ、只篤実ニシテ平日身ニ所行接物ニ之信忠事
ニ之節、事ヲ慎ムノ至リ、君ヲ愛敬スルノ至誠、御国家ヲ補
救スル志シ、何一ツトシテ仁敬無不貫誠ニ所操約ニテ、其所
及甚夕広シ、実ニ清明在躬ニテ無不照、誠ニ其至ルノ何ト譬
ヘテ可奉申上哉、実ニ其德得タリト申奉存候、乍恐 君上上
モナキ 御聖德ニ被為 入ニ、又ナキ良臣ヲ上ニ御引上被遊
下ニ御仁沢ヲ被為施候得ハ、下百姓ニ至迄只落涙シテ難有ガ
リ、世ヲ没テモ思ヒ奉慕、上賢ヲ嫉ミ、奸人モイツトナク其
心春陽ニ解テ、清水ト可化之道理ト奉存候、イツレ純粹ナル
モノハ、外ニ有御座間敷、此十郎極テ老人ト奉存候間、近比
恐ヲ不顧申上儀ニ御座候得共、来初春ニハ是非御役階御上被
遊被下様、幾世ニモ奉仰願候、私ニモ十郎事ハ、平日鬼神之
如クニ尊信仕、死テノ後迄慕ヒ仰クノ実情ニ御座候得ハ、御
引上被下迄ハ、イカ様御不都合ニ罷成イカナル罪ヲ奉蒙トモ、
此一筋ハ、是非々々ニ奉願上止レザルノ精神ニ御座候間、此
等之趣、宜被 聞召通被下度奉願上候、又十郎ヲ御引上被遊
候テ、御国家之書ト被為成候儀共、万々一モ御座候ハ、イ
カ様トモ

付被下様奉仰願候、此両人心純粹ニシテ、尚世ニハ誠ニ珍敷
人物ノモノ共ニ御座候間、少モ 御懸念ニハ不被為、及 御
安心遊ハシ御用被遊被下様奉願上候、奥向之風儀モ近比ニ至
リ候テハ、余程相改リ人々独リヲ慎之心ハ、逆モ有御座間敷
候得共、朝夕相交之間、非礼之言語等トント無御座、シカレ
トモ不善ヲ門^カ感スルノ陰表ハ、決テ可有御座候得共、当分ハ、
陽ニ善ヲ著スノ意味相見得申候間、先夫丈ハ、余程相違ヒ申
候儀ニ御座候、是モ 御高德之御光リト申、益奉感心候、又
此上ニ右之両人奉願上候由、被仰付被下候得者、一統終リニ
ハ、善ニ化シテ真実ヨリ相改リ可申ト奉存候間、奉願上候通
被仰付被下度奉深願候、
右者、愚昧之私文筆之全ク拙キヲモ不顧奉申上儀、近比恐
ヲモ不憚、誠ニ不敬之至奉存候得共、万端深ク々々真ニ勘
考仕申候ハ、御都合ヲモ不顧止ルヲ得ス、言上仕候間、
宜被 聞召通被下度、幾重ニモ奉願上候、前ニ申上候通来
春迄之間ニ御引上被遊被下候得ハ、私ニ於テハ、明日農人
ト御成被下トモ少シモ苦シクハ不奉存、只難有可奉畏、誠
情ニ御座候、私ニモ十郎力事ニ付ニハ、夫程相思ヒ居申事
ニ御座候間、是非々々御役階御上被遊被下度奉深願候、恐
惶謹言、
十一月十一日
前田龍五郎

御意可奉畏候、扱又児玉雄一郎・山口彦四郎、此両人士道專
一二相守リ、志ノ中々不容易モノ共ニテ、奥御小姓御役被仰
付ヨリ被 仰候書付写
午九月五日、猪飼聊太郎御取計ニテ、集成館掛御徒日

集成館内

一 胡粉方

一 硝子方

一 燒物方

右者、是迄 御手許計被 仰付置候得共、以来御内用計被 仰付候

一 兩金山・錫山之儀、前条同断被仰付候得共、以来支配之義者、当分通ニテ御本手銀等定式之義ハ、御勝手方取扱銅山并御手山之義者、御内用計是迄之通ニテ、兩金山・錫山之義、詰見聞役御徒目付工被仰付候ハ共、御引取ニテ以前之通被仰付候、

一 磯鹿倉寺山・鹿倉炭焼之義、本直相成居候分迄燒方被仰付、殘鹿倉其俣被建置、炭捌方之義ハ、何篇御内用計被仰付候、一 荒田新塩濱并韃鞨冬之上、水尾坂通方之義、集成館ヨリ取扱被仰付置候得共、御内用計被仰付候、

一 肥前表柞灰等交易向之義、御手許計被仰付置候得ハ、已来御内用計被仰付候、左様而初発御直約ニテ、御取結之御事候間、是迄之振合通奥向工書翰到来之節ハ、御小納戸名前ニテ返答向之義ハ、總テ御趣法方取扱被仰付候、

右者、是迄 御手許計被 仰付置候處、今般御逝去被遊候付テハ、差当御用向差支之義モ有之、已来御治定之義共、追テ申渡義モ可有之候得共、一 往右之通被仰付候条、可承向工可申渡候、

安政五年

九月

左衛門

為父十郎得罪上書

臣聞白刃揮乎、胸則目不見流矢拔戟加乎、首則十指不碎斷、臣今有危迫之懇草芥之微敢犯于嚴威、臣父十郎先蒙順聖公之殊遇、竊恃天地包含之恩、不自抑畏負分外之任、前後上章獻時務之得失、十郎賦性本愚直而不顧、流言誹謗惟粉骨報効之志耳、歲既蒙大命使崎陽、偶不幸 順聖公遽揚末命、於是奸怪之屬包藏險惡以猜狹怨懟之心詆、臣父為矯誕無美、臣區々之愚誠不忍默止、敢奉其一二以訟其寃、臣本鄙野不知廟堂野礼、且拙文字願閣下垂哀憐、以賜寬裕之看。臣父先蒙恩裁集成館役百工上言、一時之利害令次第条理、敢不乱數年之間盡驚駭、僅報君恩万分之一而、如其費用出入各有主司固非、臣父之所聞也、而其御百工賑興人心之間、以微賤之身破私家之產者、不少家人婦女皆以為狂妄、然而欣々然不止意於家族者、惟以遇先君之殊寓故也、當此時小人喋々嘲之笑之、十郎不遑顧其狂、然而至臣等為之破肺肝者、亦以為不少遂誘慝至為事其。誘者一介、郡山 集成館掛御掎目付之言曰、十郎以倭弁欺君贖裁、集成館竊偷官金千有餘兩、流言以聽於台府、先之蒙命引吉野・吉田二郡水、以濯集成館郡奉行司之如、其費用集成館御徒目付一介、以付仰正其出入、當是時集成館之功將也故、郡山一介放流言以退、十郎自欲奪其功、於是官以問察檢其寃否、条理顯然一介之奸計、於是敗故、又念醜謀曰、先十郎蒙命、策前浜神瀨於砲台、時奪官金千兩、流言以周府下、然而十郎蒙命、成功以三日費用皆私家之產也、以是流女皆以為狂妄、然而欣々然不止意、於家族者惟以感激

順聖公之殊遇之故也、當是時、小人喋々嘲焉笑焉、十郎不遑

顧其狂、然而至臣等為之碎、肺肝者亦不為以少遂誘言、至為事、其誘者之言曰、十郎以佞弁欺、君、聽裁集成館、以權威私公命、流言以聞於台府、先之十郎、蒙、命引吉野、吉田二郡之水、以洗銃藥方、集成館郡奉行司之如、其費用出入、集成館見聞役司之、當是時、集成館之功、將成因奸屬放流言、以退十郎欲自奪其功、側聞於是官參驗其寔否、案理顯然、是以誘議遂不成故、又念醜謀、日先十郎築神瀨於砲台、干時欺君聽肆公財、流言以周府下、世俗之誘議、大卒如此以小人醜穢之心權、君子清明之胸悲哉、臣請審言之父十郎、嘗蒙命築神瀨於砲台、三日而功成、費金二十五兩耳、臣見之父十郎日記簿記日、戊午六月五日、於殿上

公手賜神瀨之費金二十五兩、臣惟是以流言又不成、其所以不成者、惟以順聖公之在也、父十郎本不以僂、笑事左右動犯聖顏正非、勸是對持權者、敢不為以非礼、諂諛隨胸故、公末之後、從崎陽婦雖欲明往時所見、內旨之鴻志誘言四出已被殊罪、先為流言者、當時以見奉用、種々誘詐競起不勝、敢每奉父十郎、從被罪夙夜慎謹惶恐、不、鴻恩未報分也、特以臣不肖過瀆、聖明嗟呼、臣罪當誅自罪不已、臣悲父之不遇日夜憂慮至于今無所告訴、比日嘗聞、殿下懷寬大公明之兩踵、先君之遺業嘉周公旦之跡、於是臣躍然惟以可訴、臣聞流丸止於甌、更流言止於智者、伏願殿下聰明聖慈賜賜公、其寔於世、臣夕死可也、臣恐懼竊惟知子不如父知父不如子、臣既知父十郎所犯無頭文字、臣至切之情不能已獻、父十郎昔者上言於先君之書、有一二篇伏願聖慈、賜迂高覽赤心之所存、亦有足以見者、臣死罪死罪、殿

下欺、臣愚誠聽此至情、臣死生固非所意、臣不勝犬馬怖懼之情、臣江夏直矢謹百陳聞拜、
安政六年己未十二月 日

上疏 臣江夏壯七郎直矢

右臣誠惶頓首、伏期万死謹 奉一言、臣既於幡州室津奉策一道論、乖官議蓋以苟且之事議之、臣之策似不合義、雖然唐太宗所謂為良臣莫為忠、臣豈有信焉、今在官之議正則正然而策有、甚拙者何者陰結、浪士以勤王弘夷之論陽告、幕府以制服浪士、安 宸襟之儀、方今幕府之患專在浪士、是以雖陽悉干我心有陰、惡者何者惟怯勤王之士如蛇蝎也、是即今之勢也、故浪士之心日疑有遂難服者矣、幕府之心亦日疑而有終難組者矣、臣竊以為在官之策、表裏錯雜志大而勢不備、氣壯而謀不遠、是以未及機而内生隙外、戾制服浪士之名、為幕府之所笑甚失衆人之望、臣大息慷慨不知所為、雖然時窮節士頭策窮智者顯、臣愚不肖雖非莫策、筆端莫口舌語與、意失毫末策過万里、是以臣非進 殿下之庭不信也、止願 殿下踞閑室以一小近臣陰召台下使得聽、臣之策或有補万一非、使敢煩 殿下也、請願憐、臣之愚誠許此至情、臣死非所辭、臣誠惶頓首、伏俟斧鉞罪、臣頓首稽首、再拜謹言、
文久二年四月廿五日

臣江夏 壯七郎直矢 謹上

上疏

臣江夏 杜七郎黃直先

右臣向上策一道、幸得辱上覽、無任俯伏待罪戰恐之至、
臣恐懼君上鴻特广大、不加譴責、有納諫之實、愛民之性屬者
又制書求下情、拳國之臣誰不敢咄、心血以訴至切之情乎哉、
臣聞明主集群議為耳目以除壅蔽之奸、任老成為腹心以立治國
之功、臣不肖誠惶頓首、伏竊察

上意之所、期以為非近小也、必有憤皇朝之衰微而、欲慰万
世志士之大憾者也、臣甚難焉、雖然臣謹察緩急之勢与人事之
所以令、然以為不作遠大之業、遂不易全其終也、於是乎、臣
又言天下之難言者、臣愚謀陋文不盡言、願君上、垂哀憐以

賜寬裕之看、臣聞疑今者察之古不知、來者視之往万事之生也、
異趣而同歸、臣謹案古今治乱之所、由來顯然見天警、果然婦
人事、弘化以來慧星數見、飢歲數到、統蕃夷瀆神國、陪臣幽
王公匹夫殺執權、治乱之勢不言而喻也、夫兵出于不得已、

若時勢不得已、則宜先天下先者制人、後者所制於人事有、輕
重機会有難得、方今天下無智愚賢、不肖収甲兵、儲資糧跋首
而、觀四海之動靜、當此之時不可論者王霸也、不可證者聖人
也、臣願不論王霸而尽心於國家、不引聖人而委事於勢之与理、
謹吐露肝胆而託用捨於 聰決、夫成大事在胆々、大則夫可所

期不大矣、所期大則不可業不大矣、
君上所期果在于掃清四海乎、復皇朝於千載固志士之所奮起
也、臣請試曰方今之勢、今醜虜一呼瀆乱万古清明之、
朝是誠可難慨一也、德川氏在征夷之任、怙怯逡巡背王命、
而詭醜虜是誠可憤怒二也、當此之時、諸侯亦無敢鳴鼓、而責

之者是誠可悲怨三也、而此三者之所由來皆德川氏之罪也、王

倫秦松亦以何乎加焉、天下之士慷慨憤怒之氣鬱乎、塞神國當

此之時、君上一怒鳴鼓而、責之四方之諸侯、豈有不應者乎、
况今國家之大難有四何者、君上聞井伊氏之變、從次婦是陽
結、繼井伊氏而受疑於幕府一也、當今之時、更來朝是猶託身
於讎敵之家、其勢遂不易全行二也、雖然背幕府之命、不居守
國家不可得已、且失名義三也、狐疑而過日則幕府投我以法度、
國辱交至四也、大難已如是、而君上來朝之期在明年、是誠冒

不測之淵也、臣聞之、當此之時宜、先以天下之義士為城郭、
甲兵不可以城郭、甲兵為城郭甲兵也、今可為天下之城郭、甲
兵者在關西、如熊本·佐賀·久留米·萩·鳥取·高知·福岡·
松山等、座關東、如水戸·名護屋·桑名·福井·仙台·川越·
土浦·浜松·米沢等、皆忠節趣義之主也、而如津·和歌山、
天下之奸賊是亦不宜、察其機而不予備也、如彥根則我之讎敵
彼不滅則我危、

君上苟欲來朝結、彼數諸侯以義与財深得彼、君臣之審天下之
情勢、然後可決去就之策也、不然則國家之慮將有不可勝言者
矣、此臣惜寸陰而忘寢食所以大息也、安危之勢既知、如是而
大臣國士有一策之設、而恃以可待者、臣未聞之也、或以為目
前雷肝之謀、而不察有異日不可測之禍者不独、不察異日之禍、
己猥侮他邦嘲、都人自以為勇而不知、經綸之政存文武之官員、
人材盛上流俗純下之為、大勇國况今下則貴鄉原之風而、朋党
比周人心星散、是臣所以切憂也、國家已如是而、依前以大臣
國士自勉者、是之日亡國之臣、臣悲憤以為正是、内外困窮國
家安危之時也、是以臣不辭斧鉞之誅、復犯狂言之罪、

君上保安國家之以甚切臣請、日其大略今國家先務有、四治官

吏立法度嚴刑、賞一民心是也、民心一而後國家之權可歸、於君上儻官吏不治、法度不立刑、賞不嚴、民心不一則、國家之權未離流俗也、^臣故曰甚難焉、雖然、君上躬奮斷然猛行、則經綸國家猶覆手是、^臣所以後緩急之勢而、欲雄視四海也、恭惟、君上英明必有所斷然猛行、因顧方今之急務、先在大選超群之才、而散四方有志之國大收海軍、而審天下之要津、明時務之緩急時可止、則退而計彼數諸侯來朝之事、亦可有指置之宜時可進、則、君上陽稱來朝抵京師、而審說天下之形勢陽奉醜虜、征伐之、詔留軫京師、而說德川氏以和戰之利害及不可王命之背不可、國家之亮不可、後世之欺直募勤王之士而、嚴國制弘醜虜盛威武而、待梗化之賊、名義而立而、大業定於此何者、君上有奉、王命、雪國辱之大切、而武威振四海々内之諸侯、奉以勤王家而、則天下移檄而可定也、勢之与理既如是矣、^臣聞智者善謀不如時、精時者日少而功多、方今之時不可失也、万世之機會在今日、蓋國大而政小者、國從其政、國小而政大者國易大也、今

君上大政則海外亦我有也、然而方今内則物情騷然、上下乖戾外則蕃夷凌侮蔑視、勢將吞神國、是以海内豪傑之士、切齒扼腕于戈將校于四方、天下之勢常乱于平易、而治于非常、今二百年之平易既極而、又将非常之人起之時也、蓋非常者固常之所異也、故奉非常之事者、必用非常之人而成、大功者不謀於衆衛、鞅日常人安於故俗、學者溺於所聞、此兩者非所与論於法之外也、昔者宋襄以帝王之兵、自許遂大敗績、^臣謹案簡冊所載、往々談王霸之事而不弁、王霸之道引聖人之言而不察、聖人之心者多矣、^臣是以不欲妄引、聖人談王霸而違事幾也、

^臣謹案源二位之大才而殆為死、石橋山豐公之神智、而危死於僧院、東照公之明智而大敗味方原、此三公、實万世之俊秀也、然而僅免万死、既如是然後漸威定天下由、是觀之欲奉大事者躬不任、天下之至難則不可以起事也、雖然居受國辱、固^臣子之所不可忍也、且方今天下之勢、猶宋之末世天下之易制、猶明祖之時、時哉不可失、昔者名将之起也、其股肱耳目之臣、皆良實賢才而明時勢銳果斷而已、

君上躬任天下之至難欲保護、國家以勤王家無如法、求士而求士之法惟、在不惜官資耳、古來人主惜官資而失士者多矣、而其所以惜者、^臣甚疑焉、何者常惜於君子、而不惜於小人、是何故乎、以君子為異類、以小人為同類、此其常所以見惜也、今、君上以小人為異類、以君子為同類、則求士之道達矣、譬欲得力士者、必可試於重器、未試於重器而分罷健者、^臣不信也、故欲得賢士者亦必可試於官資、未試於官資而分賢否者、^臣不信也、

君上試假君子以官資而效其賢否、於時務則真士果可得也、以其不惜於小人者直移、於君子、^臣何難有焉、夫人主者國家之身体也、大臣者國家之精氣也、人精氣衰則為物所致為事所煩、其当精氣盛乎、物至則制之事至則致之故、欲以衰老之身制強健之人、猶以卵制石独非無益脚害其身、君上深留意於此而挾其可否、則國家之幸甚、^臣愚狂妄敢犯于、君威、^臣每思時務之急々心胆、隨地惶々不能已、^臣言狂計愚俯伏累俟斧鉞罪、
万延元年度申十一月、^臣江夏壯七郎直矢

陳乞

正月廿九日ノ書状相届致披見候、愈壯美ニテ勉学ノ筈、無此
 上事ニ候、於爰元モ皆々平和ニ候、御方ニハ塩谷先生工被行
 候由、万端相敬進脩可有之候、尤父ノ家風心術ヲ正明ニイタ
 シ候、工風第一ニ候、博文ハ勿論ノ事ニ候得共、是又経義ヲ
 根元ト定、諸子百家ヲ枝葉ト心得、遠大ノ志可有之候、尤劍
 術ハ武夫ノ持前ニ候間、至極ノ地位ニ造リ可申候、当分ハ天
 下一同外国ノ憂ヲ含、英雄志ヲ逞敷イタスノ勢ニ相成候間、
 小人無用ノ儒者ト名勢功利ノ奸、匹夫共トハ初ヨリ玉石ノ違
 ニ候間、技芸ハ有用ノ事ニ心ヲ用ヒ、學術ハ大人君子ノ高明
 ニ渊源致シ可申候、必ス早ク素志ノ大儒ト相成候ヲ、日夜待
 申事ニ候、扱道中日記ハ、早クヨリ届居候得共、飛脚ノ節ハ
 イツモノ事心配致候間、其義モ不申遣、大キニ念遣ニ被存候
 半、此節遣候間可被相請取候、尤他見ハ決テ無用ニ可被致候、
 人ノ邪正ハ、容易ニ不論様可相心得候、
 一、和漢年契一冊別テ仕合ニ候、板モ至テヨロシク机上ヲハ
 ナシ不申候、
 一、八犬伝廿三編母殿工相届申候、
 一、夏羽織母殿ヨリ遣申候、其他衣類ハ態ト差登不申、シカ
 シ不自由ノ品ハ、何ニテモ差登セ可申候間、細々可被申遣候、
 此節モ久米縞ノヒトヘ物遣度トノ事ニ候得共、余リ遊学中余
 分ニハ不宜ト存候付、先々此節ハ不遣候、何分心得次第可被
 申越候、塩谷先生工何ソ贈度候得共、都合ヲ以被申遣候後ノ
 事ト存候、朱鏡ニテモト存候、御方着用ノ夏物ハ不自由ニ候
 ハ、喜太郎ヘ相談致シ、カタヒラ共モラヒ置候ハ、其段モ
 被申遣候様、母殿イツモノ長口上、面働ナカラ申越候、夏ノ

カタヒラハ、白キモノハヨグレ申者ニ候間、其心得可有之ト
 ノ事ニ候、

一、喜太郎出立以後ノ書状ハ、大山正圓ノ方工差向遣可申候、
 若又外ニ見立モ有之候ハ、早々可被申遣候、源右衛門殿工
 書状遣度存候得共、此節ハ相調不申候間、ヨロシク可被申伝
 候、猶介殿モ同断ノ事ニ候、

一、喜太郎諸品大廻船ヨリ被遣候ハ、其船ノ名并請取書杯
 髓ニイタシ可被遣候、夫迄ノ間格護等モ髓ニ致シ可被置候、

一、成田休哲殿へ被参候処、御老母エモ面会ノ段、嚙々喜ヒ
 ノ筈ト存申候、又々被参候ハ、御元氣ニテ何寄目出度御事、
 往昔ノ事共思ヒツケ申事ト可被申伝候、

一、塩谷ノ居所ハ、本百何間目ニ被居候哉、諸生達ハ何人程
 ニ候哉、細々可被申遣候、先々此節ハ用事迄申遣候、折角々
 々身ヲ敬食ヲ節ニ致シ、言語ヲ謹、学問大成ヲ期シ可被申候、
 謹言、

安政四年
 か

二月廿九日

十郎

直義(花押)

壯七郎殿

九月廿九日ノ書翰相届安心致シ候、愈壯勇ニテ勉学ノ筈ト存
 候、於爰元一同平和ニ候間、安心可被致候、扱八犬伝母殿工
 其外和蘭人風聞書・大石子書画等被遣相届、皆々楽申候、此
 節ハ、金子差遣度存候処、段々物入ハ多ク、今日迄ハ調達出
 来兼候間、少々ナカラ先ツ金子壹兩差遣候、来月ニモ相成候

ハ、都合モ出来可申、左様可被相心得候、中原猶介殿書翰其マ、奉入、御覽候間、其旨序ニ可被申入候、別段遣シ難ク候、此節ノ仰出書写遣候、今日モ甚タ繁多故細書ニ不能候、昨日ハ朝五ツ前ヨリ蒸気船ニ乗り、桜島ヲ周廻ノ心得ニ候処、瀬戸ヨリ北風強ク相成、燃島ノ前ニハ大難義ト相成、又々黒神ノ方ヘ引返シ夜入、瀬戸ノ方ヨリ下ノ瀬戸内ヘハ、九ツ半時分着致シ、今朝ハ右ノ御届旁早出勤ニ候、先々用事迄申遣候、寒中無痛様專一ニ存候、謹言、

安政三年

十月廿九日

壯七郎殿

十郎

阿久根迄遣候人足ノ返翰モ相届致安心候、猶介殿ニモ同断、元氣ニテ無此上事ニ存候、我等ニモ今日共ハ、愈快氣ニテ最早近日出勤可致候、阿久根ヨリ返シ候品ハ、此節喜太郎工遣置候、尤別紙道中御賦相渡候書付ニテ候、中原周助殿ヨリモ可被申遣候、今日ハ毎ノ通ヨリ、別テ透無之候、昨日迄ハ書翰モ認不申候間、只用事迄申遣候、江戸エ着ノ上、細事可申遣候、万端心ヲユルヘ申問數候、謹言、

安政三年

九月五日

江夏壯七郎殿

江夏十郎

四月七日ノ書状相達候、愈平安勤學ノ筈、此方ニモ一同無事、中村田ウヘ最中ニテ、二本松モ未形付候、当年ハ米別テ六ヶ

數買入モ容易ニハ不出来、金子ニハ差支ホト下難義ニ迫り候得共、先日ヨリ大麦出来候付、米少々、入日ヲ送り候、シカシイカニモ工夫致シ、家内餓ニハ不及候様可致候間、安心可被致世躰不及是非、万端相慎、分茲モ由断無之様可被致候、朝稻方ヘ藤井便ヨリ筆送り候筋ニ、手紙見得候由、此方ニハ不届候間、藤井ヘ直ニ被尋候様、朝稻弟子ヘ答ヘ置候、先ハ用事迄一筆申入候、謹言、

四月廿九日

壯七郎殿

直義

先刻申聞後ニ、此方ヨリ申入有之候処ハ、金子五十兩此節入付、来年ヨリ年賦入付ノ相談ト申迄ニテ、年賦ノ員數ハイマ夕何程ト申事、彼方エ不申入候、シカシ年々十兩ツ、ト申所ニ候間、右八郎エ其言申入可被置候、仲太殿ハ能ク按内ノ事ニ候、以上、

五月廿四日

壯七郎殿

十郎

十一月廿九日ノ細翰、去ル廿二日相達候、愈元氣ニテ伊勢屋ヘ滞宿被致、未塩屋方ヘモ入塾無之トノ事、シカシ最早決定ニ相成タル筈、精々困勉可被致候、爰元一同平和ニ候、我等ニハ益壯実ニ相成、当冬ニ相成、未夕服薬等モ不致候、扱子共工駒下夕、其外嵐山ノ名産盃相届、子供大喜ヒニ候、喜太

郎金子五兩ノ事故承知候、即名寄帳ヲ以平右衛門へ頼置候間、廿九日朝ノ内手ニ入候ハ、此飛脚ヨリ遣可申、間ニ不会候ハ、正月三日ノ便ヨリ遣可申候、先便ヨリ御方エ五兩遣シ候、右ノ請取書ハ、喜之助ヨリ大山へ差廻シ候請取ニ相成候半、学問ハ己ヲ成スノ事、尤小成ニ不安義眼目ニ候、諸君子ノ事被中越、一々心得申候、初発ヨリ是程ノ事ハ、見違ハ無之候、尤人才ノ世ニ出ト不出トハ、皆命ニ候、人力ノ及所ニハ無之候、唯在ル所ニ安シ、人事ヲ尽而已、我何ヲ歎憂、何ヲ歎慮シ、汝篤行誠実ノ君子ト成レ、輕俊高氣ノ小人ト成ル事勿レ、尤多言慷慨ハ徳ヲ失フノ端ニ相成候間、能々可敬事ニ候、一書翰甚々龜末ニテトント読メ不申、大キニ困リ候書ハ、能ク心形ヲ顯シ候、

一 庄助金子ノ義、米箱へ入置候由ニ申越、即次郎助・小助其外へ申付糺候得共、是以庄助覚違ニ相違無之、庄助出立之時、米箱ハ打明ケ、小助へ借シ置候由、タシカニ皆申事ニ候、

一、八犬伝ハ二十二編迄参居候、式拾参編差下候様、母殿被申事ニ候、其外四五冊ノ短冊下料ニテ、面白艸子有之候ハ、都合次第ニ遣候様トノ事ニ候、

一 入塾致候ハ、師弟ノ間ハ至極ニ信切ニ可有之、誠ヲ不尽候テハ相叶申間敷候、高矜ノ心ハ、君子ニハ無之事愧ノ至ニ候、

一、修業ノ身ハ、兼々飲食ヲ節ニ致寒暑ヲシノキ、少々ノ風邪ヲ至極魂ヲ入、保養不致候テハ相叶申間敷、一日煩候得ハ、平快ノ処ヲ深く思候様、第一之事ニ候、先ハ何モ用事迄申入候、謹言、

安政三年

十二月廿九日
壯七郎殿

十郎

安政三年

十二月廿九日
壯七郎殿

十郎

十一月廿九日ノ書状相届致安心候、愈無事ニテ勉強無此上候、於爰元モ一同平安ニ候、扱当分ハ昌平ニテ、外出モ月二十五日トノ事、随分夫ニテ相濟事ト存候、尤当世ニ相成候テハ、西洋ノ事ニモ能々通シ候様、賢智ノ人ハ、心掛可申事ニ候間、御方ニモ蘭書ノ読方モ、カタワラ稽古有之候様存候、唯當時蘭学者ト云へハ、皆奸曲ノ人多ク候付、能々言行ヲ敬ミ申事ニ候、測量術ハ、益精微ニ相成候様可被心得候、右ハ、父ノ先見有之事故、オロソカニ考候テハ後來残多キ事可有之候、

先ハ、用事迄申入候、身ノ保養第一ニ候、謹言、

二月廿三日ノ書翰相届、忝致披見候、愈堅固ニテ被致困勉、無此上目出度事ニ候、爰元一同平和ニ候間、少モ念違ニ不及候、喜太郎ニモ四月三日、愈無別条彼是都合出立有之筈、壯七ハ甲歳殿へ從ヒ、水府へ差越候由、其後又々回国ノ含有之段、喜太郎ヨリ申遣候イカ、ノ事ニ候哉、是以イツクヘモ余リ長滞在ハ、無用ノ事ニ候、金子杯ハ決テ無用ノ義ニ少々ニテモ仕候義ハ、難義ノ本ニ候間、能々魂ヲ入可被申候、先生へハ、深く誠意ヲ尽シ可被事候物ニ応シ、喜怒哀癢シ易ク候

テハ、大事ハ成シ難ク候間、心術ノ工夫極意ニ造リ、万能其用ヲ成シ候様可有之事ニ候、

一喝太郎、先月十三日、爰元致出立候、其折リ水上ニテ仲四郎ヲ以善之介工取次、母殿工致伝言候ニハ、拙者義ヲ御惡ミ被成候由、脇方ヨリ承候付、壮七郎江戸ニテ病氣等有之候テモ、少モ差カマヒ不申候トノ趣、再三仲四郎工申候由、仲四郎ヨリ夫ハ變ナ事故、取次ハ御断候段申候得共、是非々々申入候様トノ事ノ由、右ニ付テハ骨肉ノ間ニハ候得共、按内通ノ人品ニ候間、万端用心イタシ、何モ相談等ハ無之方、宜敷候、此段母殿ヨリモ申遣置候様トノ義ニ候、古ヨリ骨肉一同賢人君子揃候事ハ難叶、実ニ無是非モノニ候、尤母殿何ソ嘴太郎ヲ惡ミ言語共ハ無之、變ナル事ヲ申者ニ候、

一拙者事既ニ御下国前ニモ相成、身強ニ無之候テハ、不相叶候間、人々ノ進メニ依リ、古里湯治ニ差越度、来月三日方ヨリ、母殿口オトメ口才金杯召ツレ參ル筈ニ候、何モ安心可被致候、一、喜太郎・大山仲殿工金子借人返弁ノ残り拾五兩ト右ノ利錢差登候様、仲兵衛殿ヨリ被申遣候得共、先月便ヨリ金八兩差登候間、跡ハ七兩ト利錢ニテ候処、此節ハ都合出来兼候付、先ツ金子五兩此節便ヨリ差登候、喜之介工頼、仲兵衛殿工ハ返済イタシ候、跡殘金ハ式兩余リ及候間、後便ヨリ登セ可申候間、其段ハヨロシキ様斷置可被申候、以来ノ書状ハ、大山仲兵衛殿・同正圓殿へ当テ遣シ可申候、左様可被心得候、先ハ用事迄申越候、謹言、

三月廿九日
壯七郎殿

十郎

尚々猶介君へモ此書状御覽ニ入ラレ、杏齋殿只今被參候、服中別テヨロシク相成、舌色等モ余程宜相成候ト被申事候、

昨日ハ、皆々首尾能出立大慶ニ候、其方出立後、愈頭痛モ去リ舌ノ痛モ無之、一介殿・源兵衛殿杯モ被參、皆々打クツロギタル佳会ニテ、一介殿初、喜藤太殿・元右衛門・雄一郎杯席書有之、酒モ十分ニテ五ツ前ニハ、皆々被帰候、昨夜ハ能寝申候、今朝ハ益快氣イタシ候、シカシ葉用ハ念入、先兩三日ハ出勤モ致スマシク、今朝モ杏齋子被參候様申合置候、善之助ニモ水上ヨリ帰後、別テ元氣ニテ少モ草臥共ハ不致候、矢建跡ニ残り居候間、為持遣候、猶介君へモ御安心被成候様早々可被申上候、返々小事ヲ敬シミ、少モユルガセノ事共無之様、肝要ノ義ニ候、此旨モ同様可被申上候、庄助ニモ愈念入候様可被申聞候、今朝ハ、五百助殿被參セメ馬共致シ中候、左リナガラ、我等ニハ、今朝迄ハ乘不申、四五日モ保養ノ後ト心得申候、今朝ハ産物方ノ人長崎工出立ノ由、名島ヨリ為知何ニテモ可遣段承候間、手紙一封為念ト存置置候、何モ格別ノ用向ハシタ、メ不申、長崎ニテハ名島ノ子ヨリ届候半、我病氣ノ事、心元無ク被存候容子故、為安心懸々人遣申候、愈全快ニ候間、少モ念遣無ク通行可被致候、猶介君工モ同斷可被申上候、謹言、

安政三年
か

九月朔日

十郎

壯七郎

安政三年
か

十月十三日

壯七郎殿

十郎

長崎ヨリ兩度ノ書状并マク子シヤテリアカ唐墨水入、其外雄一兄弟山口彦エモ筆相届、善之助エノ筆ハ、湯治場所工遣候、小倉ヨリハ中原ヨリノ書状迄相届候、只今春田喜右衛門二被示候処、去月廿五日ニ小倉通行ノ処、旅館ノアルジ御方ヨリノ書状持出頼候由、左リナガラ今日迄ハ、其状届不申候、明日ハ遣トノ事ニ候、扱馬モ益元氣ニ候、磯永弥九杯誠ノ小夫ニシテ、オコガマシク我家政向ニ手ヲ月度杯、市来ト申合セ、仲太迄モ同道ヲ頼候由ニテ、我子共ヲ見ルニヤブレタル衣服ヲ不見ノ式ハ、馬モ余リ上馬ナレハ、中カ下カニ売替可善杯種々様々服ヲカ、ヘテ笑ベキ事共申立、表面ハ親切ニ似テ、實ハ奸計ニ出候事明白ニ候、此馬日々枝モ宜敷相成、馬好ノ大家達子望ヲ掛候由、弥七モ一術ヲ用ヒントノ事ニ候、小兒共道義ヲ不知候テ、長者ニ向ヒ家政向ニ手ヲ加ヘントハ、何事ソ、此者共ハ、皆拜伏シテ教ヲ受クヘキ筈ニ候、仲太ニハ彼等ト同意ニテハ無之候得共、不得止事同道ノ由ニ承申候、此事ノ発リモ市来ニハ、此節猶介跡役喜之介エ被仰付候様取計、何モ彼レノ思ヒ通参候事ニテ、服一盃ノ形意地ハ成シ得タル事故、可至筈ニ候得共、見スカサレタル杯心ニ愧ヲ含、或ハ不平ノ心底乱レタルニテ候半、此事猶介杯エハ、決テ申間敷事可敬候、何モ用事迄申入候、謹言、

十月廿九日之書状相届致被見候、愈平安被致学業目出度存候、

安政三年
か

十一月廿九日

江夏壯七郎殿

江夏 十郎

於爰元皆々平安ニ候間、安心可被致候、伏見ヨリ被遣候、打付箱モ相届、宇治ノ白折則ヨリ相用申候、其方杯学問御暇ノ事モ、先君ノ御処置通候哉、世間風説ニハ三人賦モ不被下筋ニ相成候敷ニ承候、弥其通御達共相成候得ハ、当分ニ至リ候而ハ、我等ヒシト困窮ニ迫リ候間、其所ヲ申立、御暇日数モ差上候テ、罷下候方可然存候、又玉里ノ御方伺候ニハ、思召ニテ学問御暇ノ者共、此節中小姓勤被仰付候段、前田杏齋咄ニ御座候、是ハ極内分承申候、万一左様ノ事共被仰付候ハ、此涯命ニ順ヒ中小姓相勤、来年御供ニテ罷下リ候方ヨロシク候、尤物入無之様專一心掛可申候、若又要路ノ方エ能キ知人モ有之候ハ、困窮ノ意味ヲ以勝手向ノ勤願取候得ハ、無此上都合ニ候、何分當時ノ形勢ニテハ、何事モ無事平和ニテ、餓ニ不及所第一ノ事ニ候、御国元ニテ勤方願付候義ハ、當時中々六ヶ敷候、先々出所宜敷勤場願取候方都合能ク候、江戸ニテ勤方ニテモ被仰付候テ罷下候得ハ、夫ヨリ先キハ余程開運ノ事ト存候、シカシヤハリ御先規通三人賦被成下候得ハ、御暇日数通ニテ罷下リ候方ヨロシク候、我等ニモ万事相談相手之敷候間、余リ江戸エ永ク罷居候テハ困リ候、川上筋七殿エモ篤ト相談イタシ、勤方ノ義共都合能ク手敷可被致候、○母殿エ被申遣候返答、美小年始八十編迄下シ有之候、文庫之事被申置候得共、右ハ直高ノ品故、取止メ候様、可被致段被申候、クシ三本相届喜ヒニ候、何モ用事迄申遣候、折角寒氣イトヒ候様肝要ニ候、謹言、

今日川上箭七郎殿出立ニ付、一筆申入候、愈元氣ニテ勤学ノ
咎大慶存候、爰許皆々平安ニ候、今日ハ磯惣陣鹿倉工、御符
ニ被為入、喜太郎ニモ御供ニ候、当分ハ、上様磯御茶屋工
御滞在日動イタシ候、扱新納太郎左衛門娘ヲ喜太郎妻ニ迎候、
去ル十七日ニ召入候、年ハ十八才、名ハ常ニテ候、且又其方
ニモ来秋帰国ノ後妻ヲ迎度存候処、父ノ存寄リ有之、川上箭
七郎殿ノ二女ヲモライ置候、内約引結置候妻ヲ迎候ハ、箭七
郎帰国後ト存候、箭七郎エハ、爰元直左右共頼置候、扱中原
猶介殿病氣余程之事ニテ、其方心配ノ段驚人候次第、何卒早
ク平快被致候様、日夜天地ニ祈候、此賢子ノ後來ヲコソ頼敷
存候、其方ニモ能々身ノ保養可被致候、会津ノ産物厚ク礼意
可被申述候、病中キトクノ志シ感申候、先ハ一筆申入候、謹
言、

二月廿四日

江夏 十郎

江夏壯七郎殿

一筆申入候、弥平安ニテ無滞通行、江府エハ十月中旬方ニモ
着ニ候半、大坂ハ、九月廿九日出立ノ段、白坂郷左衛門殿ヨ
リ被申越候、其外ヨリハ書状モ不参候、家内中皆々平安ニ候、
宰相様御光着当日ハ、西田町ヨリ玉里迄御先立相勤申候、先
日ハ舶来ノ雷除進上イタシ候処、別テ御喜ヒ被遊、是ハ重宝
ノ品チヤト御意被為在、姉様ニモ何カ心嬉敷キ容子ニ伺ハレ
候、前田・児玉両人共、此節表御小姓へ御役替被仰付候、我

齊興公安
政五年八
月廿六日
江戸立十
月十一日
着遊

等道奉行へ御役替被仰付候義ハ、九月末便ヨリ申遣置候、黒
木下着後、何ノ嘸モ無之候、箭七殿ヨリ被申越候意味、如何
相成候哉、未相知レス候、彼ノ人ノ子ノ難ヲ救ヒ候義ハ、心
中難忘答ニハ候得共、何分薄情ノ世ノ中瀬ニハ不被思候、其
他岩瀬肥前守殿ニモ、外国奉行ヲ被遣候由、世ノ中イカ、ト
相考候、アメリカ使節モ何様変候事モ難計、旁遠慮有之度世
振、其方ニモ江戸へ長居ハアシク候、或人ノ歌ニ「唐しの虎
ふす野辺に吹風の目に見ぬ所おそろしの世や」ト有之候、一
言一行能々相敬候様存候、先ハ何モ用事迄申遣候、謹言

安政五年
か

十月廿九日

十郎

壮七郎殿

四月廿九日ノ書翰、五月廿五日相達被見致安心候、御方弥無
事勉勵ノ筈、尤禄誌式冊緩々可致披見候、喜太郎大元氣ニテ
着、皆々大喜ヒトテ令致安心候、心術至テ堅固ニ出来、何寄
楽ニ相成言候、シカシ、御着涯大繁用イツモ夕刻退室イタシ、
夫ヨリ積年ノ咄共互ニ多キ言ニ候、拙者、上ノ御都合、昔時
ヨリ猶以、御厚意恐入候次第可致安心候、家内一同無事平安
是又安心可被致候、大山仲兵衛殿方エノ返金、此節皆同致返
弁候、其金八十六兩下利錢其外二障涯ノ代金式両式分式朱、
右ノ処ニ金式拾両遣候間、余リ候程ニ考候、磯永喜之介工頼
差遣候、可被致安心候、○日本絵図モ相届候、扱猶介殿ヨリ
ノ書翰相届、書中ノ意味細々相心得申候、尤欣然ノ事一昨日

天意ヲモ伺且申上置候間、序モ候ハ、ヒソカニ可被申置候、
此書翰モ殿中ニテ認候外マヘハ、執筆相納不申候、先ハ何モ
用事迄申上候、謹言、

五月廿九日

十郎

壯七郎殿

八月五日立ノ飛脚、廿四日着、細翰致披見候、愈御無事強力
ノ段致安心候、爰元皆々平安喜太郎ニハ、去十六日ヨリ日当
山温泉工御姉様於哥・於八重ニモ差越、善之助ニモ兎角大元
氣ト申所ニハ、イマタ不至候間、同所工廿七日ヨリ遣候、皆
々平和ニ入湯イタシ候段、昨夕下人金助罷帰リ候、右故喜太
郎・善之介ヨリハ、別段書状不遣候、喜太郎ヨリ別紙ノ通、
日当山ヨリ昨日申遣候、扱御方煩ヒモ余程ノ言ニテ為有之ト
見得、干今氣力十分ニ無之由、甚夕按居事ニ候、去冬ハ、江
府ノ大寒ニ決テ当リ候半、夫故嚴暑ニ触、病ヲ相発候義ト存
候、当冬ハ能々相敬寒氣ヲシノギ候様、可被致候、万一当冬
モ寒冒ノ氣味有之候テハ、来夏ハ当夏ヨリモ甚敷感可申候、
少々ノ風邪ニモ、薬用等厚ク可被用候、高知氏別テ信切ニ御
世話給候段、至テ忝存候段モ可被申述候、此節何ソ琉反物類
遣度候得共、能キ見合無之、先月ハ西洋布色々申請候賦ニテ、
差出頼置候間、近日相済可申、右ノ内ヲ見合後便ヨリ遣候間、
其節高知氏工可被遣候、先便ヨリ御方工細上布卷反、高知へ
ノ志ニハ外ニ手拭杯遣候間、早請取ニ相成候半、扱母殿ヨリ

安政四年
か

八月廿九日

十郎

壯七郎殿

細々被申事ニハ、江戸ノ氣候ハ、御国ノ次第二テハ無之候間、
能々万端相敬、且ハ一人ノ心得計リニテ、自然ト養生向キ届
キ兼候管故、兼々良医工相頼、丸薬ニテモ用候様可被致、煎
薬杯ハ、先ハトジマリ業候モノト存候付、此旨深々心得候様
被申事ニ候、猶介殿ヨリ細書被遣候得共、此節モ返書相調不
申、書中ノ細意、能々相心得申候得共、今日迄ハ御都合無之
段可被申置候、尤御当地ニテ請取置候、猶介殿心得書又々被
遣候得共、是ハ其節直ニ江戸表工差上置候間、重テハ差出申
間敷候、橋口源右衛門殿ニハ、干今慎ミテ何タル事モ不被仰
渡候、実ニ氣毒ナル事ニ候、御当地ハ諸作毛至テ盛満ノ事ニ
ハ、是実ニ明君ノ感応ト被存候、先ハ用向迄申遣候、折角々
々時候相敬、文武ノ道秀候様可被相動候、謹言、

細翰相届安心致シ候、於爰元モ皆々平和ニ候、我等此節ノ御
役替ニ付テハ、繁務ハ勿論ノ事ニ付、段々御懇ノ上意且ハ御
親愛ノ御事等、実ニ奉報ニ道無キ義ト存候、扱御方ニモ全快
ノ段申越、一同安心致シ候、掛テハ別テ心配ニ存候間、万端
念入、食事等相敬候様存候、猶介殿工別段書状得不遣候、ヨ
ロシク申可被置候、

一此節金子遣度候処、反物ニテ遣候方ヨロシクト申事候間、
細上布卷反琉球館へ頼相求遣候付、高知氏工示談ノ上、売払
候様可被致候、琉人ヨリ直求ニテ金式兩ニ候間、其心得ニテ

拙方ノ義、直段不申ニ吟味致サセ候方、ヨロシクト存候、喜太郎ヨリモ金子遣度差出候得共、是ト取合ニテ細上布求遣候、一猶介殿ヨリ此節被遣候手紙ハ、拙者心得ノ義有之、其マ、奉入 尊覽置候間、此段ハ序ニ申聞候様可被致候、扱心術ノ正不正ハ、終ニ顯然タルモノニ候間、利義邪正ノ決斷真ツ先キ定候義肝要ノ事ニ候、何事モ早ク眼ヲヒラキ、極地ニ入候様第一ト存候、何モ用事迄申遣候、謹言、

安政四年

七月廿九日

十郎

壯七郎殿

今日ハ堀仲左衛門殿出立ニ付、一筆申入候、弥無事ニ候半、珍重存候、扱我等事去ル十四日、駿河殿宅ヨリ御用ニテ、右八郎・児玉雄之介罷出候処、御書付ノ通被仰渡、只々恐入計ニ候、玉里ヨリ於千衛モ下リ申候、善之介ニモ御役御断ノ書付差出置候、実ニ御役相勤候中一度モ御心付等ノ願モ不申上、無欲ニシテ自家ノ産ヲ破リ新借四百両程ニ及ヒ、持高モ名計ニ相成居候間、此大家内イカ、致シ渡世相計候哉ト、是而已配慮ニ及候、家屋數モ売払、家財モ片付ケ、山野ノ方ニ引移、其方共一所ニ山野江海ノ業ヲ与エイタシ、家内ヲ餓ニ不及様イタスノ外無之間、江戸表都合能御暇イタシ、早ク罷下リ候様可被致候、母殿ヨリ被申候ハ、其方衣類ト無抛持掃リ度品之分、川上氏エ頼置、其外ハ売払候テ罷下候様、可被致下ノ事ニ候、尤金子入用有之候ハ、高崎喜衛殿又ハ川上氏・有馬杯エ相談イタシ候ハ、相叶可申返金ハ、跡以可致候間、

其節可被取計候、高崎其外ハモ形行可被申入候、先此段申入候、謹言、

安政五年

十二月十九日

十郎

壯七郎殿

桜島古里ニ而四月廿七日認

一昨日飛脚モ致着候由、只今御用之義有之、平右衛門致渡海候得共、書状ハ持參不致候、喜太郎ニモ三日出立之筈ト存候、爰元皆々無事ニ候、我等極々元氣盛ニ相成申候、御喜ヒ可被成候、御方困勉之筈是而已ニ候、身之保養ハ、父母ヲ安シ候第一、彼是相敬、少々モ怠無之様可被致候、何モ此方無事ニ候、最早 御下国前ニ差掛、万端御用多ニ候得共、人臣之当然大馬之勞誠ヲ尽、水火ヲヨカシ、君ト民トヲ守可申候、古里へ者、母殿おふき・おとめ・おかね并すま外ニ下女老人江二才金太、反射炉方ヨリ御用船老艘・水子兩人、是ハ垂水へ硝子石採方トシテ、磯永喜之助ヲ遣シ置、磯其外御殿之御用向掛而相勤候手筈、此段者駿河殿其外御小納戸衆へモ正敷置、御用往来之序ニ湯治致度願出候処、尤之事ト被存候間、安心可被致候、我等御暇ニ而湯治へ差越候而者、聊御用差支ニ及候、其訳者存之通老人之任ニ候得者、輕ク共人臣之道、誠ヲ尽、忠貞ヲ極メ可申事ニ候、

四月廿八日七ツ時

一只今、反射炉方ヨリ御用船參リ、御用封等其外其方書状ヲモ番之佐平太致持參候、細翰致披見候、喜太郎ニモ万端都合

ヨロシク致出立候段、無此上事二候、皆々久々之面会業相待申事二候、

一日光出産之蠟石式ツ、殊ニ觀成軒之印ハ嘉山刻候由、別而上手二候、両品共机上ニ備置可申候、

一日光絵図モ珍敷存候、

一、かたひら

一、ひとへ物

右遣候様申越致承知候、然処善之介ニモ当勤テ者ニヨリ、衣服ニ差支候間、御方ノヲ其保着セ申候付、御方ニ者仲兵衛杯へニ而モ相談被致候而、入用之夏服其方ニ而作り候而宜敷候、入目金ハ、被申遣候ハ、早々差登セ可申候、其筋ニイタシ候得者、却而都合ハヨシト母殿ニモ被申事ニ御座候、其方ニ而可成丈ケ物ヲ不作様トノ志者、別而宜事ニ候得共、此節ノハ右通可被致候、

一父筒モ相届何ヨリ二候

御方ニ者、日光杯へ被差越候由、扱々被掃候節ハ、千万之咄多キ事ニ候半、先々何事茂相敬、大事ヲ成ス者ハ、小事ヲ敬候義緊要之事ニ候、何モ後便ト申残、謹言、

四月廿八日認古里ヨリ

十郎

壮七郎殿

一筆申入候、我等大元氣ニ而、今日モ桜島へ渡海、四方之御台場等取立被仰付、昼夜万事之御用ニ而、実ニ一寸之透モ無之候、御方ニモ折角々々身ヲ保、学問・武道第一二候、皆々

平和也、金十兩遣候、其方廻国之志致承知候、母ヨリ申候夜路、又ハ余リ掛ケハツシノ所杯へハ、不参候様ニトノ事二候、母殿歌ニ「をきて思ひふしても夢ニ忘れぬハ子を知る枕の道のころか」又「物せこかこゝろの駒のまかせつゝこと国迄も何をかけるか」、又「思ひきや夢にたに見ぬこと国のしらぬ旅路を廻るべしとは」、先者用事ノミ申入候、謹言

十郎

四月廿八日

壮七郎殿

又薄荷油并橙皮油・菊之油、母殿ヨリ遣候元ユイモ

五月廿九日・閏五月二日両度之書状相達候、愈無相变文武之両道被致研究、万端困勉之筈、尤小事ヲ敬候義者、兼々申聞置候通二候、於爰元茂一同平安、我等壮実ニ每勤イタシ候、喜太郎・善之介ニ茂元氣ニ而、精勤イタシ候、当分者磯へ御入中ニ而、喜太郎ニモ每勤イタシ候、拙者ニモ先日より日勤之処、少々持病差起り、此五六日引入居候、先日ハ一日押而罷出候処、御手ツカラ御葉杯拝領被仰付、殊ニ御馬乗袴地一反、金子二百疋、御前ニ於テ江戸御土産之印迄チヤト御沙汰ニ而頂キ候、其節モ御昼御飯之御下、君前ニ於テイタゞキ申候、其外万端御親愛恐入候次第二候、病氣ハ日々快方ニ向候間、三日中二者出勤之旨ニ候、少モ々々心配二者不及候、扱様トヤラノ辻番ニ而之厄難驚入候次第、古人酒之箴誠意味甚タ深ク候、能々相敬可申事二候、猶介殿後悔之容子

二候哉、万一後悔アラハ目出度事ニ存候、強氣ニ候而ハ、甚
夕嘆息之至ニ存候、何分益友ヲ親ミ損友ヲ不寄、不障之所專
要ニ存候、大山者金子杯ハ最早世話不致トノ趣、ソレナレバ
ソレニテヨロシク候、此節金子式両差遣候間、是ニ而間ニ会
ノ衣服可被相調候、喜太郎ヨリ大山へ借用之金子ハ、元利共
惣而返弁、先達而相濟申候、韓之代金茂、先便ヨリ差登申候
橋口便ニ茂先日当著之段ハ聞候得共、直ニ会取候、人之咄モ
不承候、何分残多キ次第候、

一白細カスリ縞カタヒラ一差遣候間、可被相請取候、扱錦波
之子馬、当分イヨイヨロシク、上之御馬之外ニ者無双ニ
候、先便ヨリ朱粉并朱錠十丁、喜太郎へ申付遣候、相届候半
前以ヨリ遣候心得ニ而、惣々申請置候フニ候、扱御当地之学
者、近々一新可致存候書ハ、四書六経者勿論、文集語類・小
学・近思録・伊洛淵源録等ヲ講究イタシ、国家之良臣ヲ出シ
候様、近日御沙汰ニ可相成ト感夢、扱又右之カタヒラ者黒川
作右衛門殿方へ、喜太郎ヨリ頼遣候間、可被相請取候、只今
金ガバ、参リ、源右衛門殿ニモ今朝御用ニ而、御叱リニ而相
濟候段承候、弥其通ニ候得者、無此上都合ニ候、金ガバ、ノ
申事故、愈安心ニ者不相成候得共、承候俟申遣候、先者万端
小事ナリ共相敬候様可被致候、此段用事而已申入候、謹言、

六月三日

壮七郎殿

十郎

正月廿九日ノ書翰相届致被見候、愈平安被致精勤珍重存候、
於爰元モ皆々無事安心可被致候、壮七郎ニモ元氣ニ学問イタ
シ候由、御方ニハ近々出立ニテ、壮七郎賑々サビシク存候半、
最早御立モ御定ノ筈ト奉察候、此書状ハ江戸ニテ開候哉、道
中ニ相成候哉、定テ四月二日三日ニハ、御発駕ニ被為在候
半、金子五両差登七候様被申遣致承知候、少々相重メ金八兩
遣申候、迫田甚蔵殿・山口喜三左衛門殿御供ノ由候間、知識
七之丞殿工頼、右両人工金子差向遣候付、早々一礼被申述可
被相請取候、右ノ金子ハ、昨日七之丞殿へ直ニ頼相渡置候、
此以來壮七郎工書状遣候節ハ、大山正圓殿工差向ケ頼候テ、
ヨロシク候半ト存候、若又外ニ心得ノ人モ有之候ハ、早々
申遣可被置候、別紙壮七郎工遣候一封、是ハ壮七道中日記ニ
候間、慥ニ壮七工可被相渡候、日記中他見無用ノ所段々有之
候間、左様可被相心得候、万一御発駕後ニテ候ハ、壮七
郎工慥成方ヨリ可被相届候、中原猶介方杯エハ、決テ不遣様
可被心得候、猶介心術ノ事杯書入有之候間、能々念可被入候、
一米手形 一雁皮紙 一八犬伝廿三編

右慥ニ相届候、

一此節ハ、毎ノ封物ハ差上不申候、扱十二月末ニ差上候一封
ハ、藤九殿へ相廻シ、藤九殿ヨリ被差上候筋ニ被申越候得共、
是ハ左様ノ事ニテ決テ無之候、ヤハリ山壯殿工相廻シ、慥ニ
差上候段モ返答有之候、藤九殿工ノ御内用向ハ、別段ノ向キ
ニ御座候、左様可被相心得候、

一、此節御供ニ付テ、江戸出立涯前後ノ都合、能々可被入念
候、御道中昼夜共、心ヲ配リ一寸モ油断無之様、万事利々敷

至誠ニ魂ヲ入可申候、此節ハ、誰エモ書翰遣シ不申候、皆様
久々ニテ御面会ヲ得候義、樂御待申上事ト可被申述置候、是
而已ニテヨロシク候、江戸立跡ノ事ハ、万端壯七郎工次渡シ
都合有之筈ト、別テ安心イタシ候、何モ用事迄申遣候、謹言、

二月廿九日

江夏十郎

江夏喜太郎殿

同 壯七郎殿

喜太郎・壯七郎工細事、此節ハ申遣難ク遅ク相成、只今九ツ
ヲ打候、此封書少々後レ申候間、喜太郎ヨリ早々差上候様、
取計可申候、清水ニテモ宜敷候、能々相敬可被申候、謹言、

二月三日

喜太郎殿

壯七郎殿

金子入用候ハ、早々可被申越候、

此節、橋口源右衛門殿出立ニ付、一筆申入候、愈無御変精勤
ノ筈無此上事候、爰元何モ無異安心可被致候、善之介ニハ去
月廿二日ヨリ、日当山ノ湯治工児雄一ト差越、別テ元気ニ相
成候段申来候、此二十日比ニハ罷掃可申候、去年九月ヨリ此
カタ粥少々ツ、進候迄ニテ、飯ハ一日モ不参候処、此湯治中
ニハ飯モ二碗ツ、参候由、実ニ安心致候、壯七郎ニモ小倉ヨ
リ、去月廿三日ノ一左右有之候間、当月中ニハ其地工着ノ筈

ト存候、扱当分 聖明之

君上文武之道、精々御世話被為遊、別テ難有事奉感動事御座
候、老父既ニ半白ニ近候得共、日々憤発興起到シ、読書ヲモ
止メ不申候、只々嘆息ニ不堪思ヒ苦シシ候事ハ、朝廷一人
ノ良才無之土風、婦スル所ヲ不知候故、四民ノ文章乱ハテ申
候、當時又學問ノ真意ヲ得タル人ハ、龍君一人而已、其余イ
マタ其人ヲ不見、甚夕可憂、甚夕可憂、清水老御厚意モ又不
容易常ニ感心致居候、喜之助度愈御全快ノ筈ニ存候、是以學
問之道、余程長進被致候事ト歎喜之至ニ存候、百氏モ不相變
御忠勤ノ筈、別テ嬉敷存候、大山氏・東郷氏モ御壯実ノ筈、
欣喜之至ヨロシク御伝ヘ、扱龍五郎殿誠忠信義、実ニ老人ニ
候、左リナカラ此老父ノ当 御時代ニ御用立候ト不御用立ト
ハ、最早御聖明之 上様、疾々御明察ノ御事ト奉存候間、我
等ニオヒテハ致安心居候、尤進退用捨ハ、皆天ニ候、且我当
御代ニ御奉公申上候義、常人ノ如ク身ノ榮花ヲ求ムル為ニモ
無之、勢ヒヲ得テ人ニ高ブルノ望ヒニモ無之、実ニ御仁明之
君上ト奉存感スル事、愈深ク此土風ノ衰態ト瘦、百姓共ノ苦
シミト町井奸夫共ノ利ヲ網スルノ不届坏、一日モ見ルニ不忍、
日夜心ノ安キ事無之候、只此事而已ニ候、左リナガラ年月ハ
矢ノ如ク、既ニ半白ニハ近ク、多病ニハ有之、長クハ御奉公
モ相叶申間敷候、其方共益心ヲ勵シ、文武ノ困勉可被究候、
至誠忠勤モ、聖賢道統ノ伝、孔孟・程朱之外ニハ無之候、致
知存養克己復礼倫理ヲ明得スルモ、只志操真実勇猛ノ決心ニ
有之事ニ候、當時又海外ノ奸夫共、漫リニ奇功ニ誇リ、我
朝ヲ慢侮スルニ至リテハ、満国之忠臣良策奇謀、耳ニ充候得

共、其美ヲ得ル者イカ成人ニ候哉、噫一笑三嘆、是朝廷ヲ如何、是父兄ヲ如何、天下何モ愧心薄キ哉、我今死ス共此海外ノ小兒ヲ網セン、其本元只人オ才ヲ得ルニ有、其本元只心術公明正大ニ有リ、其本元只正統ノ學問ニ有リ、其本元只勇猛絶倫ノ決心ニ有之事ニ候、其方共決心シテ困勉セヨ、困勉セヨ、海外各国ノ情態モ又明ラカニ不知候テハ、叶間敷候、天文・地理・測量・推歩・練兵・行事・海上・海岸ノ理数器術惣テ困勉苦学セヨ、敬メヤ怠ル事有ル事勿レ、当時我朝ニ国ヲ利セント為ルニ名有テ、却テ本意ニ害有ル者ハ、蘭学者共也、固陋ニシテ道義ヲ不察、小量ニシテ己ヲ主張スル者ハ、国学者也、博文強記ヲ勤テ、庫中ノ書籍ニ同敷者ハ、世ノ腐儒也、是皆口ニ掛ルニ不足候、其方共兄弟君上ニ奉仕候而ハ、父ノ志ヲ統、誠忠至信ニシテ勢ヒニ心有ル事勿レ、敬ミ勤メテ孔孟回程朱ニ淵源セヨ、今日久々ニ公務ニ閑ヲ得、感ニ不堪申入候、謹言

十月十二日夜

十郎

直義(花押)

喜太郎殿

壮七郎殿

善之助事、此十一日ニハ決テ吉事御座候半、近日可申遣候、苦学困勉人一度シテ能スレハ、己レ千万苦勞セヨ、苦勞セヨ、苦勞セヨ、嗚呼胸クルシ、胸クルシ、嗚呼イカニセン、

正月七日認候、明後九日仁禮雪奄殿出立ニ付、一筆申入也、

喜太郎劍術少々ハ進候由、先ハ嬉敷候、學問ハ困勉ノ筈ニ候、壮七郎・入江駒之丞ト四本四本ノ由、嗚呼は何事ソ、汝程手足ノ達者ニ相成候テハ、最早心術ノ一通ニ候、汝何ゾ一身ヲ頼テ何モ彼モ忘レヨ、捨テヨ、英氣壯実是一心也、外ニハ何モ無キゾ、嗚呼切齒々々何ヲ以歎不_レ覺哉、中庸鬼神ノ理近思録道体ノ至意、深ク思ヘ、深ク思ヘ、嗚呼今夜ノ盃ハ、齒ガミニテ吞候、思ヘヤ強ヨヤ、至誠至誠内外一致、何モ無キ地位而已染候、思ヘヤ強ヨヤ、至誠至誠内外一致、何モ無キ地位端壮正一、是天地自然ノ妙用、思ヘヤ敬メヤ、

二月七日夜

江夏十郎

喜太郎殿

壮七郎殿

三日ノ扶モ相届候、喜太郎ニハ御製藥物掛被仰付候段、壮七ヨリ申遣候、製薬ハ至テ大事ノモノニ候間、能々相敬可申候、有毒無毒ノ雜品、不相混様見覺聞覚格護等ニ至ル迄、念入候様存候、舍密開宗舍密読本等、熟読可有之候、ギードウエーセン図并解板本ニ相成候由、是モ宜敷書ニ候、此書ハ鍊煩全書ニ候、

二月三日

十郎

喜太郎殿

壮七郎殿

青春之吉賀目出度申述候、爰元一同元氣ニテ目出度春ヲ迎候、

年内細事申遣候付、只一筆申入候迄二候、龍五郎殿・正之助殿・大山清水杯へ茂、別段得不差遣候間、其段宜敷可被申述候、扱喜之介義、宰相様思召二而、近々難有筋可奉蒙候間、不遠吉左右申遣候、尤当分別而肥へ元之赤顔二相成申候、何モ安心可被致候、年内飛脚ヨリ金子十兩遣候、早相届タル筈二候、

一、百田紙巻束、兩人へ母ヨリ遣候、

一、手拭五ツ名書之通遣候、

一、拙者刀モ短刀モ、此節出来申候大刀ハ、惣波別而宜敷出来申候、壮七按内之通二候、

一、指宿二而生レ候二才之鹿毛駒一疋、年内川上筋七殿・小牧良助殿セワニ而求申候、此馬ハ、御召之錦波之子二候、当分二而四寸五分程有之候、芸振リ其外申分無之、元之青ヨリ遙二勝リ申候、青者、永吉之主殿殿へ預ケ置候、是モ壮七按内二而候、壮七塩谷へ参リ候哉、入塾之上者、何力遣度候間、左様可被相心得候、猶介殿へ書状遣度相含候得共、此節迄ハ相調不申候、度々御状皆々相届候段モ可被申述候、先者祝儀迄申入候、謹言、

正月三日

江夏喜太郎殿

全 壮七郎殿

江夏十郎

其方ヨリノ飛脚今日迄モ不着候得共、愈無事ノ筈目出度存候、

於爰元モ皆々平安二候間、可被致安心候、京都乱後一左右無之、イカ、ノ形勢二候哉、是ノミ家内案事居候、今日ハ、定飛脚被差出候段承候付、一筆申入候、伊東氏便ヨリ遣候品物書状等、相請取候半、其後伊東氏下人蒸氣船ヨリ出立ノ節モ書状并本結遣候、最早是モ着ノ筈卜存候、今日ハ、只無事ノ左右迄申遣、後便ヨリ細事可申遣候、何事モ相敬行届候様、可被致候、以上、

子九月廿九日

恕醉

喜太郎殿

一筆申入候、皆々様御機嫌能被為入、一同御無事目出度存申候、此方何茂無事廻動致候、今大泊ヨリ伊座敷へ帰リ候、明日者、小根占・辺田へ差越筈二候、へゴ四本并砂仁差遣候間、へゴハ土蔵ノ後ロカアヤメノ辺、茶ノ木ノ脇カニヨクヨク念入植置候様、水ヲ沢山掛候方ヨロシク、砂仁ハ、土蔵ノ後ロヨロシカルヘク、へゴハ、イツレ影ノ所宜敷候、扱、万事ヨクヨク相敬念入候様、可被致候、我等何モ格別不塩梅二者、無之候得共、毎夜安眠出来不申甚夕込候、扱又、川村與十郎殿二者、船中二而病死イタサレ候由、残念至極ニ存候、吉人君子者、天下之至宝ニ候処、天早ク此壱人ヲ去ル、可惜々々実ニ可愛ハ、吉人君子、可憐ハ奸知之人ナルソ、万事オトナシク心得候儀者、勿論之一事信ト義トハ、露計モ心ニ違フベカラス、可敬々々朋友ハ、賢者ヲ親ムヘシ、敬義之居曇髮モ失フベカラス、不備謹言、

二月廿日

十郎

壯七郎殿
善之介殿

十月十二日之書状者、正一郎ヨリ一筆参り候迄二而、其方ヨリ之書状ハ、方々へ手ヲ付候得共、不相見得候、色々案事居候、愈壯実ニ而精勤之筈ト存候、於爰元モ一同無事平安ニ候間、可被致安心候、此節ハ、今朝差掛飛脚立承候間、一左右迄申遣候、数右衛門へモ別段書翰不差上候間、宜敷可被伝候、正二郎二者、去ル廿日比二ハ、大坂迄出張候筈ト申越候間、最長州下向之時分頃、此御知ヨリハ、明日諸軍勢出行之筈ニ候、中野岩七殿・阿多六郎兵衛殿・別府・山口平毛、同日筑前迄出張之筈ニ候、扱其方ヨリ之手紙、去々月モ漸ク尋出シ当月モ今日迄モ不相見得、甚夕心配に存候間、以来伊藤数殿、書状中へ封シ込可被遣候、無左候而者、万一書状中人ニ盗マレ、不相濟訳之品モ有之事候付、能々念入候様可被致候、数右衛門殿、書翰之中へ封シ込給候様、能々被頼置度、品物等有之候節ハ、尚以之事ニ候、先々今日ハ用而已申遣候や、

元治元年
子十月廿九日書

惣辭

喜太郎殿

正一郎殿

一筆申入候、一同御無事ノ筈ト存候、今日ハ小根占ヨリ発足

田代エ一宿ニテ、夫ヨリ始良エ一宿又高山一宿、廿八日二ハ内ノ浦差入、此所エハ、三四日モ滞在可致候、イツレ来月下旬ニハ帰り候半、文武ノ出精ハ勿論之事、火ノ用心ト戸サシ能セヨトノ意ハ、肝要之事、子共皆々念入候様、先日ハ、御本丸エ遣シ候書状、相届候半、無拋義モ候ハ、孫四郎様エ頼、御用封ニテ又中原・市来ノ両子エ頼候様、自分封ニテハ不相届候、先々万事念入候事第一、扱当方ハ、最早別テ暖氣ニ相成、昼ノ内ノ通行ハ、ワタ入一枚モ甚夕入り候様有之候、荒々不備、

二月廿五日

十郎

壯七郎殿

善之助殿

皆々

小根占ヨリ石類其外海老袋等入沓俵、遣シ申候、田代へ昨夜一宿、今日者始良へ差越候、田代之深坑ニ入候処、十五間計モ有之、コウモリニツ飛出候迄二而、何モ不居坑中之石モ取り、市来・中原江向差遣候、扱稽古場ニ而者、御方敬ミ中心得不取忘様、第一之事ニ候、小根占辺田村之雲母二十俵、是以御殿へ届ケ候、錫モ出候処見出旁、都合ヨロシク候、盃者届キ

四郎次エ直ニ遣候、両親ヨリモ厚ク礼共被申候、小根占ニ而十右衛門ト申石切ノ至極正直成者ノ弟、又ハ同人親類之内イツレカ老人遣シ候内約イタシ置候、帰りノ上十右衛門召列レ

参候者二候、先々用事ノミ、早々不備、

二月廿六日

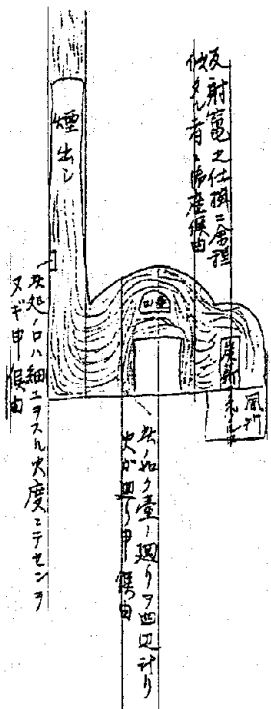
十郎

壮七郎殿

善之助殿

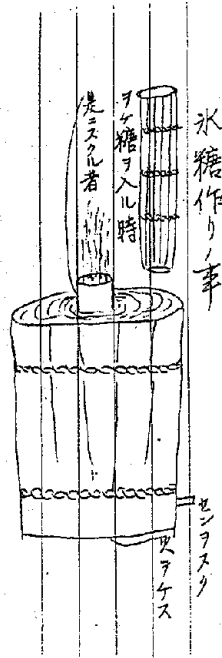
其外

一筆奉啓上候、追々寒氣甚敷罷成申候得共、益以御機嫌克被
為遊御座候御儀、恐悦之至奉存上候、然者去ル十六日、出坂
仕申候処、御書状相届居難有拜見仕り申候、最早五拾日計り
モ御左右不奉承知候間、御安否如何ト日夜奉案居候処、九月
五日ノ御書状ニ追々御快方之段、奉承知、無此上結構之御事
奉存候、何レ江戸着之上御快氣御左右奉承知儀ト、成丈途モ
相急キ申候、然ハ、十月八日ノ間、飛脚ヨリ市来之書状参り
申候処、私共成丈急キ候向可然ト申来申候間、成丈相急キ十
一月二日・三日方ニハ、着府可仕考ニ御座候、長州・石州・
雲州・伯州・作州・幡州之様、經過仕申候、長州ハ、蘭学ノ
事ニモ余程開ケ居申候由御座候、石州杯ハ、小大名計リニテ、
奈ヨリ地形甚悪シキ処ニ御座候、誠ニ山田舎ニ御座候、雲州
ハ、余程地形之宜敷処ニテ、民百姓・町人ニ至ル迄、暮シ等
モ宜敷処ト相見得申候、何レ江戸ヨリ細々申上候様、仕可申
候、私共三人共二一日モ勞シ候事モ無御座候、
毎日十里計リノ道ハ参り申候、至極元氣ニテ罷在申候間、乍
恐 尊意安被思召上可被下候、然ハ肥前ニテ中村奇輔ト申舎
密家ニ取会申候処、マゲネシヤ精ボーシヤウ製之事



委敷相分り、猶介殿ニモ余程感心被致申候「キリシタルガラ
ス」ノ儀モ、竈製造余程御国之竈ヨリ宜敷由御座候、
先大抵此様之者ニテ御座候由、細事ハ、中原氏ヨリ被申上候
半トハ奉存候得トモ、中太被申様ハ、正右衛殿ハ先生ニテ、
私ヨリケ様ノ事申遣事出来不申トノ事ニ御座候間、決テ中村
ノ御製方掛田實善之助ト申人へポットアス「ボーシヤ」ノ製
シ様ハ、申遣ニ相成居可申ニ、市中不合之儀ハ、市之方悪敷
中モ私有之、右之儀ハ、私細々承居申候間、江戸早使ヨリ申
上候様可仕候、左候テ長州ニハ、国産コンジャウ「ドクシヤ
」之様之物多ク出申候間、御国之硫黄杯ト交易致シ度儀、猶
介ハ相談有之タル由ニ御座候、是等ノ事ハ、父上様へ被申
上候儀トハ奉存候へ共、トフモ色々ノ咄ヲ承候ニ、己之功ニ
ナラヌ事ハ致サント申咄ハ度々御座候、先日モ硝子、或ハ舍
密之事モ出来ル事モ多ク有之候得共、骨ヲ折り致シタカラガ
己之功ニナラヌ故、カ、リヤハント之咄シ御座候、誠ニ人ヲ
知ラスシテ、天下之人皆功ヲ争者ト心得居候儀ハ、歎カシキ
事ニ御座候、何レ田實善之助之如キ者、中村奇輔工御遣シ被
遊候ハ、可然儀ト奉存候、田實ハ、余程好人物ニテ御座候、

毛頭惡意杯ハ、無御座候得共、書ハ誦不申候、性質ハ余程宜敷士氣之人ニ御座候、舍密ノ事ハ、余程好ニテ出精スル人ニ御座候、正右衛門殿・矢九郎殿杯モ罷存知之人ニ御座候、仲太君ニモ御存知之人歟ト奉存候、諸国文字ハ、余程開ケ居申候テ、詩歌等ハ刀差者ニ出来ヌ者ハ無御座候得共、人材ハ、天下得難キ者ニ御座候、未一人モ君子ト称スヘキ人ニハ会不申候、先ハ早々用事而己奉申上候、



如是、鉄砲風呂之如キ者ヲ作り、真中ニ図ノ如ク火ヲタキ、湯ノ湧ヲ待テ、図ノ如クセンヲヌキ湯ヲ捨候テ、白糖ノ至極宜敷者ヲナベニ入レ、至極沸湯シタル節、右ノタギリタル☆ノ中へ入、七十日計リ昏処ニ入置候得ハ、冰糖出来候トノ事ニ御座候、糖ノカゲンハ手ニ取テ、ツタツツタツト敢ルカゲンニテ、宜敷様子ニ御座候、只至極沸湯シタル者ヲ自然ニサマシ候ヘハ、只外ニ無御座候由、糖ヲ蓄ニ入ル節ハ、火ヲ惣テ引申候由、猶細事ハ、江戸ヨリ申上候様可仕候、右之段申上置度、且御左右奉伺度如是御座候、誠惶謹言、

安政三年 十月十九日

父上様

江夏惣七郎

口上覚

私事此節急キ飛脚ニテ罷下リ所存之趣、巨細御咄申上候処、当分御用金之儀、御存分ノ御計策立兼候段、致承知、私愚見申上置候処、早速被達御聽候段恐入奉存候、依而手段之首尾書付ヲ以申上候様承知仕、荒々左ニ奉申上候、

一昨春以来、天下之大小名、国力ヲ尽シ周旋イタシ候、費用者、悉ク京撰へ相集居事候付、御用金御計策之成否者、手段之功拙ニ可有御座候、尤往年來御銀司共御用相勸來候、根本者、専琉球諸島之御産物見当ニ而、御用相勸來候儀ニ御座候処、此節外夷御征攘相成候付而者、御産物ノ見当モ無御座候御用相勸兼候者、当然之事御座候得共、從今以來琉球諸島、益御用立候道筋相立候上為致得心候ハ、昔日ニ倍シ御用相勸可申ト奉存候、

一當時之形勢ニ而、尤御急務者、蒸氣船御買入相成、琉人共支那通商之運用被仰付、支那産物昔日二十倍イタシ候様、御手ヲ被為付度奉存候、当分長崎支那之商舶モ、多年之戰爭ニ而纔一二艘之入舶、至而衰微之折柄故、京撰之間モ支那産者高直ニ相成居申候間、天下之形勢四海之人情茂巨細説示、支那通商之成否モ為致得心、本朝之勢外夷之情態モ、自然占來之蘭夷通リ可相成段モ明弁イタシ候ハ、金錢之融通者、商人共之欣望ニ御座候間、如何様共御用相弁シ可申ト奉存候、一御軍備御国用モ年々過分之御入費ニ相成、向後御困窮者、差見得居申候間、前文之一条ニ而、當時御購立相成候ハ、追々御良策モ可有之儀ト存候、

一京撰之間、金談惣宰之人御質問ニ付、存寄申上候処、御取

用之御模様二付、尚亦得卜熟慮仕候処、右之人柄御請有之上坂御座候ハ、金式三拾万位調達之儀ハ、随分相調可申議無子細訳ニ奉存候、乍恐右様大身家、態々金子才覚トシテ御出張ニ付而者、对天下御外聞旁如何敷候付、幸ヒ此節戰爭献勝之御名代トシテ御上京有之、右之序ヲ以金子調達之儀、何様可有御座哉、尤金子才覚候ニ付而者、別而難問ニ被思召候得共、此儀ハ、右之人柄サヘ御ハマリニ付而者、其上之所ハ如何様共調達之計策御座候、何分ニモ右等之御廟議ニ付而者、賤陋之強而難申上訳合ニ御座候間、前後御深慮之上御果断奉仰候、

右者至而籠略ニ御座候得共、大意而已奉申上候、猶策略モ可有御座候、尤右之御用於被仰付者、学力才略モ随分有之候者、御吟味之上被召付度儀ト奉存候、此段モ任御沙汰奉申上候間、可然様御披露奉頼候、以上、

亥七月十六日

江夏壯七郎

中山仲左衛門様

覚

一金三拾両

蘭書アタラス、壹部

一同拾五両

蘭書フヨールレーテイ

ケナーテユール

レイケヒスーソテル

ソークチーレン

金四拾五両

右之通體ニ請取申候、以上、

午七月十五日

八代屋茂三郎

上

中越候紙面、細々披見イタシ候、何モ扱オキ、母君之儀、コト葉ニ絶、夕、夢中々々、御察シ可給候、夫ニツキ中フラ両方懸テ看病給リ候由、嚙御太儀トゾシ候、何事モ謹慎之ニ字ヲ守リ、我ノ帰家ヲマタレヨ、余ハ紙上ニツクシカタク、アナカシコ

五月八日

四郎

おうたとの

尚々別紙中フラエ御届可給候、

既刊史料名

集	史料名	集	史料名
1	薩藩政要録	17	鹿兒島縣地誌(下)
2	丁丑日誌(下)	18	薩摩舊士文章
2	"(上)	19	薩藩先公貴翰(乾)
3	薩摩国新田神社文書	20	"(坤)
4	一向宗禁制關係史料	21	小松帶刀傳・履歴・記事
5	薩摩国山田文書	22	小松帶刀日記
6	諸家大概 別本諸家大概 職掌紀原 御家譜	23	新修舊鹿兒島藩領國・郡・ 郷・村・浦・町附(上)
7	薩摩国阿多史料 山田聖米自記	24	"(下)
8	御登御道中日帳御下向 列朝制度	25	三州御治世要覽 (三五、三八)
9	明治元年戊辰戰役關係史料	26	桂久武日記
10	伊能忠敬の鹿兒島測量 關係資料並に解説	27	明赫記
11	管窺愚考・雲遊雜記簿	28	要用集(上)
12	川上忠塞一流家傳	29	"(下)
13	本藩人物誌	30	桂久武書翰
14	薩陽過去帳	31	本藩地理拾遺集上 (薩摩国)
15	備忘 家久公御養子御願一件抄	32	"(大隅国・諸縣国)下
16	鹿兒島縣地誌(上)	33	江夏十郎關係文書(上・下)

鹿兒島県史料刊行委員会委員

五十音順

唐鎌祐祥	県立視聴覚センター所長
川越政則	元南日本新聞社社長
芳即正	尚古集成館館長
桑波田興	鹿兒島大学名誉教授
五味克夫	鹿兒島女子大学教授
小西四郎	元東大史料編纂所教授
犀川稔吉	元甲南高等学校校長
晋哲哉	元維新史料編纂所員
竹内理三	元早稲田大学教授
原口泉	鹿兒島大学助教
福満武雄	鹿兒島新報社取締役
宮下満郎	維新ふるさと館囑託
桃園恵貞	鹿兒島大学名誉教授
山田尚二	西郷南洲顕彰館館長

第二十三集

江夏十郎関係文書

平成六年三月

発行

鹿児島市城山町五十一
鹿児島県立図書館内
鹿児島県史料刊行会

印刷

鹿児島市下田町一八七九
㈲ニッセイ印刷
電話 四三上六二七七